

山梨県韋崎市

後田第2遺跡

USHIRODA No.2 SITE

JA梨北藤井支所建設工事に伴う発掘調査報告書

1996

韋崎市遺跡調査会

韋崎市教育委員会

山梨県韮崎市

後田第2遺跡

USHIRODA No.2 SITE

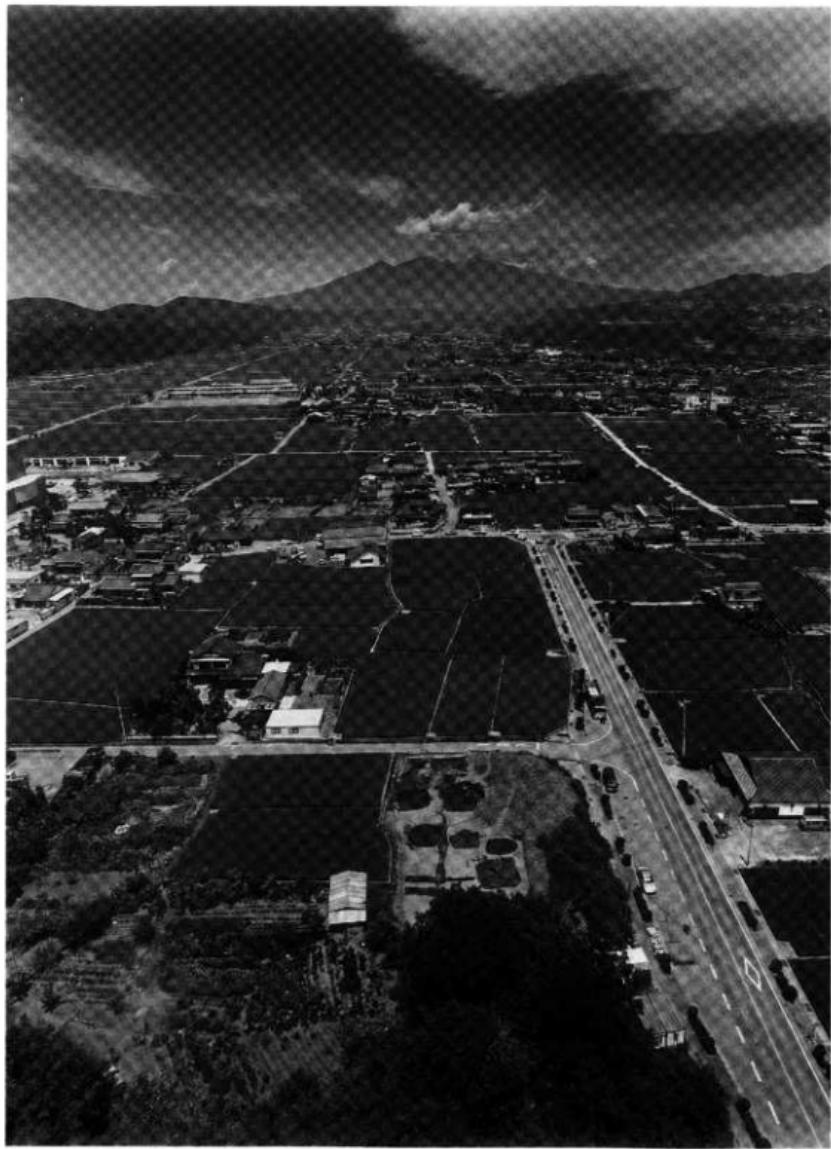
JJA梨北藤井支所建設工事に伴う発掘調査報告書

1996

韮崎市遺跡調査会

韮崎市教育委員会

卷頭図版



後田第2遺跡からハケ岳を望む

序

近年、韮崎市では県営圃場整備事業、一般公共事業あるいは民間開発事業等に伴い数多くの遺跡発掘調査に迫られています。こうした事態に適切かつ迅速に対応するため、韮崎市では遺跡調査会を組織し遺跡保護に努めております。すでに1989年、韮崎市立北東小学校建設にともなう発掘調査に際して、調査面積19,295m²、竪穴住居址423軒、掘立柱建物54棟にもおよぶ遺構を検出した宮ノ前遺跡を始め、何ヵ所かの遺跡調査を行い多大な成果をあげております。

今回ここに報告する後田第2遺跡は韮崎市藤井町北下条字後田地内において1995年にJ.A梨北藤井支所移転に伴い調査を実施した遺跡であります。

遺跡の存在する藤井町は市内を南北に貫流する塙川右岸の河岸段丘上に形成され、古来より「藤井五千石」と称される穀倉地帯として知られております。またこうした肥沃な土地を背景として、太古より人々が生活を営み続けたことは近年の開発事業に伴う発掘調査によって次第に明らかとなっていました。

後田第2遺跡からは弥生時代後期と古墳時代後期の住居址が12軒、時期不明の土坑3基、古墳時代から中世にかけての溝4条が検出されました。弥生時代に関してはこれまで市内藤井平において既に何ヵ所かの遺跡が調査され多大な成果を収めていますが、古墳時代に関してはこれまで市内において検出例の無かった古墳時代後期の住居址が検出され、これにより原始・古代を通じ市内の歴史がほぼ間断無く把握できるようになりました。

このように古くから豊かな歴史のあるこの地域で今回発掘調査が行われたことは実に意義深く貴重なものでありました。貴重な発見があった後田第2遺跡の報告書が今回ここに刊行されたことは喜ばしいことであり、本市の歴史に新たな1ページが加わるとともに、地域の歴史を再認識する機会となれば、この上ない喜びであります。

最後に、発掘調査並びに報告書作成に関し、多大なる御理解と、御協力、また御指導、御助言を頂いた関係諸機関及び関係者の皆様に深甚なる感謝を申し上げる次第です。

平成8年3月31日

韮崎市遺跡調査会

韮崎市教育委員会

会長 秋山幸一 教育長 志村良典

例　　言

1. 本書は、山梨県韮崎市藤井町北下条字後田293, 294に所在する後田第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査はJA梨北藤井支所移転建設に伴う事前調査であり、JA梨北より韮崎市遺跡調査会に依託され、調査が実施されたものである。
3. 発掘調査及び出土品等の整理及び報告書の執筆・編集は韮崎市遺跡調査会調査員伊藤正彦が行った。
4. 石器の石材鑑定では山梨地学会副会長 樋口 正氏のお手を煩わせた。記して感謝申し上げたい。
5. 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々から御指導・御協力を頂いた。御芳名をあげお礼申し上げる。
佐野 隆（明野村教育委員会）、森原明廣（山梨県埋蔵文化財センター）、山下孝司（韮崎市教育委員会）、塙本和弘（静岡県菊川町教育委員会）、静岡県袋井市教育委員会
6. 航空写真測量は株式会社フジテクノに委託した。
7. 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真などは一括して韮崎市教育委員会に保管している。

凡　　例

1. 本書の挿図縮尺は、各挿図ごとに示した。
2. 遺構断面図の水糸レベルは海拔高(m)を示す。
3. 挿図断面図の は石をあらわす。
4. 歴史時代土器断面、白ぬきは土師器、黒は須恵器をあらわす。
5. 遺構番号は調査現場において付けたものである。
6. 住居址実測図、写真図版の遺物番号は、挿図中の番号と対応する。
7. 本書で用いるスクリーントーンは以下の通りである。

遺構実測図中 は焼土の範囲

土器実測図中 は赤彩部分 は黒色処理部分をそれぞれ表示している。

目 次

序 例 凡	言 例
第1章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査方法と調査の経過	2
第2章 遺跡概況	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第3章 遺構と遺物	9
第1節 住居址と出土遺物	9
第2節 土坑と出土遺物	56
第3節 溝状遺構と出土遺物	56
第4節 遺構外出土遺物	64
第4章 まとめ	70

挿 図 目 次

第1図 後田第2遺跡①と周辺の遺跡	6	第31図 12号住居址出土遺物	49
第2図 後田第2遺跡位置図	7	第32図 13号住居址実測図	51
第3図 後田第2遺跡全体図	8	第33図 13号住居址出土遺物	52
第4図 1号住居址実測図	10	第34図 13号住居址出土遺物	53
第5図 1号住居址出土遺物	11	第35図 13号住居址出土遺物	54
第6図 3号住居址実測図	13	第36図 1, 2, 3号土坑実測図・出土遺物	57
第7図 3号住居址カマド実測図・出土遺物	15	第37図 1号溝実測図	58
第8図 3号住居址出土遺物	17	第38図 2, 3号溝実測図	59
第9図 3号住居址出土遺物	18	第39図 1, 2号溝出土遺物	61
第10図 3号住居址出土遺物	19	第40図 3号溝出土遺物	63
第11図 3号住居址出土遺物	20	第41図 遺構外出土遺物	65
第12図 4号住居址実測図	22	第42図 遺構外出土遺物	66
第13図 4号住居址カマド実測図・出土遺物	23	第43図 遺構外出土遺物	67
第14図 5号住居址実測図・出土遺物	25	第44図 遺構外出土遺物	68
第15図 5号住居址出土遺物	26	第45図 土師器分類図	73
第16図 6号住居址実測図	28	第46図 後田第2遺跡出土土師器変遷図	76
第17図 6号住居址出土遺物	29		
第18図 7号住居址実測図	31		
第19図 7号住居址出土遺物	32		
第20図 7号住居址出土遺物	33		
第21図 8号住居址実測図	35		
第22図 8号住居址出土遺物	37		
第23図 9号住居址実測図	39		
第24図 9号住居址出土遺物	40		
第25図 9号住居址出土遺物	41		
第26図 10号住居址実測図・出土遺物	43		
第27図 11号住居址実測図	45		
第28図 11号住居址カマド実測図	46		
第29図 11号住居址出土遺物	47		
第30図 12号住居址実測図	48		

図版目次

巻頭図版 遺跡遠景

- 図版 1 遺跡遠景、調査区全景
- 図版 2 現況、1号住居址及び遺物出土状況
- 図版 3 調査風景、3号住居址及び遺物出土状況
- 図版 4 4, 5, 6号住居址、6号住居址遺物出土状況、作業風景
- 図版 5 7, 8, 9号住居址
- 図版 6 9号住居址カマド及び遺物出土状況、10, 11号住居址
- 図版 7 11号住居址カマド、12, 13号住居址
- 図版 8 1, 3号住居址出土遺物
- 図版 9 3号住居址出土遺物
- 図版10 3, 4, 5号住居址出土遺物
- 図版11 6, 7, 8号住居址出土遺物
- 図版12 9, 10, 11, 12号住居址出土遺物
- 図版13 13号住居址、1号土坑出土遺物
- 図版14 1, 2, 3号溝出土遺物、遺構外出土遺物

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成7年(1995)5月、韮崎市文化ホール前通り線建設工事に伴い、JA梨北藤井支所の移転が必要となった。韮崎市教育委員会では市開発部局・JA梨北との三者で協議を行い、支所移転先(韮崎市藤井町北下条字後田287-1他)の埋蔵文化財確認調査を実施し遺跡の存在を確認した。その結果を基に、新たに山梨県教育庁学術文化課を含めた四者で協議を行い、移転建設工事に先立って建物建設部分約600m²を対象とし韮崎市遺跡調査会を調査主体として、遺跡名は既に小字名をつけた後田遺跡が存在することから後田第2遺跡として発掘調査を行い、記録に留め永く後世に伝えることとした。発掘調査は平成7年6月5日から開始し8月4日に終了した。引き続き遺物等の整理作業を行い、報告書作成までの作業が終了したのは平成8年3月であった。

第2節 調査組織

1. 調査主体 韮崎市遺跡調査会
2. 韮崎市遺跡調査会組織(平成8年3月31日現在)

会長	韮崎市長	秋山 幸一
副会長	韮崎市助役	石井 俊之
	韮崎市教育委員長	真壁 通展
	韮崎市文化財審議会会长	山寺仁太郎
理事	学識経験者	磯貝 正義
	学識経験者	野沢 昌康
	学識経験者	谷口 一夫
	学識経験者	萩原 三雄
	学識経験者	波木井市郎
	学識経験者	志村 富三
	社会教育委員会会长	木下 昭二
参 与	山梨県教育庁学術文化課	出月 洋文
	山梨県埋蔵文化財センター	八巻與志夫
監 事	韮崎市収入役	雨宮 高
	韮崎市監査委員	大柴 左京

3. 発掘調査及び整理作業参加者（順不同、敬称略）

岡本嘉一、小沢高恵、小沢栄子、小沢久江、小沢治代、小沢千代子、大柴欣子、岡本保枝、
小田切昭子、小田切絹江、乙黒きくゑ、五味ゆき子、志村冴子、阿部由美子、上野理江、
樋口浩子、平賀えみ子、石原ひろみ、清水由美子

4. 事務局（平成8年3月31日現在）

事務局長	姫崎市教育長	志村 良典
事務局次長	姫崎市社会教育課長	深谷 卓
事務局員	姫崎市社会教育課主査	内藤 晴人
	姫崎市社会教育課副主査	山下 孝司
	姫崎市社会教育課主任	野口 文香
調査員	伊藤 正彦	

第3節 調査方法と調査の経過

地形を考慮し任意に5mグリッドを南北方向に南から1～9、東西方向に西よりA～Dと設定し調査を行った。表土・耕作土を重機で排除した後、人力で精査を行い遺構の検出に努めた。遺構確認面に到るまでに出土した遺物はグリッド出土遺物として一括して取り上げた。遺構の掘り下げに際しては原則的に平面プランを確認した後、十字にセクションベルトを設定し土層の堆積状況を確認・把握しながら掘り下げを行ったが、遺構の平面プランが確認困難な場合には適宜にトレンチを設定し遺構の範囲を確認しながら掘り下げを行った。遺構確認面以下の出土遺物は原則として出土高さ・位置を平面図に記録後に取り上げた。

調査は北側から南下して行っていた。北側では弥生時代後期・古墳時代後期住居址が重複し個々の平面プランを確認するのに困難だった。また調査を開始したのが梅雨時期だったため調査期間の約1/4は降雨により作業が実施できず、大幅に終了予定がずれ込むこととなった。南側では遺構の重複もそれほど見られず、梅雨明け時に調査が重なったため比較的スムーズに進んだ。

第2章 遺跡概況

第1節 遺跡の位置と地理的環境

後田第2遺跡は、山梨県韮崎市藤井町大字北下条字後田293, 294地内に位置する。

韮崎市は山梨県の北西部、甲府市より北西12kmのところに位置し、南東側は三角形をした甲府盆地の一角にあたる。西側には南アルプスの前衛巨摩山地が走り、東側には秩父山地の前衛茅ヶ岳から続く緩やかな裾野が穂坂丘陵として広大な広がりを見せており、北側は八ヶ岳から韮崎まで30kmに及ぶ韮崎台地があり、その先端は舌状の台地となり本市中心にまで達している。この台地をはさんで東側には秩父山地から塩川が、西側には南アルプスに源を発す釜無川が南流し、本市南側にて合流し甲府盆地へ向かって流れ出している。このように韮崎市は西東北の三方を山で囲まれ、南には平野が開けた地理的環境にある。

遺跡立地の地形は大きく台地上と比較的低地となる河岸段丘上に分けられる。具体的には4地区をあげられる。(1)茅ヶ岳南麓の穂坂丘陵、(2)塩川右岸の河岸段丘上、通称藤井平と呼ばれる地域、(3)本市中央部にある韮崎台地、通称「七里岩」と呼ばれ釜無川・塩川の両河川に挟まれた細長い台地上、(4)釜無川右岸の河岸段丘上である。

後田第2遺跡はこのうち(2)の藤井平地域に位置する。本市の中央部を流れる塩川によって約9.5kmにわたり、幅数百m~1kmに及ぶ平坦で長大な河岸段丘が形成されている。藤井平と呼ばれる段丘面上は古来「藤井五千石」と称される穀倉地帯であったことが知られ、現在でも肥沃な水田地帯が広がっている。しかし、一見すると平坦地の様相を呈する当該地域は塩川の流路が現在のように安定する以前は藤井平の段丘面上で様々に流れを変えたらしく、自然堤防状の埋没微高地が所々に発達していることが微地形分析によって明らかとなっている。藤井平ではこうした埋没微高地上に遺跡が点在しており、本遺跡は標高378mを測る水田下に発見された。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

近年、韮崎市では公共事業、民間開発等の開発事業に伴って、遺跡調査の必要に迫られている。最も組織的調査のメスが入れられている藤井平では縄文時代前期後半から平安時代・中世までの住居址が検出されているが、古墳時代中期・後期の集落遺跡は検出例が過去になく今回の後田第2遺跡、及び今年度に調査を実施した枇杷塚遺跡、板井堂ノ前遺跡が初の検出となった。これによって藤井平ではほぼ連続とした集落様相が把握できるようになった。

藤井平で人々の生活の痕跡が確実に確認できるのは縄文時代前期後半~末である。宮ノ前遺跡(1)では前期末住居址1軒と土坑が、上本田遺跡でも前期末住居址が検出されている。山影遺跡(3)では中期初頭五領ヶ台式期の住居址が2軒発見されている。中期後半曾利式期は後田(8)、北

後田(10)、中田小学校遺跡(18)などから住居址や配石遺構の検出がある。縄文後期では称名寺～堀之内期の住居址3軒が宮ノ前遺跡から発見されている。晩期では住居址1軒が発見された中道遺跡、及び溝状遺構から縄文晚期～弥生前期にかけての土器が多数検出した宮ノ前遺跡がある。

弥生時代では宮ノ前遺跡から弥生前期の水田を検出している。弥生時代後期になると遺跡数の増加が見られ、本遺跡で住居址6軒、北下条遺跡(4)で1軒、下横屋遺跡(5)で8軒、堂の前遺跡(9)で4軒、中田小学校遺跡で住居址3軒の検出がある。いずれも掃描波状文を主体とした中部高地系土器が出土しているが、東海地方の影響を受けたものも見られる。

古墳時代では前期の住居址を検出した後田遺跡、立石遺跡(17)がある。また、七里岩台地上には後述するように百軒近くにも及ぶ住居が検出された坂井南遺跡が展開しており、藤井平が大きな生産基盤となっていたことが窺われる。古墳時代中期では現在の塙川段丘崖近く、藤井町相島に住居址2軒を検出した枇杷塚遺跡(2)がある。地下水位が高く、調査時には次々に水が湧き出す遺跡であった。古墳時代後期では本遺跡から住居址6軒が検出され、坏・甕など当該期の良好な資料が提示できると思われる。また本遺跡の北方300mに位置する坂井堂ノ前遺跡(?)からも住居址2軒が検出されており、次段階への土器変遷を把握するのに良好な遺跡となろう。最後に後期古墳と思われる火雨塚古墳(6)が本遺跡の北西、坂井堂ノ前遺跡の西側300mにある。地元藤井町にはこの古墳に関する昔話しが伝わっており、それによると群をなして「つか」が存在したことが窺われるが、現在残っているのはこの1基のみである。

奈良・平安時代では爆発的な住居址の増加がみられ宮ノ前遺跡の417軒・掘立柱建物54棟、北後田遺跡の52軒、中田小学校遺跡の18軒、堂の前遺跡の16軒、他に北下条遺跡、下横屋遺跡、坂井堂ノ前遺跡、後田遺跡、宮ノ前第2遺跡(12)、宮ノ前第3遺跡(13)、駒井遺跡(14)、前田遺跡(16)、立石遺跡(17)など多くの遺跡がある。

中世では中田小学校遺跡から住居址3軒が検出されている。他に金山遺跡(15)などもある。また藏の前塁址、殿田屋敷、相岱塁址、三光寺塁址などの館跡も知られている。

七里岩台地上では学史的に著名な坂井遺跡(20)を始め、縄文から平安時代までの住居址106軒、そのうち古墳時代前期住居址98軒、方形周溝墓12基を検出した坂井南遺跡(21)がある。また武田氏最後の居城として有名な新府城(19)もこの台地上にある。

釜無川右岸の河岸段丘上には縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器が出土した円野町宇波円井の宇波円井遺跡、縄文中期の住居址3軒を検出した円野町上円井の北堂地遺跡、縄文後期の土器が主体的に出土した神山町武田の新田遺跡(23)がある。弥生時代では遺構に伴わないものの円野町下円井の二反田遺跡、新田遺跡、旭町上条北割に位置する大輪寺東遺跡がある。古墳時代では、初めてこの釜無川右岸の河岸段丘上に組織的調査のメスが入れられ、住居址4軒が検出された旭町上条北割に位置する久保屋敷遺跡がある。平安時代では住居址6軒を検出した新田遺跡、旭バイパス建設に伴い調査された大輪寺東遺跡、住居址2軒と水田址が検出された円野町の二反田遺跡等がある。中世から戦国時代にかけては先の大輪寺東遺跡の調査で溝等で囲まれた建物群の存

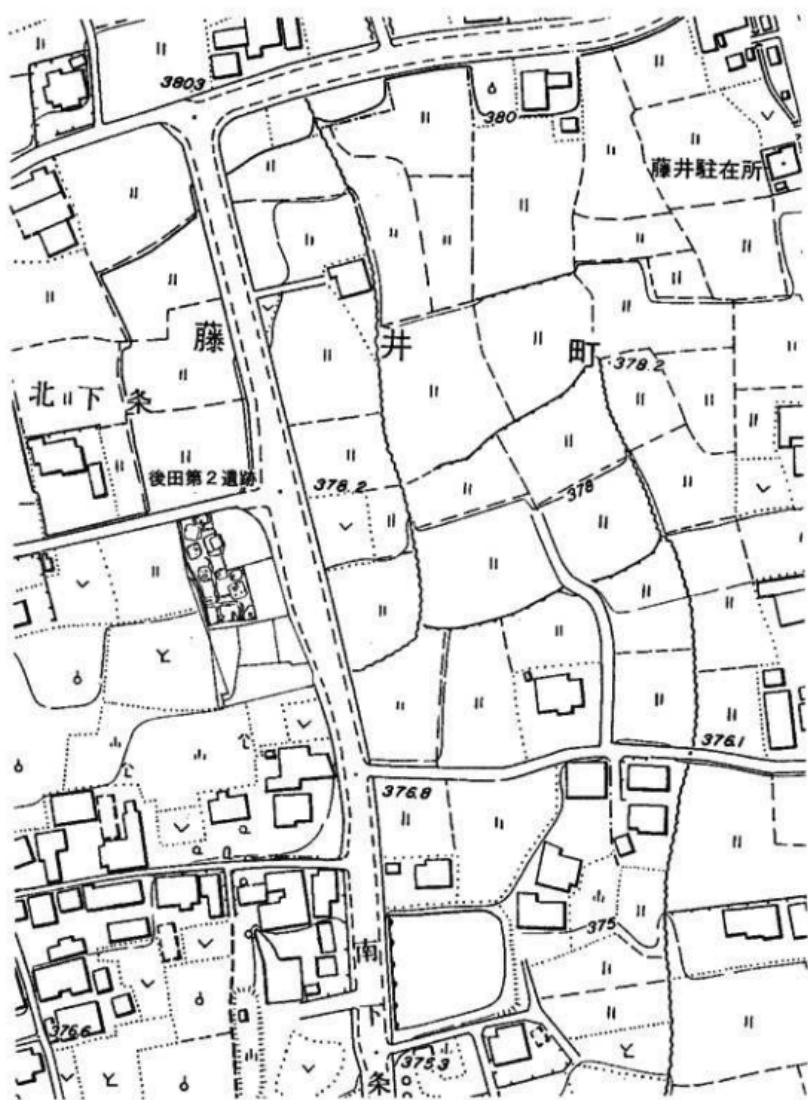
在や、各種の陶磁器類や漆製品が出土し居館の存在が確認されている。戦国武将武田氏の家臣甘利氏の居館が文献資料などにより有力ではあるが断定にまで至っていない。その北方、神山町武田には市指定史跡武田信義館跡(22)がある。武田信義館跡から南西に約1.3kmには武田信義の要害城といわれる白山城(24)がある。このように本遺跡の周辺には、縄文時代から中世の館跡・城郭まで多数の遺跡が存在する。

第1図中に示した遺跡の内訳は、以下のとくである。

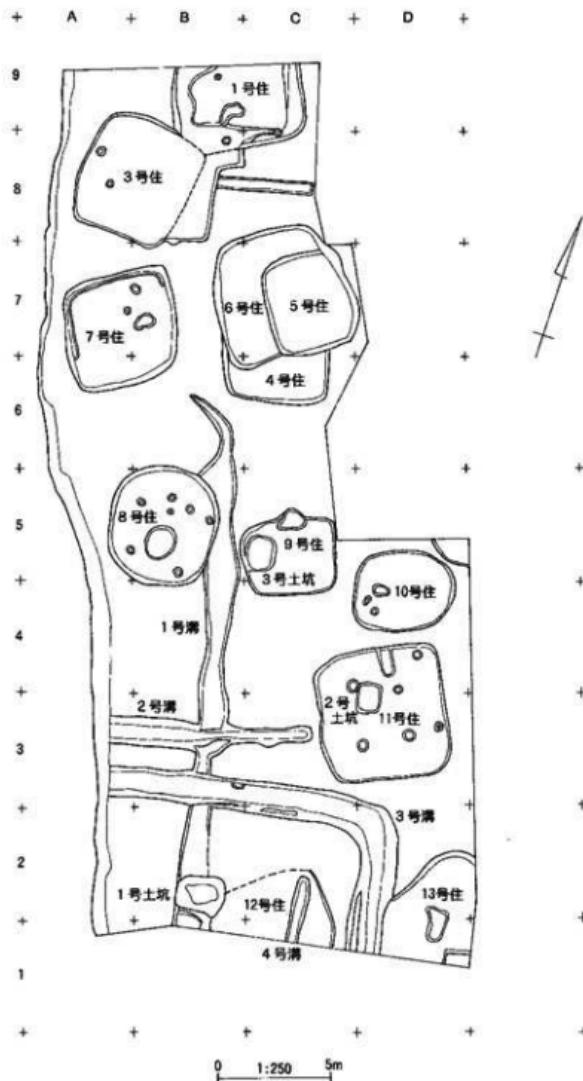
1. 後田第2遺跡（弥生後期、古墳時代後期）
2. 桑原塚遺跡（古墳時代中期）
3. 山影遺跡（縄文時代中期初頭）
4. 北下条遺跡（弥生後期、奈良・平安時代）
5. 下横屋遺跡（弥生後期、平安時代）
6. 火雨塚古墳（古墳時代後期）
7. 坂井堂ノ前遺跡（古墳後期、奈良時代）
8. 後田遺跡（縄文中期、古墳前期、奈良・平安時代）
9. 堂の前遺跡（弥生後期、平安時代）
10. 北後田遺跡（縄文中期、奈良・平安時代）
11. 宮ノ前遺跡（縄文前期末～晩期、弥生前期、奈良・平安時代）
12. 宮ノ前第2遺跡（奈良・平安時代）
13. 宮ノ前第3遺跡（平安時代）
14. 駒井遺跡（奈良時代）
15. 金山遺跡（中世～近世）
16. 前田遺跡（奈良・平安時代）
17. 立石遺跡（古墳前期、平安時代）
18. 中田小学校遺跡（縄文中期、弥生後期、奈良・平安時代）
19. 新府城（中世）
20. 坂井遺跡（縄文前期～中期）
21. 坂井南遺跡（縄文中期、古墳前期、平安時代）
22. 武田信義館跡（中世）
23. 新田遺跡（縄文後期、平安時代）
24. 白山城（中世）



第1図 後田第2遺跡①と周辺の遺跡 (1:25,000)



第2図 後田第2遺跡位置図 (1/2,000)



第3図 後田第2遺跡全体図

第3章 遺構と遺物

調査の結果、竪穴住居址12軒・土坑3基・溝4条が検出された。以下、住居址・土坑・溝の順に説明していく。尚、第2号住居址は欠番となっている。

第1節 住居址と出土遺物

第1号住居址（第4図）

弥生時代後期の住居址である。グリッド掘り下げに際して黒褐色土の広がりを確認し、土層観察用のベルトを残して掘り下げを行う。北側約1/4程度が調査区外に広がる。住居址南西隅が第3号住居址と重複している。遺構は黄褐色砂質土に掘り込まれていた。

位置 B-C-8・9 グリッドに位置しており、主軸はN-112°-Wをとる。

規模・形態 東西5.98m、南北3.75mを計測し、隅丸長方形を呈する。

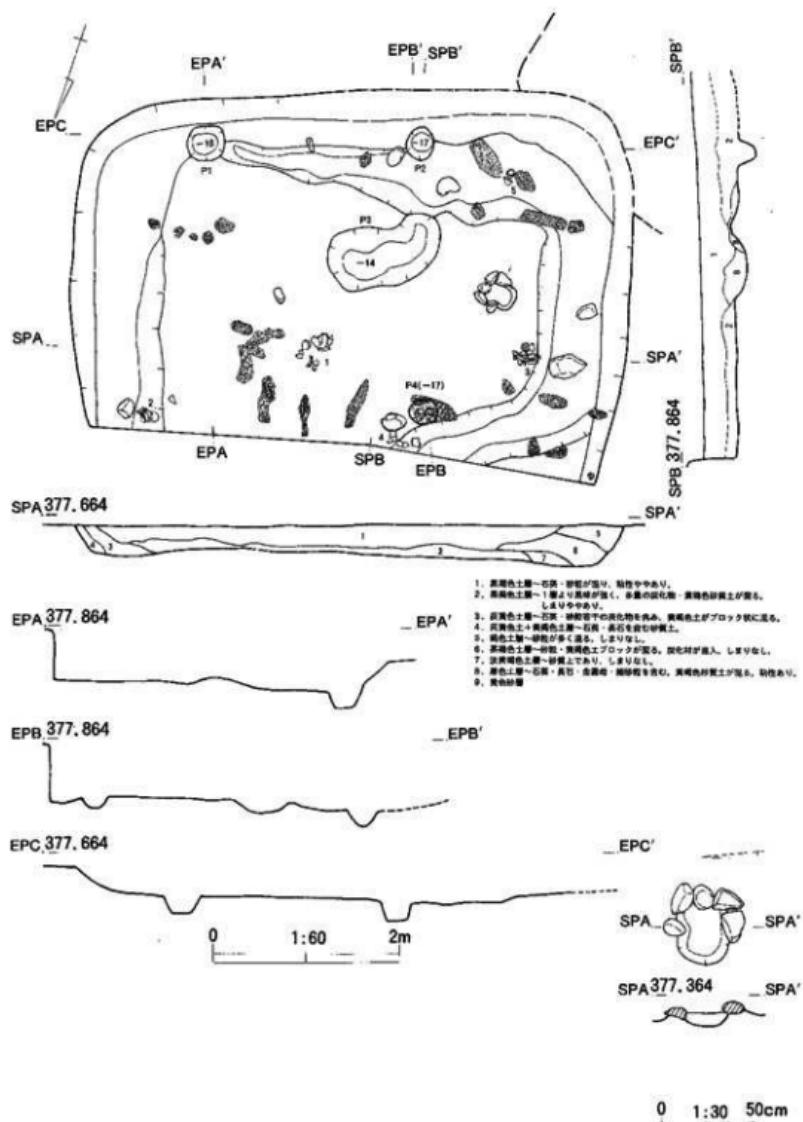
覆土 9層からなる。大部分は1・2層の黒褐色土である、壁際に若干、壁崩落土を含む土層が確認された。いずれも結まりのない軟らかい土であり、住居址床面に近付くにつれ砂粒の混入が多くなった。覆土中からは縄文土器の出土が多くみられ、恐らく流れ込んだものと思われるが、土層の堆積状況からはある程度埋没が進行した時点で、流れ込んだものであろう。床面直上・覆土下層からは炭化材が出土した。

内部施設 確認面から床面まで約36cmを計測し、壁は緩やかに立ち上がる。床面は全体にわたって軟弱であり、特に踏み固められた跡は認められなかった。住居東側が僅かに高くなっている以外はほぼ平坦である。周溝は確認された範囲では全周している。幅60~70cmとやや広く、深さ5cm程度を測る。ピットは4個確認されている。その内、柱穴と思われるものはP1, 2, 4である。いずれのピットも平面円形を呈し、P1は径40×37cmで、深さ18cm、P2は径36×28cm、深さ17cm、P4は径30×28cm、深さ17cmであり、すべてほぼ同規模である。住居中央に平面、不整梢円形をしたP3がある。径124×65cm、深さ14cmを計る。出土遺物もなく用途不明である。

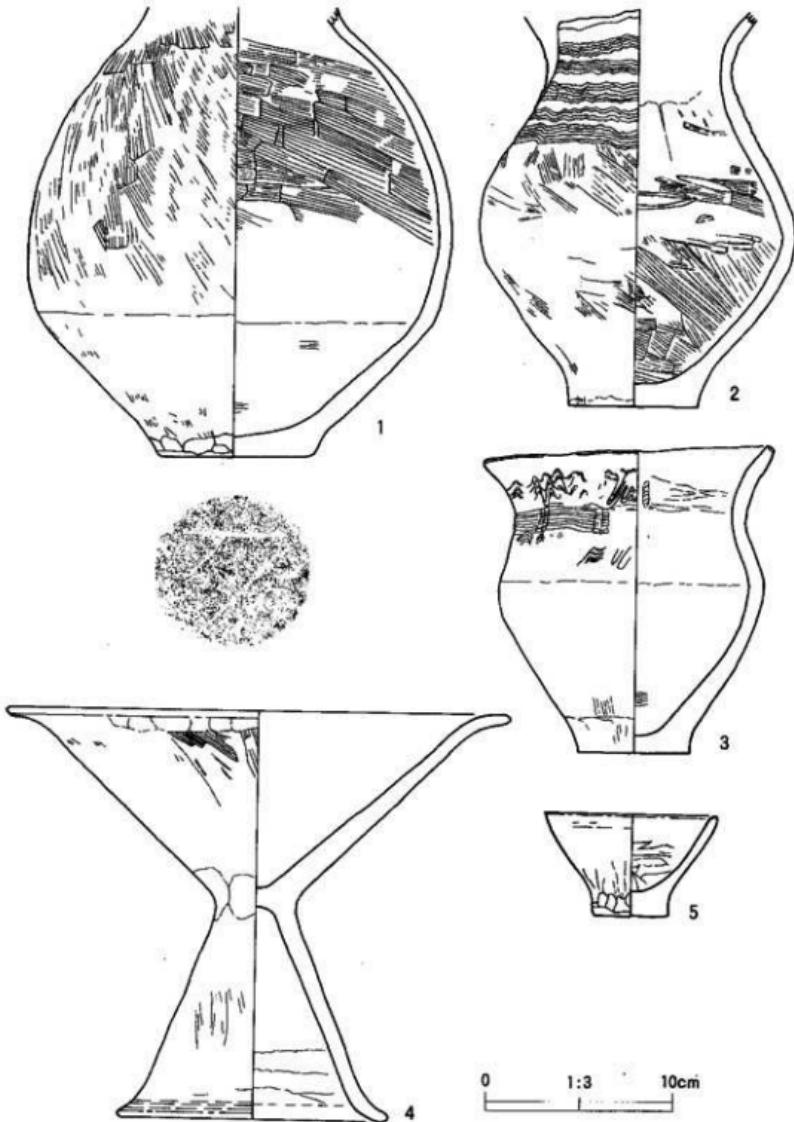
炉 住居中央西壁寄りに掘り込まれている。6個の拳大程度の砾を三方に配した石囲炉である。住居主軸に沿って炉の長軸が設定されており、規模は長軸36cm、短軸27cm、深さ5cmを計測する。覆土は黒褐色をした比較的粘性の少ない土であった。僅かに炭化物が混じる程度で、焼土粒の混入は無かった。

遺物（第5図）

前述したように覆土から出土した遺物の大部分が縄文土器であり、実測したものは全て住居址床面直上から出土したものである。1は口縁部が欠損する以外ほぼ完形の壺である。外面は斜めにハケ整形され、更に縦方向に磨かれている。内面には横方向にハケメが顯著に残る。2の壺は6条一単位の櫛描波状文が5段巡っている。胴中位はハケ調整が施され、底部付近にはナデが見られる。3の壺は2次焼成を受けているため表面の剥離が著しく文様がよく観察できないが、



第4図 1号住居址実測図



第5図 1号住居址出土遺物

波状文は廉状文と同一施文具であれば7条一単位となり、廉状文の上下に2段づつ施文されている。4の高坏は坏部・脚部ともに直線的に開き、端部に到り外側に屈曲する形態である。外面ハケ整形後磨きが行われ、坏部内面は良く磨かれており、脚部内面には横撫でが見られる。

<第1号住居址出土遺物一覧>

(単位cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	弥生土器	盃	(24.0), —, 8.2	金色雲母・砂粒を含み密	明褐色	(外)ハケ整形後ミガキ 底部・木東壁あり (内)肩上部一様ハケが顯著 口縁部欠損 脚部一部欠損
2	弥生土器	盃	(21.0), —, 7.0	砂粒・金色雲母を多く含み密	明黄褐色	(外)樹脂状文が5段ある。 肩中位ハケ整形 (内)脚部一ヘルナデ、脚部ハケ整形 口縁部欠損
3	弥生土器	甕	16.4, 15.5, 6.0	金色雲母・砂粒を含み密	暗褐色	(外)樹脂状文・廉状文がめぐる。 口縁部一刈跡 (内)口縁部一横ナデ後丁寧なヘラミガキ 略光形
4	弥生土器	高坏	21.8, 27.0, 14.6	微砂粒を含み密	にぶい黄褐色	(外)口縁部二横ナデ、脚部一縦ナデ、 捺印痕残る ハケ整形後ミガキ (内)坏部ミガキ、脚部一横ナデ 略光形
5	弥生土器	小型鉢	5.4, —, 4.2	金色雲母・砂粒を含み密	にぶい黄褐色	(外)口縁部一横ナデ、脚部一縦ナデ、 捺印痕残る (内)横ナデ、内外面に黒焼痕 口縁部1/3欠損

第3号住居址(第6図)

第1号住掘り下げ時に南西隅の立ち上がりを検出出来なかつたことから何らかの遺構と切り合つていると考え、精査を行い黒褐色土の広がりを確認した。住居址東壁の立ち上がりが検出できずトレンチを入れながら掘り進めたが、確認に到らなかつた。古墳時代後期の住居址である。

位置 A, B-8, 9グリッドに位置し、主軸はN-4°-Eをとる。

規模・形態 長軸5.37m、短軸4.90m程の規模となり、長方形を呈する。

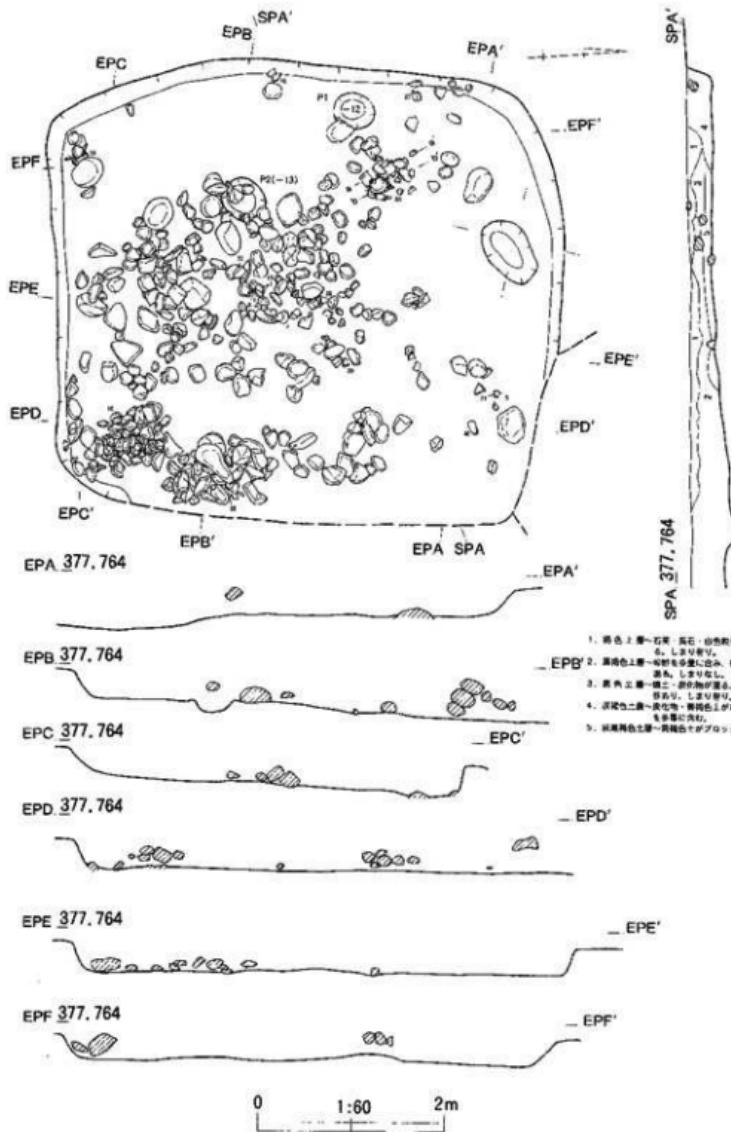
覆土 5層からなる。覆土中から住居址床面まで多量の礫が出土し掘り下げに困難であった。堆積状況からは自然堆積と考えられる。尚、床面の地山は住居西側が粘性の強い黄褐色土であったが、東側は砂質黄褐色土であった。

内部施設 壁高は南壁で30cm、北東コーナー付近で25cmを計測し、緩やかな立ち上がりとなる。床面は住居東側が低くなる。ピットは2個確認されている。P1は径44×38cm、深さ12cm、P2は径44×40cm、深さ13cmであり、どちらも住居址中央西側に位置しほぼ同規模である。

カマド(第7図) 住居址北壁中央から検出された。火床部の掘り込みと、袖石・天井石などのカマドの構築材が残っていた。掘り込みは径73×48cm、深さ5cm程であった。

遺物(第7~11図)

住居址床面から若干浮いての出土が大部分を占める。土師器坏は14点、高坏5点、甕6点、甕(破片資料も含めて)9点、底部が欠損しているため明確でないが、甕の口縁部片が1点出土して



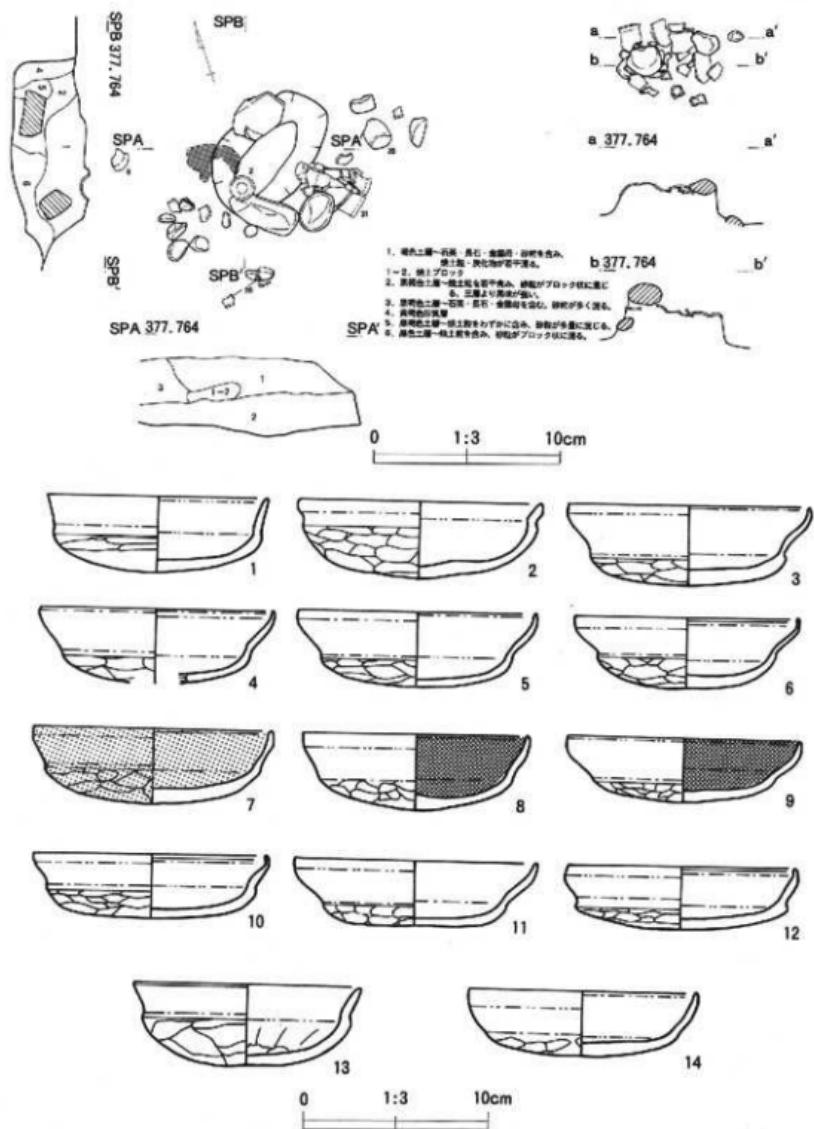
第6図 3号住居址実測図

いる。他に須恵器壺の口縁部・底部破片、石器がある。11図39の磨石様の礫は9図26の小型壺の中から出土したものである。11図40の石斧は1号住に伴う弥生時代の大型始刃石斧であろう。

<第3号住居址出土遺物一覧>

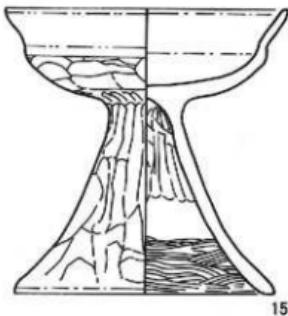
(単位cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	土師器	壺	4.1, 11.8, —	赤・白・黒色粒子を含み緻密	にぶい赤褐色	(内)全面をヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後全面へラミガキ 略完成形	
2	土師器	壺	4.1, 13.0, —	砂粒を多く含み密	(内)にぶい橙色 (外)にぶい褐色	(内)全面をヘラミガキ (外)口縁部へラミナダ 体部へラケズリの後全面を鍛なへラミガキ 完成形	
3	土師器	壺	4.3, 13.0, —	金色雲母、白・黒色粒子を含み緻密	(内)にぶい橙色 (外)黒褐色	(内)全面をヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後全面へラミガキ 略完成形	
4	土師器	壺	4.0, 12.4, —	白色砂粒を含み緻密	にぶい赤褐色	(内)全面をヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後上半のみへラミガキ 1/3残	
5	土師器	壺	4.0, 12.8, —	金色雲母、白・赤色砂粒を含み緻密	黒褐色	(内)全面をヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後上半のみへラミガキ 1/3残	
6	土師器	壺	3.8, 12.0, —	金色雲母、白・赤色砂粒を含み緻密	にぶい赤褐色	(内)全面をヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後上半のみへラミガキ 1/3残	
7	土師器	壺	4.0, 12.8, —	黒色砂粒を含み緻密	赤色	(内)全面をヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後上半のみへラミガキ (内)が剥離している 口縁部へラケズリの下半のみ	
8	土師器	壺	4.0, 12.2, —	白色砂粒を含み緻密	(内)黒褐色 (外)暗褐色	(内)全面をヘラミガキ 黑色處理されている (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後全面を鍛なへラミガキ 略完成形	
9	土師器	壺	3.4, 12.4, —	白・赤色粒子を含み緻密	(内)黒褐色 (外)にぶい赤褐色	(内)全面をヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後全面をヘラミガキ 1/3残	
10	土師器	壺	3.5, 12.4, —	金色雲母、赤・白・黒色砂粒を含み緻密	にぶい橙色	(内)全面へラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後全面へラミガキ 1/3残	
11	土師器	壺	3.5, 13.0, —	赤・白・黒色砂粒を含み緻密	にぶい橙色	(内)全面をヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後上半のみへラミガキ 略完成形	
12	土師器	壺	3.4, 12.2, —	金色雲母、白・黒色砂粒を含み緻密	(内)灰褐色 (外)黒褐色	(内)全面をヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後全面へラミガキ 1/3残	
13	土師器	壺	4.4, 12.2, —	金色雲母、白・赤色砂粒を含み緻密	(内)赤褐色 (外)暗赤褐色	(内)ヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリ 1/3残	
14	土師器	壺	3.5, 12.2, —	金色雲母、赤・白・黒色砂粒を含み緻密	褐色	(内)ヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後全面へラミガキ 1/3残	
15	土師器	高壺	15.2, 15.2, 13.2	白色砂粒を含み密	脚内部暗褐色 黒褐色	壺部(内)ヘラミガキ 脚部(内)ヘラナダ、ハケメ (外)ヘラミガキ (外)ヘラナダ、ハケメ 1/3残	
16	土師器	高壺	13.5, 15.6, 13.6	赤・黒色砂粒を含み緻密	脚内部にぶい橙色 赤彩されている	壺部(内)ヘラミガキ 脚部(内)ヘラナダ、ハケメ (外)ヘラミガキ (外)ヘラナダ、ハケメ 1/3残	
17	土師器	高壺	(10.7) —, 16.0	赤色砂粒を含み緻密	(内)にぶい褐色 (外)赤彩されている	(内)ヘラナダ、ハケメ、輪郭が板あり (外)鏡ハケメ 脚部のみ2/3残	

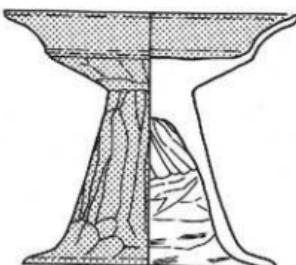


第7図 3号住居址カマド実測図・出土遺物

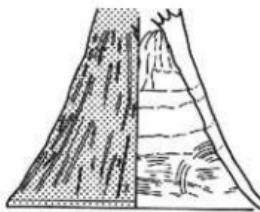
番号	種類	器形	法量	胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
18	土師器	高 环	(6.7), —, 10.8	赤・白・黒色砂粒を含み密	(内)にぶい橙色 (外)黒褐色	环部(内)指痕痕 脚部(内)ヘラナデ (外)ヘラナデ、指痕痕 环部欠損
19	土師器	高 环	(5.5), —, —	赤・白色砂粒を含み密	(内)にぶい橙色 (外)褐色	环部(内)ヘラミガキ (外)ラケズリ、ヘラミガキ、指 痕痕 脚部(外)ヘラナデ 破片
20	土師器	塊	6.2, (16.0), —	白色砂粒を多く含み密	(内)暗褐色 (外)にぶい褐色	(内)ヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリ 1/3残
21	土師器	塊	6.5, 13.0, —	白色粒子を多く含み密	くすんだ橙色	(内)ヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリ 2/3残
22	土師器	塊	(8.5), 18.0, —	金色雲母・黒色砂粒を含み緻密	明赤褐色	(内)ヘラミガキ (外)口縁部一様ナデ 体部へラケズリ 底部と口縁部一部を欠損
23	土師器	塊	(7.4), (17.8), —	金色雲母を多く含み緻密	(内)にぶい赤褐色 (外)にぶい褐色	(内)ヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後ヘラミガキ 1/3残
24	土師器	塊	(6.0), (18.0), —	金色雲母を多く含み緻密	にぶい赤褐色	(内)ヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後ヘラミガキ 口縁部から体部のみの破片
25	土師器	塊	(8.4), (24.0), —	金色雲母・赤・白色砂粒を含み緻密	(内)黒 (外)にぶい褐色	(内)ヘラミガキ、黑色處理 (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリの後へラミガキ 1/4残
26	土師器	甕	15.5, 13.3, 8.0	砂粒を多く含み密	(内)灰褐色 (外)にぶい橙色	(内)ハケヌ、ヘラ跡痕(内底よりNo. 39の心 出上) (外)ハケヌ、ナデ、指痕痕 底部一本割れあり 完形
27	土師器	甕	(32.7) 20.8, 10.0	砂粒を多く含み密	(内)赤褐色 (外)にぶい赤褐色	(内)横ハケヌ、ナデ (外)ハケヌ 口縁部一様ナデ指痕痕あり 底部一本割れあり 肘中位のみ欠損
28	土師器	甕	(28.8), (17.0), —	砂粒を多く含み密	にぶい赤褐色	(内)ナデ (外)木口状工具によるナデ 口縁部一様ナデ、指痕痕あり 1/3残部より胸部はこかれて1/3残
29	土師器	甕	—, —, 5.8	白色砂粒を含み密	(内)黑褐色 (外)にぶい橙色	底に木葉痕 底部破片
30	土師器	甕	30.7, 21.0, 9.6	砂粒を含み密	(内)褐色 (外)黑褐色	(内)ヘラナデ、ナデ、指痕痕、輪様 み痕あり (外)木口状工具によるナデ 口縁部一様ナデ 底部・木葉痕 完形
31	土師器	甕	30.9, 18.2, 9.4	砂粒・金色雲母を含み密	灰褐色	(内)ヘラナデ (外)木口状工具によるナデ 口縁部一様ナデ 底部・木葉痕 完形
32	土師器	甕	(11.3) 16.6, —	白色砂粒を多く含み密	灰黄褐色	(内)ヘラナデ (外)木口状工具によるナデ 口縁部一様ナデ 口縁部の1/3残
33	土師器	甕	(6.0), —, 5.6	白色砂粒を含み密	(内)にぶい赤褐色 (外)黒褐色	(内)指ナデ (外)指痕痕あり、底部ニ木葉痕 胸下半より底部の1/2残
34	土師器	甕	(7.9), —, 7.6	赤・白・黒色砂粒を含み密	明赤褐色	(内)ハケヌ、指痕痕 (外)ナデ、底部ニ木葉痕 胸下半より底部の2/3残
35	土師器	甕(?)	—, —, —	白・黑色砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(内)横ハケヌ (外)綻ハケヌ 口縁破片
36	須恵器	甕	—, —, —	白色粒子を含み密	青灰色	(外)叩き目 胴部下半の破片



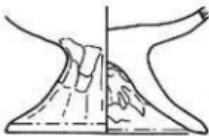
15



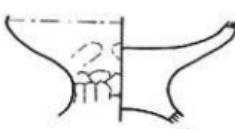
16



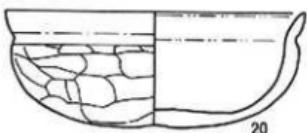
17



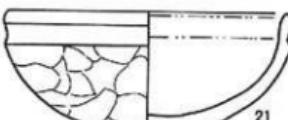
18



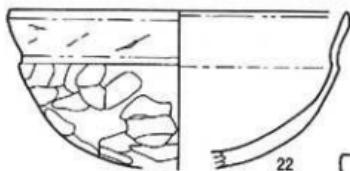
19



20



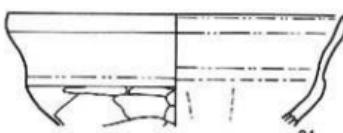
21



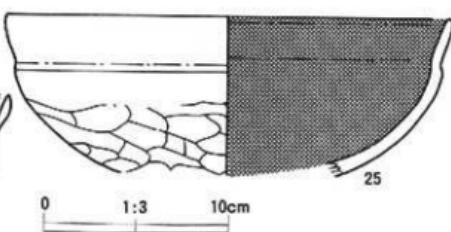
22



23

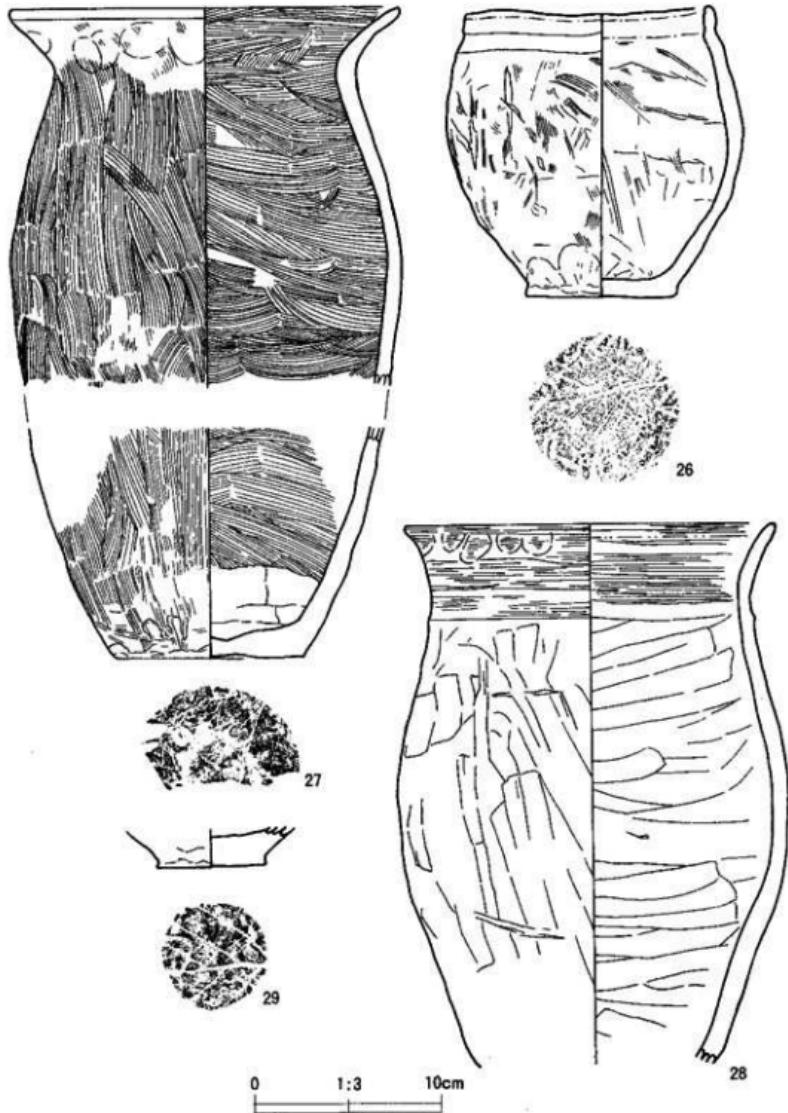


24

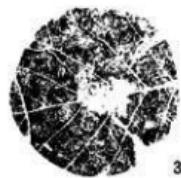
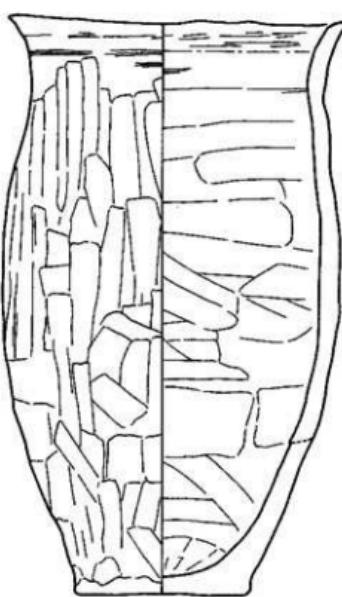
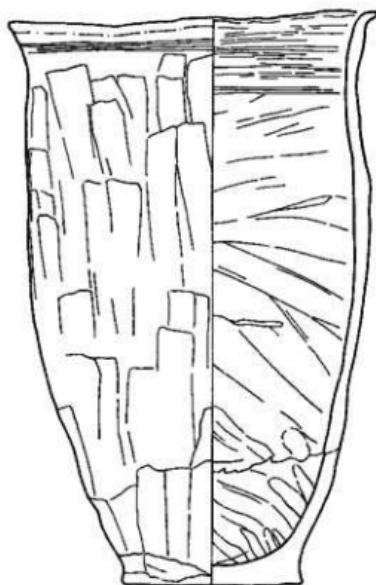


0 1:3 10cm

第8図 3号住居址出土遺物



第9図 3号住居址出土遺物



30



31



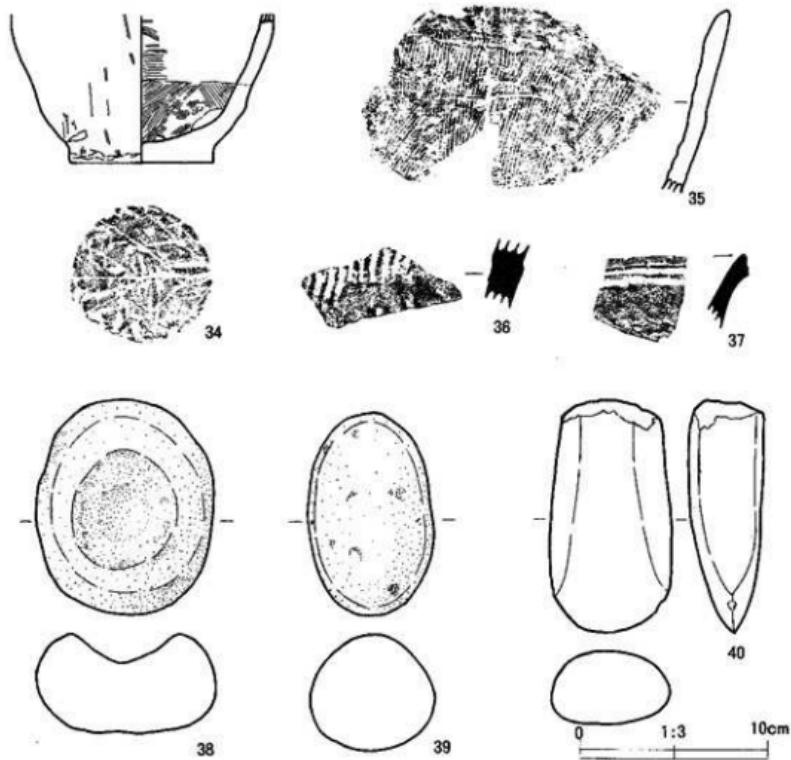
32



33

0 1:3 10cm

第10図 3号住居址出土遺物



第11図 3号住居址出土遺物

(単位cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
37	須恵器	甕	—	—	白色粒子を含み 密	青灰色	(外) 楠描波状文 口縁部破片
38	石器	凹石					
39	石器	磨石					石器観察表(P69)に括する
40	石器	石斧					

第4号住居址（第12図）

グリッド掘り下げに際して、黄褐色土中に黒褐色土の広がりを確認し、土層観察用ベルトを残し掘り下げを行う。第5、6号住居址と重複する。古墳時代後期に位置付けられる。

位置 B, C-6, 7グリッドに位置し、主軸はN-20°-Wをとる。

形態・規模 南北方向約4.34m、東西方向4.67mを計測し、方形を呈するであろうか。

覆土 4層からなり、堆積状況からほぼ自然堆積と考えられる。下層に別の住居址が存在すると判断できた。しかし土層からは住居址北西から北東コーナーの立ち上がりは明確にならなかった。

内部施設 壁高は西壁で35cm、南壁から東壁にかけて約40cmを計測する。床面は南東コーナーがやや低くなる以外、ほぼ平坦であり、踏み固められていた。

カマド（第13図） 住居址北壁中央よりやや東よりに設けられていたと思われる。長軸1.27m、短軸0.72m程の規模であろう。火床部は床面から約23cm掘り込まれ、焼土が厚く約20cm程堆積していた。焚口の袖石が残っており、焼土の広がりと合わせてカマドの規模を推定したが、北壁の立ち上がり、煙道部などは明確とならなかった。

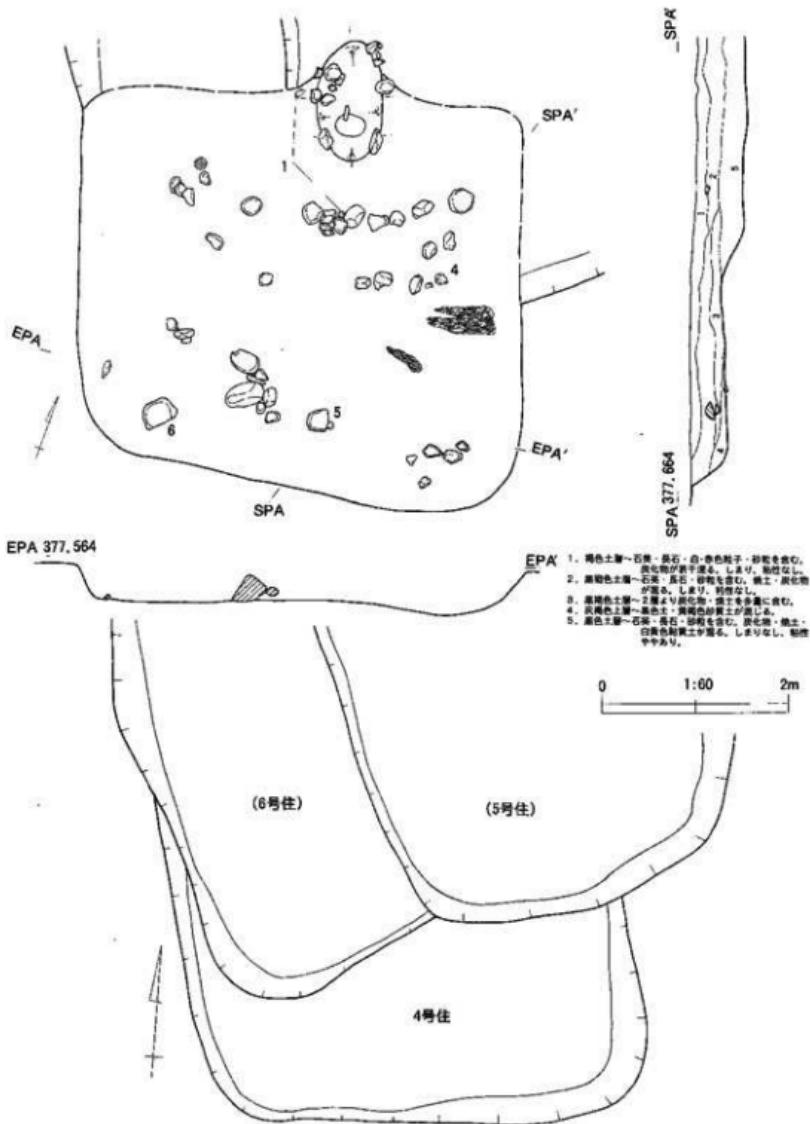
遺物（第13図）

住居址に伴う遺物の出土は少なく、炭化材・焼土・礫が住居址内に散在していた。1は丸底で体部と口縁部の境に稜をもち、口縁部が内湾しながら外反する土師器坏で、口縁部の外反がやや大きくなっている。二つに割れカマドの脇と手前から出土した。2の土師器坏は破片となって出土したもので、口縁部を欠損している。半球形の体部から口縁部が内湾しながら短く立ち上がり、上半で外反するものと思われる。体部と口縁部の境が不明瞭で、体部にヘラケズリがなされることによって、境が僅かに判断できる。砂粒を比較的多く含み、内外面にヘラミガキが施されず、体部の器壁が厚く作られている。3は丸底の底部で内湾しながら短く口縁部が立ち上がる土師器坏で精選された胎土で、焼成も良好である。4は弥生時代の甕であろう。胴下半のみで指ナデの後ハケ調整されている。5の鉢には把手が1ヶ所付く。内外面ハケ調整されている。6の石皿は住居床面に伏せられた状態で出土したものである。側面、底面に磨面がある。

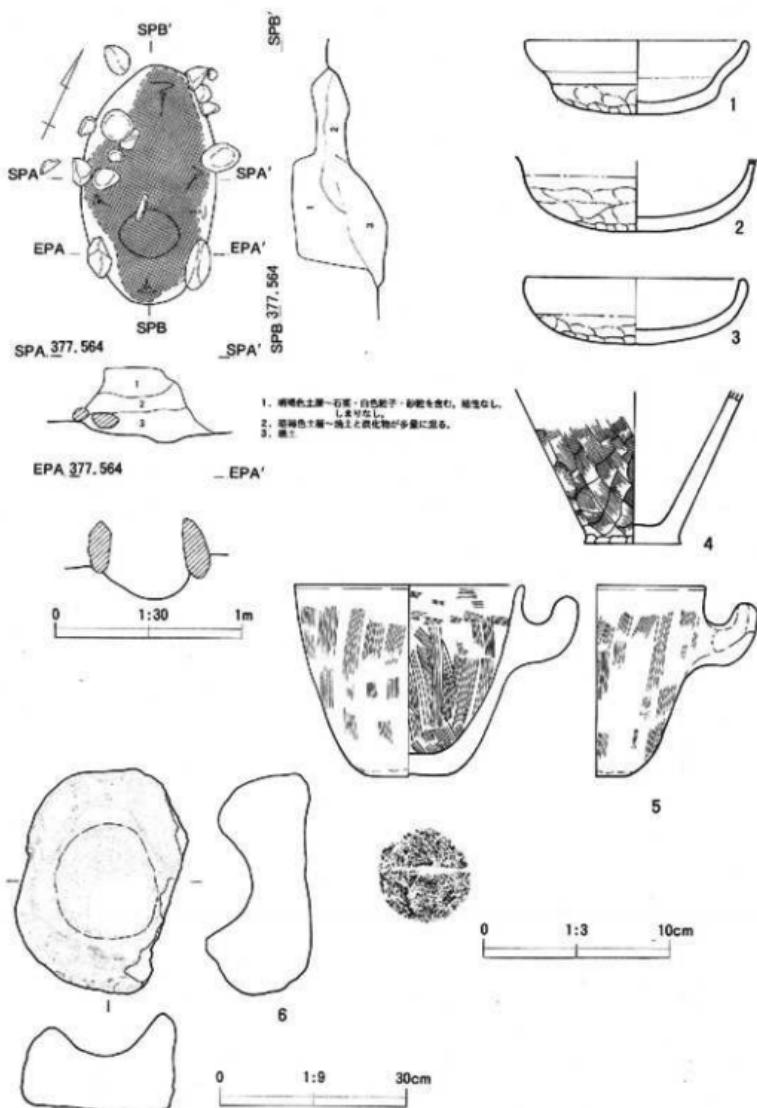
<第4号住居址出土遺物一覧>

(単位:cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	土師器	坏	4.0, 12.0, —	石英、砂粒、赤色粒子を含み緻密	暗褐色		(内)ヘラミガキ (外)口縁部-ヘラミガキ 体部-ヘラケズリの後ヘラミガキ 輪形
2	土師器	坏	(3.9), —, —	石英、砂粒、金色雲母を含む	暗褐色		(内)横ナデ (外)口縁部-横ナデ 体部-ヘラケズリ 1/2残
3	土師器	坏	3.5, 12.0, —	石英、砂粒、金色雲母を含み緻密	暗褐色		(内)ヘラミガキ (外)口縁部-ヘラミガキ 体部-ヘラケズリ 1/3残



第12図 4号住居址実測図



第13図 4号住居址カマド実測図・出土遺物

(単位cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
4	弥生土器	壺	(8.2), —, 5.0	石英、砂粒、金色雲母を含む	茶褐色	(内)ナデ (外)指ナデ後ハケ調整 脚下半のみ
5	上師器	鉢	10.5, 12.0, 5.0	砂粒、少量の金色雲母、白・黒色粒子を含み密	(内)黒褐色 (外)暗褐色	(内)ハケメ (外)ハケメ 口縁部一横線部—ナデ 2/3残
6	石器	石皿				石器観察表(P69)に一括する

第5号住居址(第14図)

グリッド掘り下げに際して黄褐色土中に黒褐色土の広がりを確認し、土層観察用のベルトを残して掘り下げる。調査区外に一部広がるため調査区を拡張して平面プランを検出した。第4、6号住居址と重複している。弥生時代後期の住居址である。

位置 C-7グリッドに位置し、主軸はN-31°-Wをとる。

規模・形態 南北方向4.65m、東西方向4.08mを計測し、隅丸方形を呈する。

覆土 4層からなるが、第3層は4号住の覆土と考えられる。堆積状況から自然堆積と思われる。内部施設 壁高は切り合い関係にあるため東壁が52cm、西壁で10cm程度を測り、他は20cm程度である。黄褐色土を掘り込んだ床面は全体に踏み固められ、東側から南側にかけてやや高くなっている。ピットは1個確認されている。径75×51cm、深さは5cm程度である。柱穴となり得るピット、周溝は確認されなかった。住居址北壁中央付近に焼土が僅かに散在していたが、明確な掘り込み、あるいは床面に被熱した跡など、炉と確認できる痕跡はなかった。

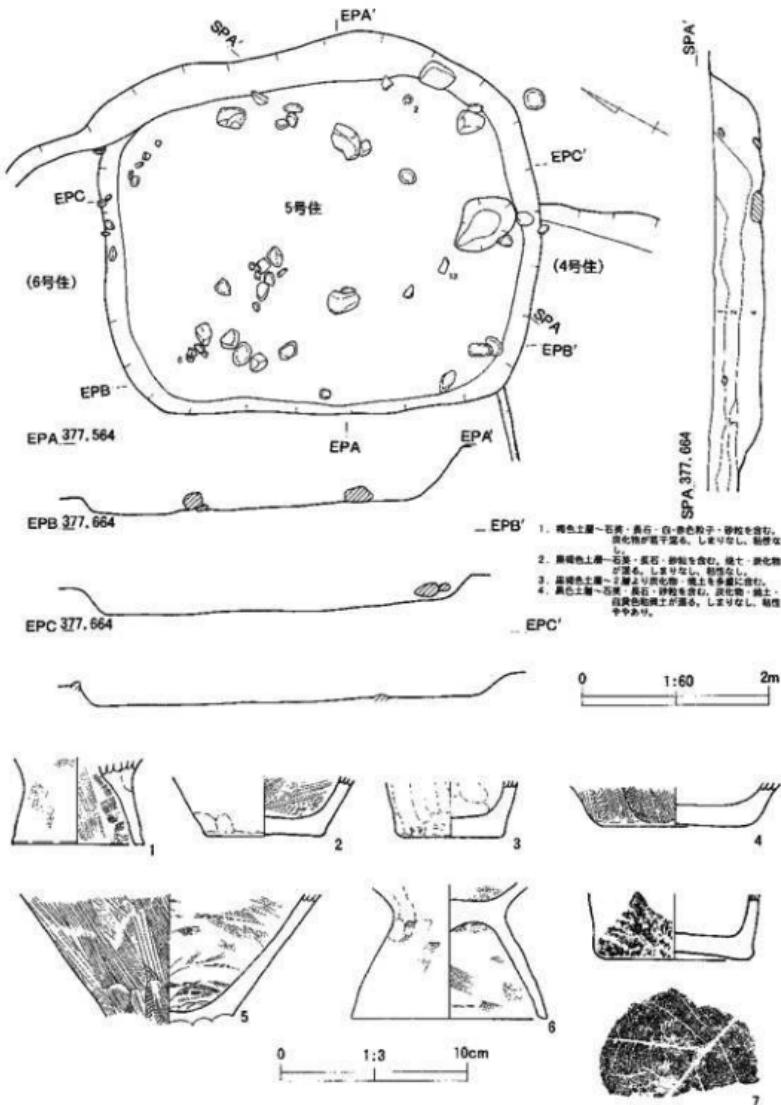
遺物(第14、15図)

住居址全体から出土がみられたが、大部分が覆土中から細片と化したものであり、全体の器形が知れるものではない。1~7には台付壺脚部、壺、甕の底部片を、8以下には口縁部、脚部を纏めた。

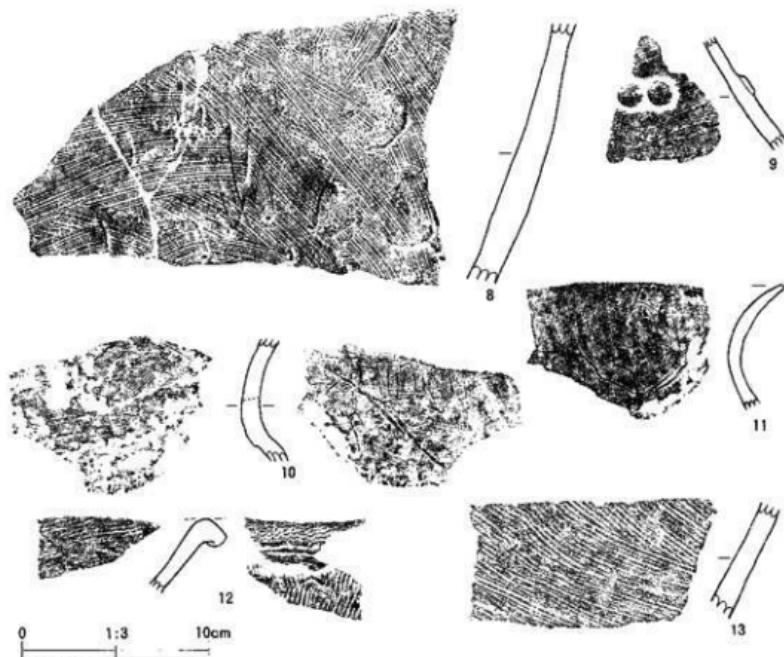
<第5号住居址出土遺物一覧>

(単位cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	弥生土器	台付壺	(4.6), —, 7.2	金色雲母・砂粒を含む	にぶい褐色	(内)指ナデ (外)指ナデの後ハケ調整 脚部のみ1/2残
2	弥生土器	壺	(3.1), —, 6.6	砂粒、金色雲母を含む	(内)暗褐色 (外)茶褐色	(内)指ナデ後ミガキ (外)指ナデ 底部破片
3	弥生土器	甕	(3.0), —, 6.0	砂粒、金色雲母を含み密	茶褐色	(内)指ナデ (外)指ナデ 底部破片
4	弥生土器	甕	(2.0), —, 9.0	白色砂粒、金色雲母を含む	茶褐色	(内)器面が削離している (外)ハケ調、焼成、もろい 底部破片
5	弥生土器	壺	(6.9), —, —	砂粒、金色雲母を含む	茶褐色	(内)ハケ調整後ミガキ (外)ハケメ 底部破片



第14図 5号住居址実測図・出土遺物



第15図 5号住居址出土遺物

(単位cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
6	弥生土器	舟付甕	(7.0), —, 10.4	砂粒、石英、白色粒子、金色雲母を含む	白黄色	(内)指ナデ (外)指ナデ後ハケメ 脚部のみ
7	縄文土器	甕	(3.5), —, 8.4	砂粒、石英、金色雲母を含む	黄褐色	(内)指ナデ (外)単純LR縄文が施文 底部に木葉痕
8	弥生土器	甕	—, —, —	砂粒、金色雲母を含む	(内)黄褐色 (外)黒褐色	(内)横ナデ後ハケメ (外)ハケメ 胸部破片
9	弥生土器	甕	—, —, —	砂粒、少量の白色粒子を含む	黄褐色	(内)ハケメ ボタン状貼付文が2ヶつく (外)ハケメ、横ナデ 破片
10	弥生土器	甕	—, —, —	砂粒、石英、金色雲母を含む	黄褐色	(内)ハケメ (外)ハケメ 頸部破片
11	弥生土器	甕	—, —, —	細砂粒、石英、金色雲母を含み緻密	(内)茶褐色 (外)黒褐色	(内)ミガキ (外)ハケメ 口縁部破片
12	弥生土器	甕	—, —, —	石英、砂粒、金色雲母を含む	(内)赤色 (外)肌色	(内)ハケメ 赤彩されている (外)ハケメ 折り返し部一波状文 口縁部破片
13	弥生土器	甕	—, —, —	石英、砂粒、金色雲母を含み密	黄褐色	(内)ナデ (外)ハケメ、黒斑あり 胸部破片

第6号住居址（第16図）

第4、5号住の掘り下げに際して、黒褐色土の広がりをセクションベルトから確認し掘り進める。

第1号住居址の南側約4mに位置する。弥生時代後期に位置付けられる。

位置 B, C-6, 7, 8グリッドに位置する。長軸方向はN-29°-Wである。

規模・形態 南北5.78m、東西4.73mとなる。形態は隅丸方形を呈する。

覆土 6層からなる。炭化物・焼土の混入が多く、床面には炭化材も散見され、焼失住居と考えられる。

内部施設 壁高は他の住居と重複している関係上南壁で22cm程度を測る以外、他は全て50cm以上を計測する。砂質の黄褐色土に掘り込まれており、床面は軟弱であった。南西隅がやや低くなる以外ほぼ平坦である。その他、周溝、ピット、炉は検出されていない。

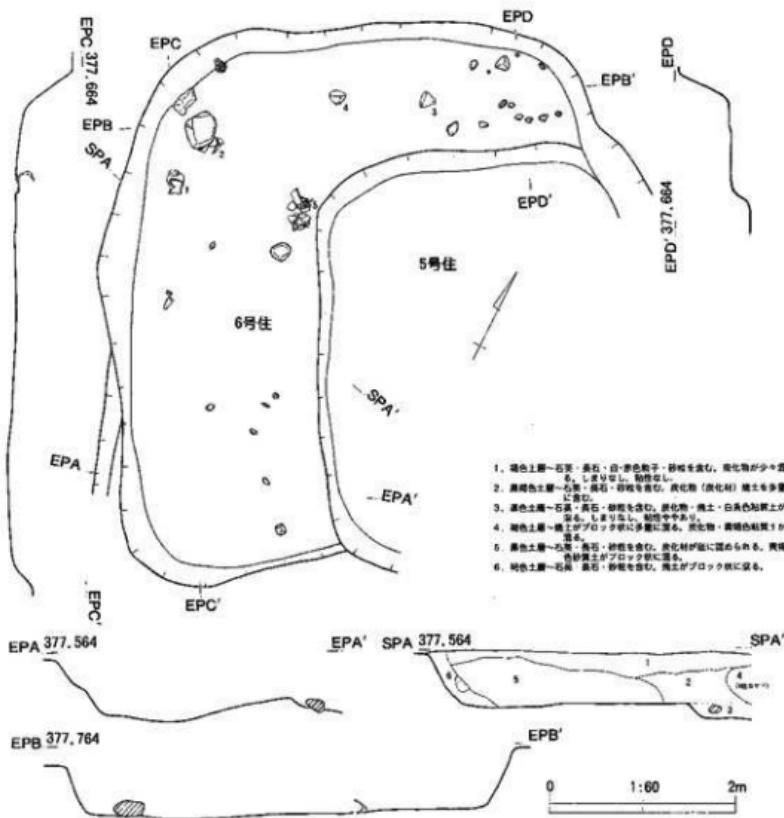
遺物（第17図）

遺物の出土は少ないものの床面直上から器形が判断出来るものが得られた。1は口縁部を欠損する以外、約2/3残存する壺である。最大径が胴下半にあり稜を有する。外面口縁から肩部までハケメが施され、更にミガキが加えられている。肩部には櫛歯状工具による横位の刺突文が、更にその下には羽状の刺突文が連続する。胴中位から底部までミガキが施されている。胴下半には黒斑が認められる。2は口縁部から胴上半を欠損する甕である。胴中位に最大径を有し、内外面とも丁寧にミガキが施される。外面胴部最大径より上はナデにより調整が行われ、櫛描短線文が2段確認される。底部にはナデ及び指痕が残る。3、4の壺は底部より直線的に外反する器形で、どちらも口縁部内外面に横ナデがなされ、段面三角状となる。3は内外面ともナデによる整形が施され、内面に輪積み痕が残る。4は内外面ともミガキが施される。5の甕は外面ハケメを基調とした整形で、内面はナデが施される。6の打製石斧は覆土中からの出土であり流れ込んだものであろう。

<第6号住居址出土遺物一覧>

(単位cm)

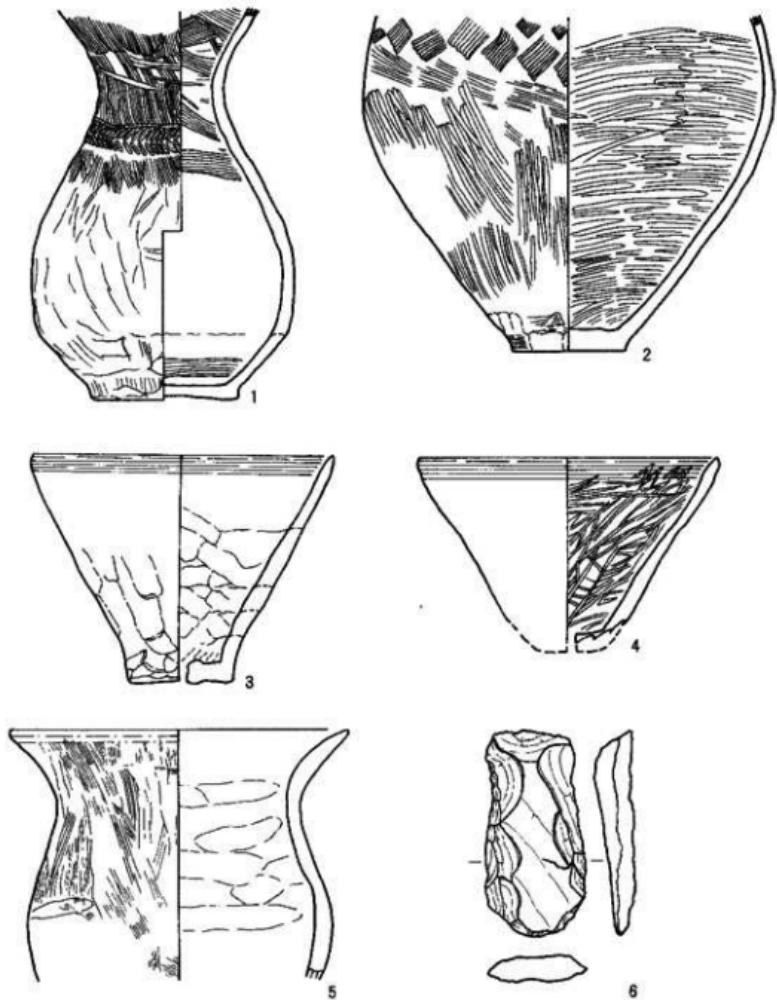
番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	弥生土器	壺	(20.7), —, 8.0	石英、砂粒を含む	黄褐色 (黒斑あり)		(内)口縁-ハケメ 肩部-ミガキ 脇窓-横ナデ (外)口縁から腹部-横ナデのハケメ及び横ナデ、底部 に羽状の刺突文、側面にハケメの後のミガキ 口縁欠損、腰窓から底部までミガキ
2	弥生土器	甕	(18.0), —, 6.0	砂粒を僅かに含み緻密	赤褐色		(内)側部から底部にかけて横ミガキ (外)側面に櫛描短線文が2段施される。 胴中位から底部にかけてミガキ 胴中位から底部まで残
3	弥生土器	壺	12.2, 16.2, 5.6	金色雲母、石英、 砂粒を含む	褐色		(内)口縁に横ナデ、側面から底部にかけて横ナデ 輪積みあり (外)口縁に横ナデ、側面中段から底部に沿ナデ、 孔=1.6cm 口縁部-直列窓 略断面
4	弥生土器	壺	(10.4), 16.0, (3.6)	金色雲母、石英、 砂粒を含む。非常に緻密	灰褐色		(内)口縁に横ナデ、全体に縱方向のミガキ (外)口縁に横ナデ、全体に縱方向のミガキ 孔=0.8cm 底面が等脚する以外完形



第16図 6号住居址実測図

(単位cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
5	弥生土器	甕	(13.4), 18.0, —	金色雲母、白色砂粒を含み密	にぶい橙色	(内)一口縁から胴部に指ナデ (外)一口縁に横ナデ、口縁から胴部に縦のハケヌ 口縁から胴上部まで残
6	石器	打製石斧				石器観察表(P69)に括する



0 1:3 10cm

第17圖 6號住址出土遺物

第7号住居址（第18図）

弥生時代後期の住居址である。グリッド掘り下げに際して黄褐色土中に茶褐色土の広がりを確認し、土層観察用のベルトを残して掘り下げる。6号住の西側約2mに位置する。遺構は黄褐色土の地山に掘り込まれていた。

位置 A, B-6, 7グリッドに位置し、主軸方向はN-58°-Eをとる。

規模・形態 南北4.74m、東西5.00mとなる。形態は隅丸方形を呈する。

覆土 7層からなる。下層に炭化物・焼土の混入が多い。特に炉周辺に炭化物が散見された。第2層中から遺物が多く出土した。堆積状況から自然堆積と思われる。

内部施設 壁高は北・西壁で60cm程度を測る以外、他は40cm程を計測する。壁の立ち上がりは北東コーナーがやや垂直である以外緩やかに立ち上がる。床面は住居北側が踏み固められ、南西隅がやや高くなる以外はほぼ平坦である。周溝は北東コーナーから西壁中央まで巡り、幅16cm、深さ5~8cm程である。ピットは2ヶ確認された。P1は径45×45cm、深さ15cmで平面正円形を呈する。P2は径35×30cm、深さ10cmを測り、平面橢円形を呈する。

炉 住居址中央東壁寄りに検出された。径101×58cm、深さ11cmを測る。平面長橢円形を呈し、覆土中からは焼土粒・炭化物が混じり、特に住居中央寄りに焼土がかたまって検出された。

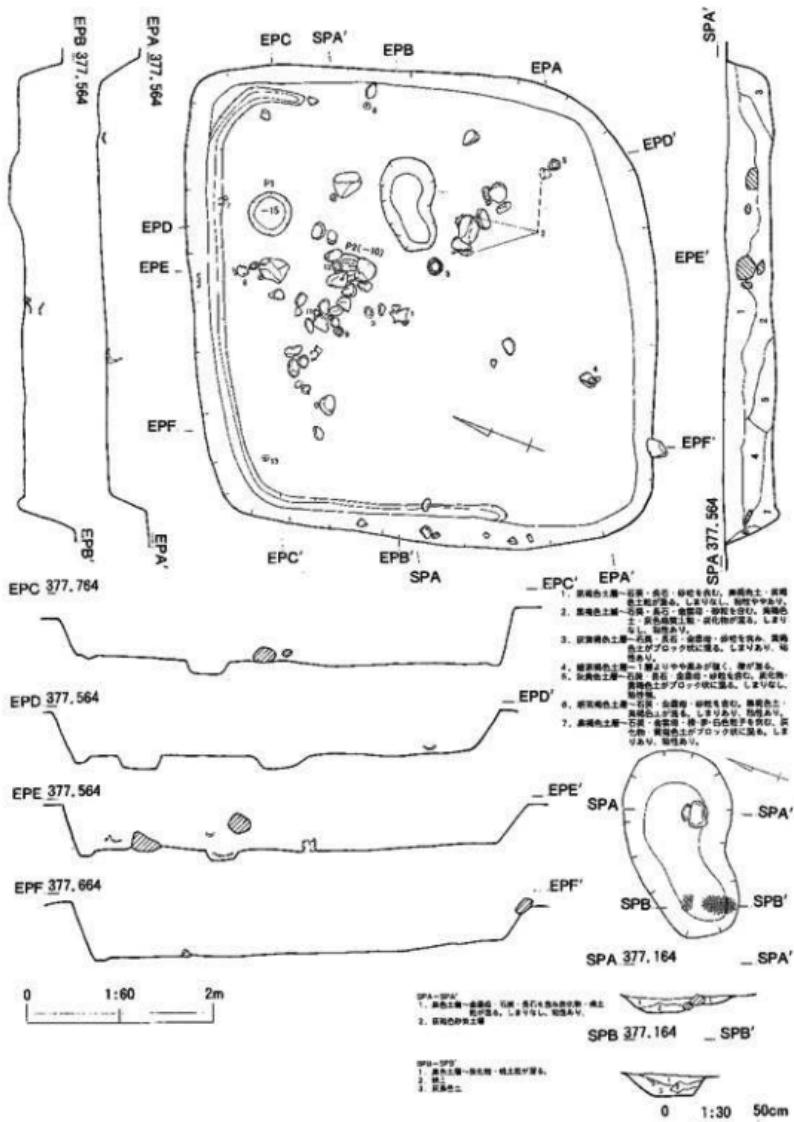
遺物（第19, 20図）

住居北側に集中し、第2層中より多くが出土した。1は住居址中央床面直上から横位の状態で単独に出土した口縁部から頸部にかけての壺である。外面共にハケメが施される。2, 3は胴部最大径が上位に有り、櫛描波状文・簾状文が施される壺である。2は8条一単位の櫛齒状工具により波状文・簾状文・短線文が施され、胴部表面は二次焼成を受けたためか剥離が著しい。内面は赤彩され丁寧にミガキが加えられている。3も二次焼成を受けたためか底部から口縁部まで剥離が著しい。口縁部に刻み目を巡らし、胴部から6条一単位の波状文を2段、頸部に7条一単位の簾状文を、口縁部に4条一単位の波状文を2段の順で施している。内面口縁部から頸部までハケメが、胴部以下にナデが施される。6, 7は赤彩された高杯である。どちらも外面、杯部内面が赤彩され、赤彩される部位は丁寧にミガキが施されている。6の杯部は内湾しながら外反し、口縁端部に至り外側に屈曲する深身の椀形である。4, 5, 8~12の底底部片はナデ、ハケ調整等が施され、14~18の口縁、胴部には櫛描波状文・簾状文・短線文が施されている。

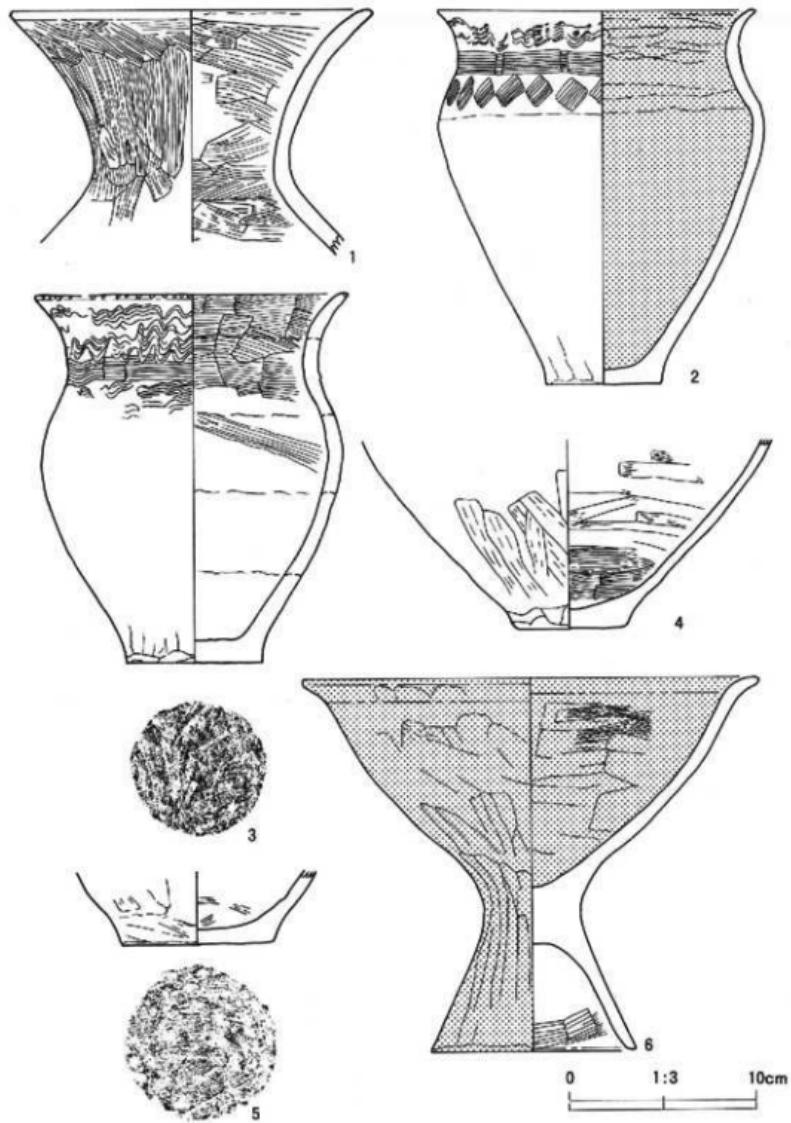
<第7号住居址出土遺物一覧>

(単位cm)

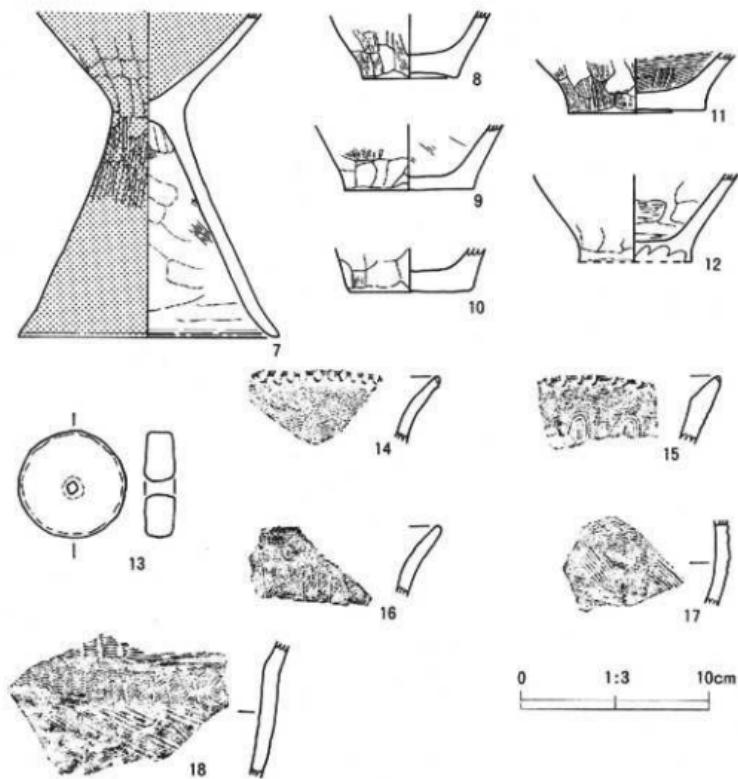
番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	弥生土器	壺	(13.0), 19.4.	—	金色雲母、砂粒を含み密	にぶい黄橙色	(外)ハケメ、頸部以下ミガキ (内)ハケメ調整後ナデ 口縁部のみ残
2	弥生土器	壺	19.9, 17.0.	6.2	金色雲母、砂粒を含み密	灰褐色 (内)赤彩	(外)櫛描波状文・簾状文・短線文 胴部表面剥離 (内)ヘラミガキ 略完形



第18図 7号住居址実測図



第19図 7号住居址出土遺物



第20図 7号住居址出土遺物

(単位cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
3	弥生土器	甌	19.6, 16.6, 7.2	金色雲母、砂粒を含み密	暗褐色	(外)口縁部一筋み 脚部一帯横波状文 (内)口縁部一ハケメ 脚部一ナデ 植物模あり 端完形
4	弥生土器	甌	(10.0), —, 6.2	金色雲母、砂粒を含み密	褐色	(外)縦位にミガキ 煙が付着 (内)脚部一横ナデ 底部一ハケメ 底部のみ残
5	弥生土器	甌	(3.8), —, 8.2	金色雲母、砂粒を含み密	褐色	(外)縦ナデ (内)横ナデ 底部破片
6	弥生土器	高環	19.8, 24.4, 11.0	金色雲母、砂粒を含み緻密	外面と环内面赤彩 脚内面にぶい黄褐色	环部(内)ハケ調節後ミガキ (外)ミガキ 脚部(内)ナデ及びハケメ (外)ミガキ 环部—1/4 脚部—端完形
7	弥生土器	高環	(17.2), —, 14.0	砂粒を含み緻密	外面と环内面赤彩 脚内面明褐色	环部(内)ミガキ (外)ミガキ 脚部(内)ナデ (外)ミガキ 脚部I/2欠損 口縁部欠損
8	弥生土器	甌	(3.4), —, 5.0	金色雲母、砂粒を含み密	にぶい黄褐色	(外)縦位にハケメ (内)ナデ 底部破片

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
9	弥生土器	甕	(3.4), —, 7.0	金色雲母、砂粒を含み密	褐色	(外)指頭痕、ハケメ (内)ナデ	底部破片
10	弥生土器	甕	(2.3), —, 6.6	金色雲母、砂粒を含み密	暗褐色	(外)指頭痕 (内)ナデ	底部破片
11	弥生土器	甕	(2.9), —, 7.4	金色雲母、砂粒を含み密	暗褐色	(外)ハケメ (内)ハケメ	底部破片
12	弥生土器	甕	(4.6), —, 6.0	金色雲母、砂粒を含み密	暗褐色	(外)指頭痕、底部剥離 (内)横ナデ	底部破片 底部剥離
13	土製品	紡錘車	(厚さ) 1.6, 5.7, 1.0 (孔)	金色雲母、砂粒を含み密	黒褐色	ナデ整形される	完形
14	弥生土器	甕	—, —, —	金色雲母、砂粒を含み密	黒褐色	(外)口縁部一割み・櫛描波状文 (内)ハケ調整後ミガキ 口縁部破片	
15	弥生土器	甕	—, —, —	金色雲母、砂粒を含み密	茶褐色	(外)口縁部一割み・櫛描波状文 (内)ミガキ 口縁部破片	
16	弥生土器	甕	—, —, —	金色雲母、砂粒を含み密	黒褐色	(外)櫛描波状文 (内)横ナデとミガキ 口縫部破片	
17	弥生土器	甕	—, —, —	金色雲母、砂粒を含み密	暗褐色	(外)櫛描波状文・短線文 (内)ハケ調整後ミガキ 肩部破片	
18	弥生土器	甕	—, —, —	金色雲母、砂粒を含み密	暗褐色	(外)櫛描波状文・塵状文 (内)ハケ調整後ミガキ 肩部破片	

第8号住居址（第21図）

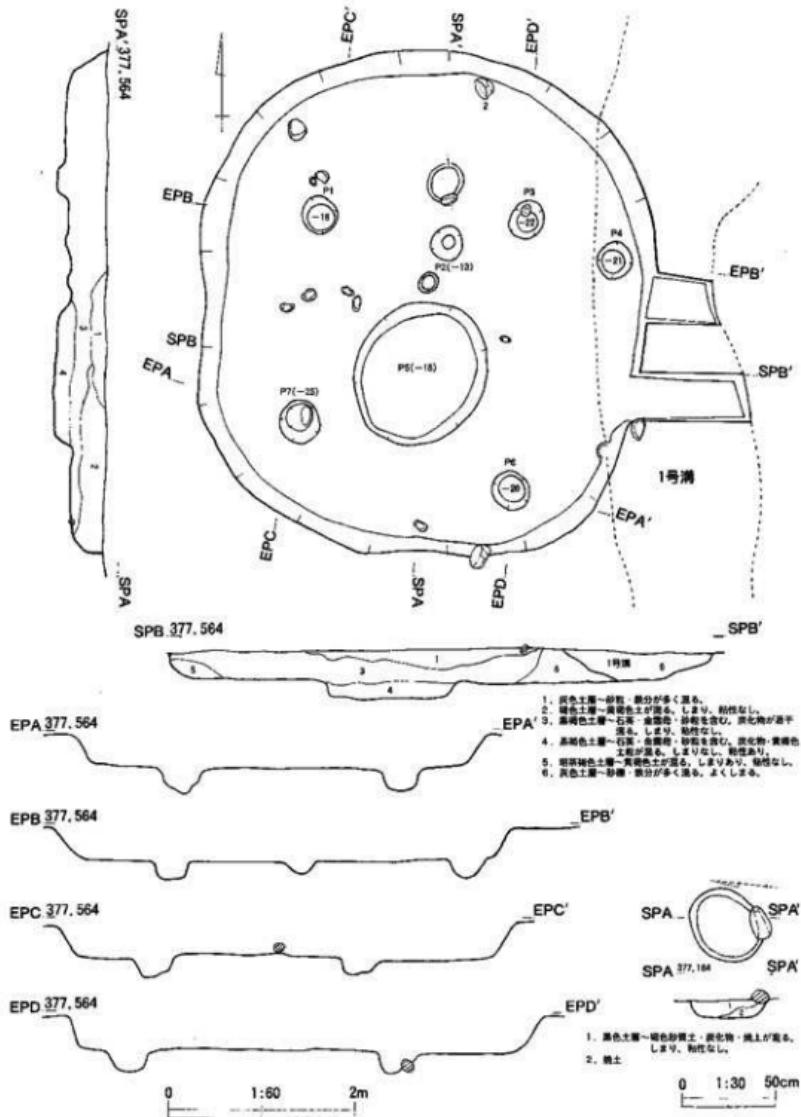
弥生時代後期の住居址である。グリッド掘り下げに際して黒褐色土の広がりを確認し、土層観察用のベルトを残して掘り下げる。住居址東側で第1号溝と重複している。遺構は黄褐色土に掘り込まれていた。

位置 A, B-5 グリッドに位置しており、主軸はN-1°-Wをとる。

規模・形態 南北5.35m、東西4.62mを計測し、小判形を呈する。

覆土 6層からなる。大部分は第3層の黒褐色土であり、締まりのない軟らかい土であった。住居址床面に近付くにつれ砂粒・炭化物の混入が多くなった。

内部施設 壁高は北壁で40cm、他は35cm前後を計測し、壁は緩やかに立ち上がる。床面は全体に踏み固められ、ほぼ平坦であった。ピットは7個確認されている。その内、柱穴と思われるものはP1, 3, 6, 7である。いずれのピットも平面円形を呈し、P1は径40×38cmで、深さ18cm、P3は径41×35cm、深さ22cm、P6は径42×38cm、深さ20cm、P7は径47×42cm、深さ25cmであり、すべてほぼ同規模である。他に住居中央と東壁際に平面円形を呈するP2, P4, P5がある。P2は径36×33cm、深さ13cm、P4は径40×37cm、深さ21cm、P5は径1.58×1.37m、深さ18cmを測る。いずれのピットからも出土遺物はなく使途不明であるが、P5は土坑であった可能性もある。住居構築の



第21圖 8号住居址実測図

際に土坑上部を削平されたのかも知れない。

炉 住居中央北壁寄りに掘り込まれている。拳大程度の礫を住居中心側に配したものである。住居中心線に沿って炉が設定されており、規模は長軸41cm、短軸35cm、深さ9cmを計測する。覆土は黒褐色をした比較的粘性の少ない土で、炭化物・焼土粒が混入していた。住居中心側に焼土が約5cmの厚さで堆積していた。

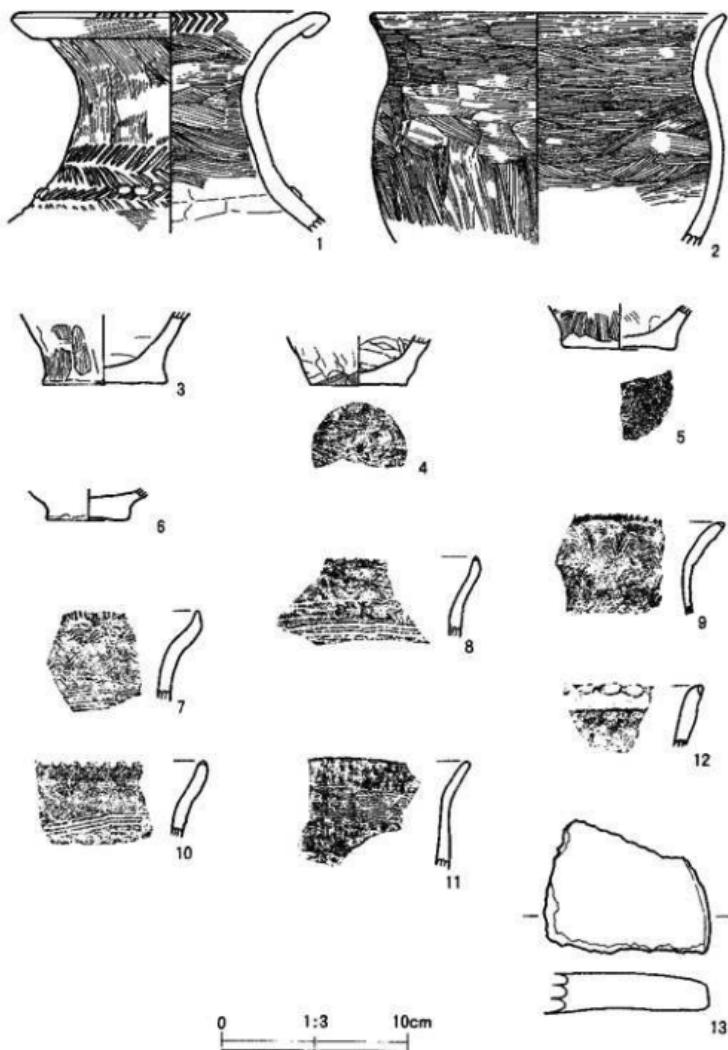
遺物（第22図）

2以外覆土中からの出土である。1は口縁部から肩部まで残る甕である。外面は折返し部から頸部までハケ調整され、肩部に櫛齒状工具による刺突文、羽状の沈線文が巡る。羽状沈線文の上には3個一単位のボタン状貼付文が5ヵ所付く。内面には口縁部から頸部まで横方向のハケメが顕著に残り、肩部にはナデが見える。口縁部には櫛齒状工具により刺突文が加えられている。2の甕は口縁部内外にナデが施された後、外面は胴部最大径付近まで横ハケ、それより下位に継ハケが施される。内面は横方向にハケメ、ナデ、ミガキが見られる。3～6の底部片にはナデ、ハケメが施される。7～11の口縁部片には櫛搔波状文、廉状文、刻み目などを見る。12,13は流れ込みと思われる。12は縄文時代晚期の深鉢の口縁部である。口縁部に押圧文が施される。13は縄文時代の器台片であろうか、表裏よく磨かれている。

<第8号住居址出土遺物一覧>

(単位cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	弥生土器	甕	(11.7), 17.0, —	砂粒を含み密	赤褐色	(内) 口縁部～肩部の滑突文、頸部一帯ハケメ (外) 口縁部より肩部にかけてハケメ、肩部に羽状の沈線文、口縁部1/6 胎部欠損	
2	弥生土器	甕	(12.4), 19.8, —	金色雲母を含み密	にぶい褐色	(内) 横ハケメ・ナデ・ミガキ (外) 口縁部～肩部一帯ハケメ、肩部一帯ハケメ、口縁部より胴部まで残	
3	弥生土器	甕	(3.8), —, 6.6	金色雲母、白色砂粒を含み密	灰褐色	(内) 指ナデ (外) ハケメ	底部のみ残
4	弥生土器	甕	(2.6), —, 5.2	金色雲母、砂粒を含み密	褐色	(内) ハラミガキ (外) ハケメ・ナデ、底部へラケズリ、底部1/2破片	
5	弥生土器	甕	(2.4), —, (6.0)	砂粒を含み密	褐色	(内) ナデ (外) ハケメ	底部1/4破片
6	弥生土器	甕	(2.7), —, 4.4	金色雲母を含み密	明赤褐色	(内) (外) 指ナデ	底部のみ残
7	弥生土器	甕	—, —, —	金色雲母、砂粒を含み密	黒褐色	(内) ミガキ (外) 櫛搔波状文・廉状文、口縁部一帯刻み、口縁部破片	
8	弥生土器	甕	—, —, —	金色雲母、砂粒を含み密	黒褐色	(内) ミガキ (外) 廉状文、口縁部一帯刻み、口縁部破片	
9	弥生土器	甕	—, —, —	白色・赤色砂粒を含み密	黒褐色	(内) ハケメ (外) 櫛搔波状文、口縁部一帯刻み、口縁部破片	



第22図 8号住居址出土遺物

番号	種類	器形	法量	胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
10	弥生土器	甕	—, —, —	砂粒を含み密	黒褐色	(内)ミガキ (外)廉状文 口縁部一刺み 口縁部破片
11	弥生土器	甕	—, —, —	白色砂粒を含み密	黒褐色	(内)ミガキ (外)横波状文 口縁部破片
12	縄文土器	甕	—, —, —	黒色砂粒を含み密	にぶい橙色	(内)ナデ (外)口縁部一押圧文 口縁部破片
13	土製品	器台	2.0, —, —	砂粒を含み密	上側 にぶい褐色 下側 赤褐色	全体にミガキ 破片

第9号住居址（第23図）

グリッド掘り下げ時に黒褐色土の広がりと、カマドの袖石・焼土を確認し、土層観察用のベルトを残して掘り下げを行った。黄褐色土中に掘り込まれた古墳時代後期の住居址である。第3号土坑と重複する。

位置 C-4, 5グリッドに位置し、主軸はN-20°-Wをとる。

規模・形態 東西4.27m、南北3.44mの規模となり、隅丸長方形を呈する。

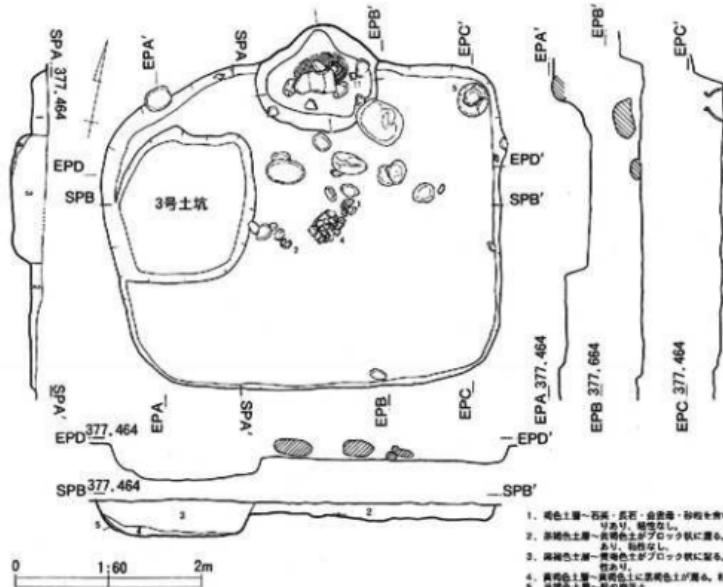
覆土 5層からなる。第3～5層は3号土坑の覆土になるため住居址覆土は第1, 2層のみである。土層堆積状況から3号土坑が住居址より新しいと判断できた。

内部施設 壁高は北壁で31cmと高く、西壁で27cm、東壁で17cm、南壁では5cm程度を測るのみである。壁は緩やかな立ち上がりとなる。床面はやや凹凸があるが、ほぼ平坦である。周溝、ピットなどは検出されなかった。

カマド 住居址北壁中央から検出された。長軸1.27m、短軸1.14mを測る。掘り込みは床面から6cm程度であった。焚口の袖石・天井石などの構築材が残っていた。掘り込み部分には焼土が約17cm堆積していた。

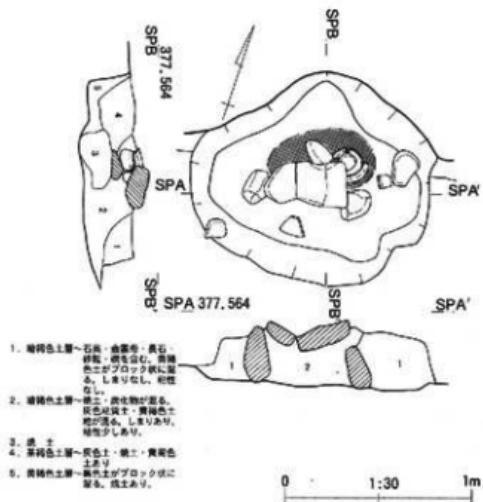
遺物（第24, 25図）

全体の器形が知れるものは住居址床面直上、カマド内から出土する。1の土師器は口縁部と底部の境に稜を有し、口縁部がやや直立気味に外反し、底部が半球形となる。口縁部はヘラナデ、体部はヘラケズリされている。底部には糸切り痕が残る。2の土師器は丸底の底部で、口縁部が短く外反しながら立ち上がるもので、口唇部断面が三角形となる。内外面ともミガキが施されるが、胎土・細部の整形など他と明確に区別できる粗製のものである。3は覆土中からの出土である。口縁部小破片であるが圓化した。須恵器环身を模倣した壺で、口縁部の立ち上がりが低く、内湾しながら内傾する。口唇部は断面三角形となる。口縁部外面ミガキが施されている。4の甕は口縁部径と胴部最大径がほぼ等しく、口縁部は短く緩やかに外反する。調整は口縁部外面に横ナデ、胴部外面には木口状工具による縱方向のナデが施される。胴部内面にはヘラナデが見える。5の甕は

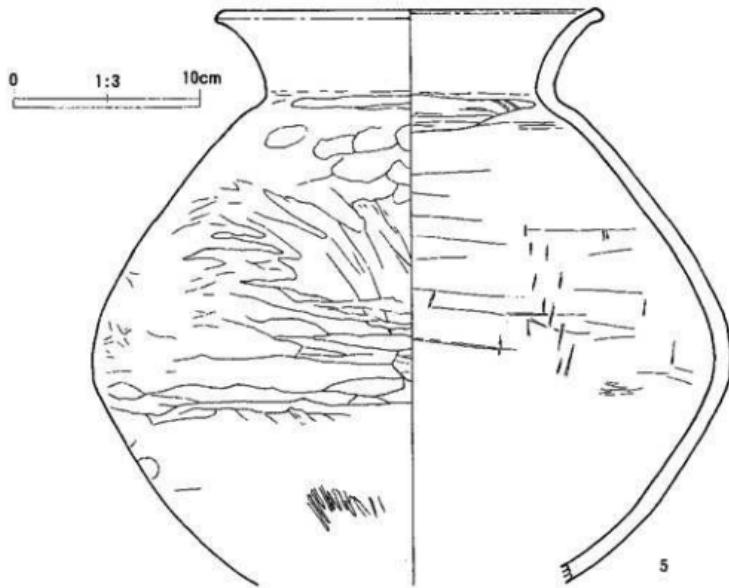
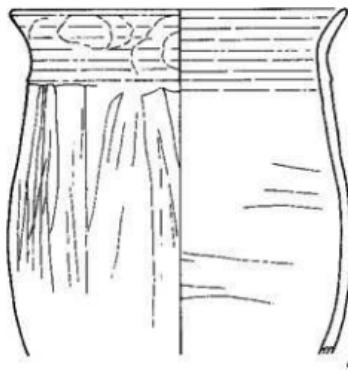
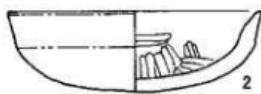
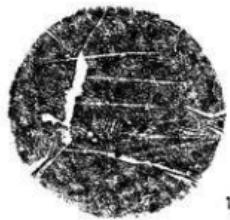


1. 黄褐色土層～石灰、良石、金屬物、砂粒を含む。しらべりあり、堅密なし。
2. 茶褐色土層～茶褐色土がブロック状に混る。しまりあり、堅密なし。
3. 茶褐色土層～良石、金屬物、砂粒を含む。やや堅密あり。
4. 黄褐色土層～黄褐色土に茶褐色土が混る。堅密あり。
5. 茶褐色土層～堅の堅土。

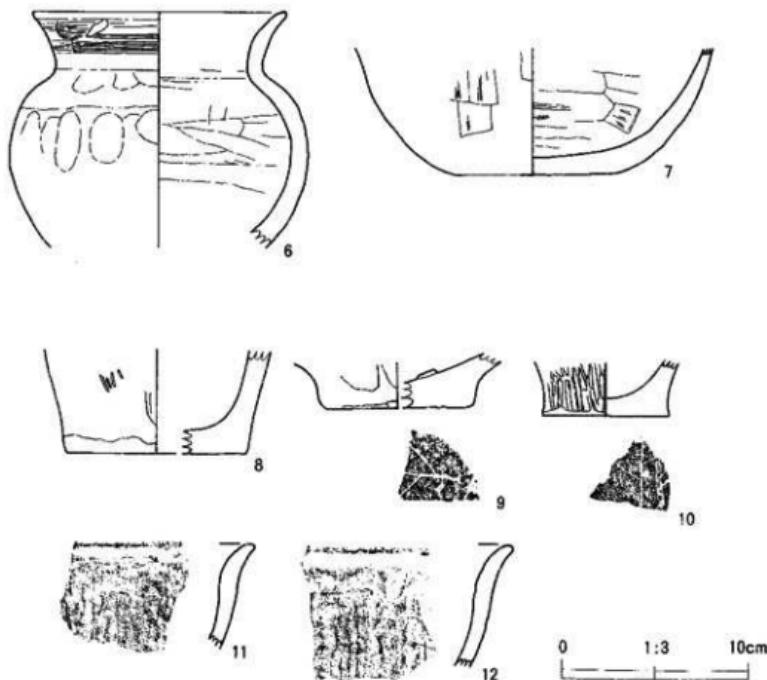
胴部が球形を呈するものである。胴部最大径が中位にあり、やや突出気味で胴部全体が算盤玉状となる。口縁部はくの字状に外反し、口唇部は丸く丁寧に仕上げられている。口縁部内外をナデ、胴部内面はヘラナデ、外面はヘラミガキがなされる。6も球胴型の甕である。最大径が胴部上位にあり、やや肩が張る。口縁部は上半で強く外反し、やや直立気味となる。内外面ともナデにより仕上げられている。7~10の底部片はナデを基調として仕上げられている。11, 12は同一個体であろう。口縁部が短く、弱く外反し、口唇部は丸みをもっている。内外面ともナデが施されている。



第23図 9号住居址実測図



第24图 9号住居址出土遗物



第25図 9号住居址出土遺物

<第9号住居址出土遺物一覧>

(単位cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	壺	4.1, 12.8, —	金色雲母、微砂粒を含み緻密	明赤褐色	(内)ヘラナデ (外)口縁部へラナデ、指痕痕あり 体部へラケズリ 完形
2	土師器	壺	4.3, 13.6, —	砂粒が多く混ざる	にぶい黄褐色	(内)口縁部、腹方向のヘラミガキ 体部へ腹方向のヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へラケズリ後ヘラミガキ 膨大形
3	土師器	壺	(1.9), 11.0, —	砂粒を含み緻密	暗赤褐色	(内)全面ヘラミガキ (外)口縁部へラミガキ 体部へナデ 山根部破片
4	土師器	甕	(18.5), 18.0, —	砂粒を含み緻密	にぶい黄褐色	(内)口縁部へ横ナデ 脚部へラナデ (外)口縁部へ横ナデ 脚部へ木工式によるナデ 底膨大形
5	土師器	甕	(30.6), 20.6, —	金色雲母、砂粒を含み密	にぶい橙色	(内)口縁部へ横ナデ 脚部へラナデ (外)口縁部へ横ナデ 脚上部へラミガキ 黒斑あり 脚小位以下2/3を欠損

(単位cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
6	土師器	甕	(12.5), 13.6, —	金色雲母、砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(内)横ナデ (外)口縁部一横ナデ 脊部一ナデ 口縁一部欠損 底部欠損	
7	土師器	甕	(6.7), —, 9.0	金色雲母、砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(内)ヘラ横ナデ (外)ヘラナデ 表面が剥離 底部破片	
8	土師器	甕	(5.5), —, (9.6)	金色雲母、白色砂粒を含み密	明褐色	(内)ナデ (外)ヘラナデ	底部破片
9	土師器	甕	(2.9), —, (7.6)	金色雲母、砂粒を含み密	にぶい褐色	(内)ナデ (外)指ナデ 底部一木葉痕 底部破片	
10	土師器	甕	(3.0), —, 6.8	金色雲母、砂粒を含み密	灰褐色	(内)ヘラナデ (外)ナデ 底部一木葉痕 底部破片	
11	土師器	甕	—, —, —	砂粒、金色雲母を多く含み密	にぶい赤褐色	(内)ヘラナデ (外)ナデ 内面に煤が付着 口縁部破片	
12	土師器	甕	—, —, —	砂粒、金色雲母を多く含み密	褐色	(内)ヘラナデ (外)ナデ 内、外面に煤が付着 口縁部破片	

第10号住居址（第26図）

グリッド掘り下げに際して、黄褐色土中に黒褐色土の広がりを確認し、土層観察用のベルトを残し掘り下げを行う。第9号住が東側約3mに位置する。弥生時代後期に位置付けられる。

位置 D-4, 5グリッドに位置し、主軸はN-108°-Wをとる。

形態・規模 東西4.60m、南北3.66mを計測し、小判形を呈する。

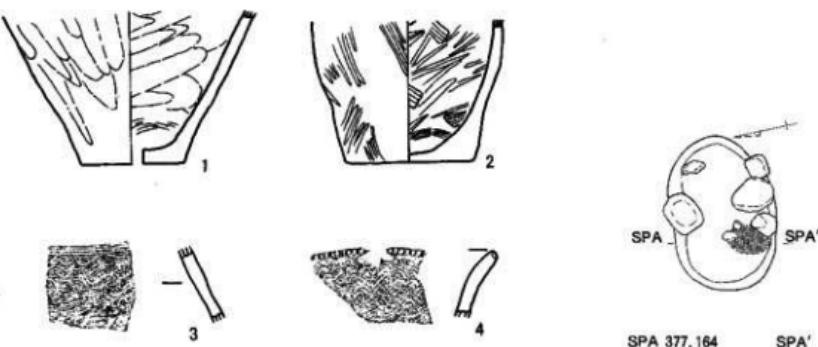
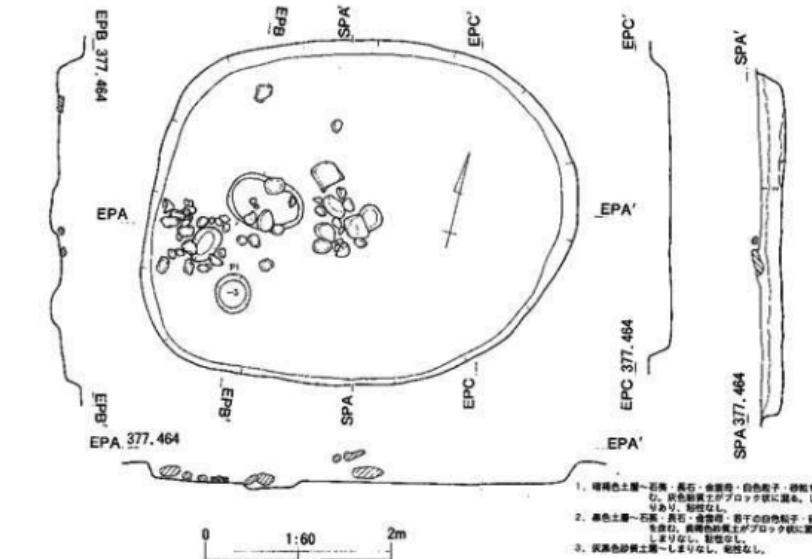
覆土 地山黄褐色土中に掘り込まれていた。3層からなる。

内部施設 檐高は西壁で14cm、南壁から東壁にかけて約20cm、北壁では26cmを計測する。壁は緩やかな立ち上がりとなる。床面はほぼ平坦で、踏み固められていた。ピットは1ヵ所確認された。径20×19cm、深さ5cmで平面正円形となる。

炉 住居址中央よりやや西側から検出した。長軸82cm、短軸55cm、深さ7cmの平面長楕円形である。炉底面に焼土が約3cm堆積していた。長辺両側に石が配される。

遺物（第26図）

住居址に伴う遺物の出土は少なく、固化できたのは僅かであった。1は住店西壁際から出土した瓶である。胴下半のみの破片である。内面はハケ整形の後、横ナデが、外面は縦方向に指ナデが施される。2の底部片は内面ハケ整形の後ミガキが、外面縦方向にミガキが施されている。3, 4の口縁部・頸部破片には櫛模波状文、廉状文が見える。どちらも内面は丁寧にミガキが加えられている。



0 1:3 10cm

0 1:30 50cm

第26図 10号住居址実測図・出土遺物

<第10号住居址出土遺物一覧>

(単位cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	弥生土器	甌	(8.0), —, 5.5	金色雲母、石英、砂粒を含む	黒褐色	(内)ハケ整形の後横ナデ (外)縦方向に指ナデ 孔=1cm 底部片
2	弥生土器	甌	(7.5), —, 6.8	金色雲母、石英、砂粒を含む	灰褐色	(内)ハケ整形の後ミガキ (外)縦方向にミガキ、一部剥離 底部片
3	弥生土器	甌	—, —, —	金色雲母、石英、砂粒を含む	褐色	櫛擦波状文、口縁部にきざみがある 口縁部破片
4	弥生土器	甌	—, —, —	金色雲母、石英、砂粒を含む	暗褐色	櫛擦波状文・擦状文 破片

第11号住居址（第27図）

グリッド掘り下げに際して黄褐色土中に黒褐色土の広がりを確認し、土層観察用のベルトを残して掘り下げる。10号住の南側約2mに位置し、第2号土坑と重複する。古墳時代後期の住居址である。

位置 C,D-3, 4グリッドに位置し、主軸はN-24°-Wをとる。

規模・形態 南北5.98m、東西5.75mを計測し、方形を呈する比較的大型の住居である。

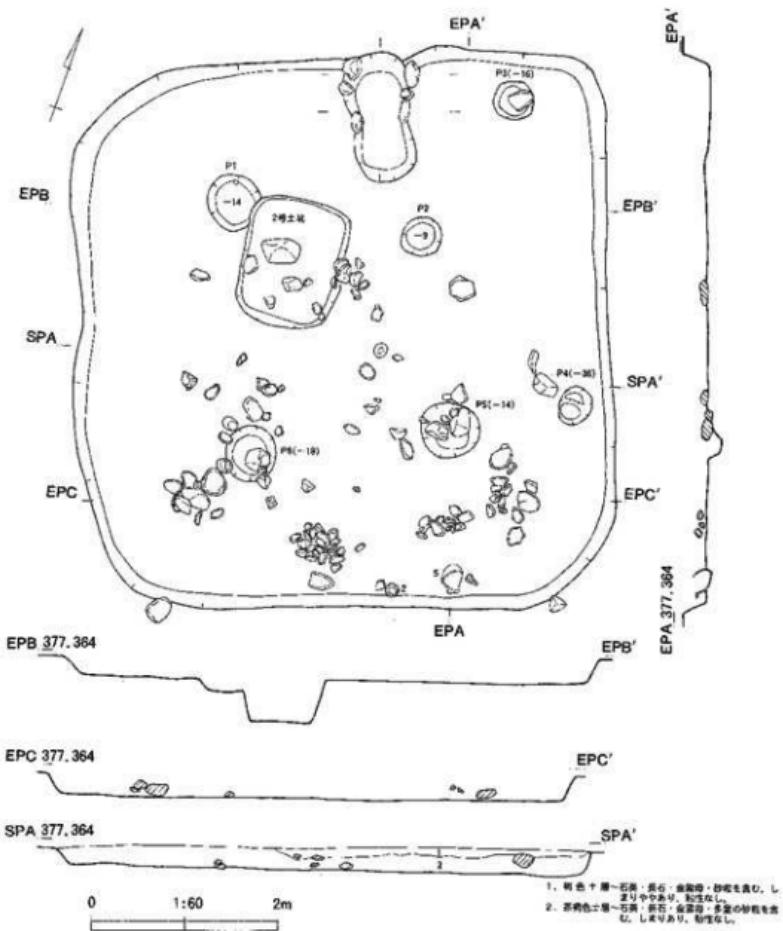
覆土 2層からなる。第2層中に多量の砂粒が混じっていた。

内部施設 壁高は北壁が29cm、西壁で20cmを測り、他は25cm程度である。壁は緩やかに立ち上がりっていた。黄褐色土を掘り込んだ床面は全体に踏み固められ、ほぼ平坦であった。ピットは6個確認されている。その内柱穴となるものはP1, 2, 5, 6であろう。P1は径60×56cm、深さ14cm、P2は径46×42cm、深さ9cm、P5は径64×60cm、深さ14cm、P6は径59×53cm、深さ19cmであり、P2がやや小さい以外ほぼ同規模で、平面円形となる。他に北壁際、西壁際にはP3, P4がある。P3は径42×41cm、深さ16cmで平面円形、P4は径41×33cm、深さ36cmで平面円形となり、1段テラスがつく。

カマド（第28図） 住居北壁中央に掘り込まれている。規模は長軸1.38m、短軸73cm、床面からの深さ10cmを測る。袖石、天井石が残っていた。底面には焼土が約7cm堆積していた。

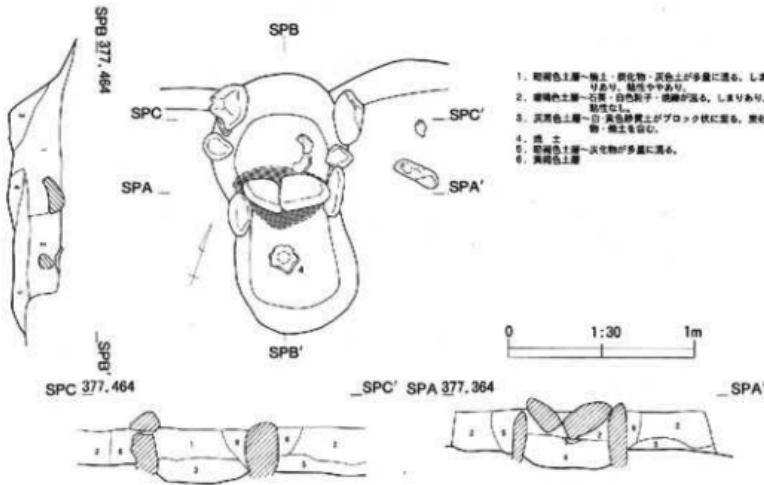
遺物（第29図）

大部分が覆土中から細片と化し、散在的に出土したものである。1は細片となって出土したもので、口縁部が外反し、底部が半球形となる。整形は他の甌と変わらず内面へラミガキ、外面へラケズリの後へラミガキされるが、口縁部断面厚がやや厚く、歪んだ作りと成っている。2は住居南壁際から出土したものである。口縁部がやや直立気味に外反するもので、体部屈曲部付近は丁寧にへラケズリされている。3は底部から体部屈曲部までの破片である。内面黒色処理されている。4の底部片は内外面ナデ、5は住居南壁際の床面直上から出土したものである。口縁部はくの字に外反



第27図 11号住居址実測図

し、胴中位に最大径を有する。外面は口縁部に横ナデ、くびれ部から胴下半までハケメが施される。内面は口縁部に横ナデ及びハケメ、胴部には指ナデ、輪積痕が見える。尚外面胴下半に黒斑がある。6の甕は内面にナデ、外面は胴下半及び底部をヘラケズリされている。7の甕は5の甕の中から出土したもので、磨面が1面だけである。

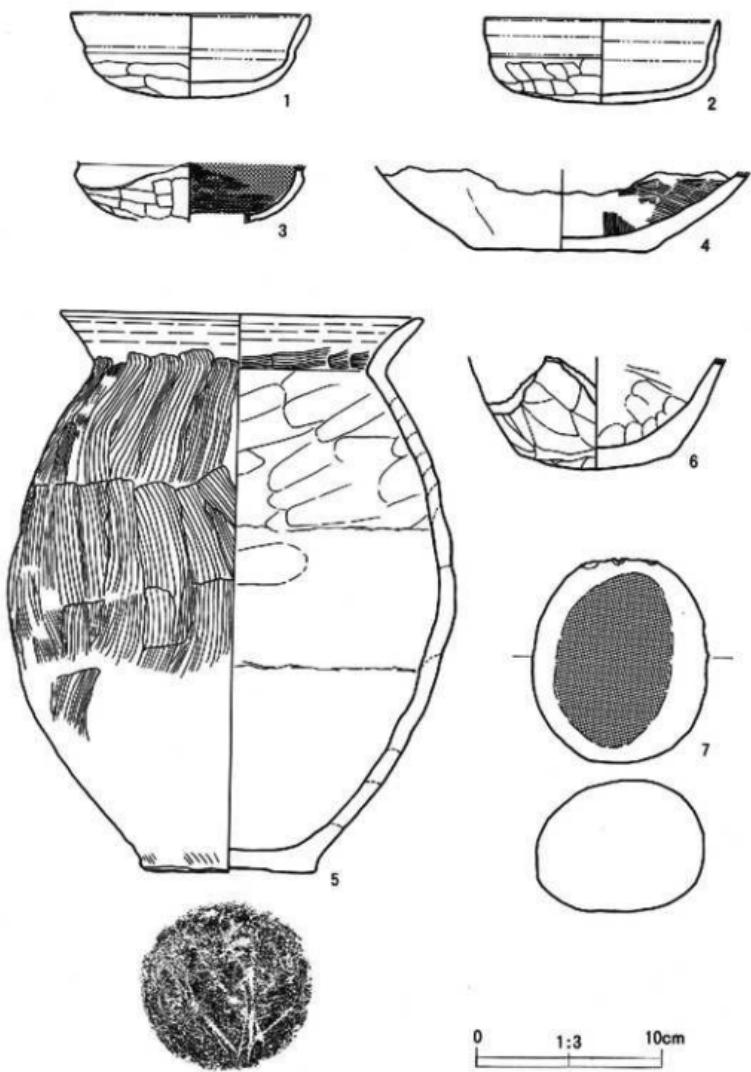


第28図 11号住居址カマド実測図

<第11号住居址出土遺物一覧>

(単位cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土器	壺	4.5, 12.6, —	緻密	黒灰色	(内)ヘラミガキ (外)口縁部一ヘラミガキ 体部一ヘラケズリ後上半のみヘラミガキ 略完形
2	土器	壺	4.6, 12.5, —	金色雲母、石英、 砂粒を少々含む。 緻密	茶褐色	(内)ヘラミガキ (外)口縁部一ヘラミガキ 体部一ヘラケズリ後ヘラミガキ 略形
3	土器	壺	(3.2), —, —	金色雲母が目立つ。 緻密	黒褐色	(内)ヘラミガキ、黑色処理されている。 (外)ヘラケズリ後ヘラミガキ 体部片
4	土器	甕	(4.4), —, 9.4	金色雲母、石英、 砂粒を含む	褐色	(内)ナデ (外)ナデ 底部片
5	土器	甕	29.8, 19.2, 9.4	金色雲母、石英、 砂粒を含む	橙色かかった褐色	(内)口縁部一横ナデ 横筋一指ナデ、輪筋はあり (外)口縁部一横ナデ 横筋一木綿筋あり 上縁から輪筋付まで/3次組
6	土器	甕	(8.0), —, 8.0	金色雲母、石英、 砂粒を含む。粒子が粗い	褐色	(内)指ナデ (外)ヘラケズリ 底部片
7	石器	磨石				石器観察表(P69)に一括する



第29図 11号住居址出土遺物

第12号住居址（第30図）

グリッドの掘り下げ際に際して黄褐色土中に茶褐色土の広がりを確認し、掘り下げを行う。西壁は1号溝・1号土坑などと重複し検出できなかった。北壁は立ち上がりが確認できず、掘り広げてしまった。他に4号溝と重複する。遺構は黄褐色土の地山に掘り込まれていた。古墳時代後期の住居址である。

位置 B,C-1, 2グリッドに位置する。主軸方向は不明。

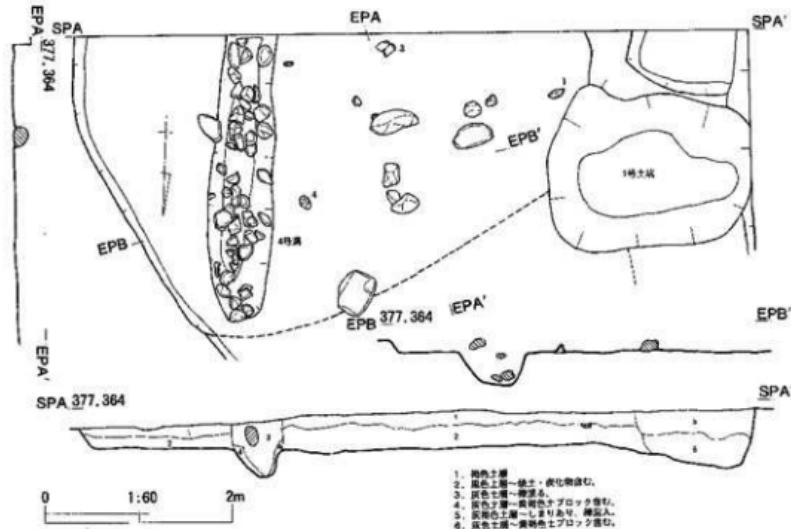
規模・形態 調査区外に一部広がるため定かではないが、東西5.18m、南北3.77mとなる。形態は長方形となるだろうか。

覆土 2層からなる。第2層中に炭化物・焼土の混入が多く、遺物もこの層から出土した。土層の堆積状況から1・4号溝に切られていることが理解できた。

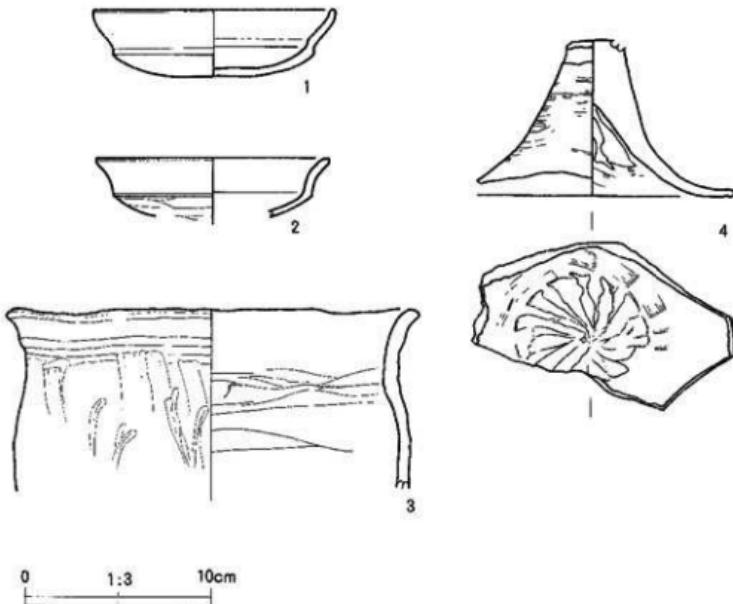
内部施設 壁高は東壁で22cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。床面はほぼ平坦であった。ピット・カマドなどは検出されなかった。

遺物（第31図）

床面直上あるいは第2層中からの出土がほとんどである。1は住居址西側床面直上から出土した壺で、約1/2残存していた。丸底の底部から口縁部が緩やかに内湾しながら外反している。口部外縁の湾曲はそれほど強くなっていない。体部外面のヘラケズリ痕が残らないほど、内外面とも



第30図 12号住居址実測図



第31図 12号住居址出土遺物

ヘラミガキが丁寧に施される。2の環は体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部が外反する。外面体部にヘラケズリ、それ以外内外面とも丁寧にヘラミガキが施される。3の甕は口縁部が僅かに外反し、口唇部に丸みを持っている。おそらく最大径を口縁部に有するものと思われる。内面指ナデ、外面は口縁部が横ナデ、頸部以下縦方向にナデが施される。4の高環脚部は外面横方向のヘラミガキ、内面には反時計回りにヘラ調整が施され、端部にはハケメがかすかに観察できる。

<第12号住居址出土遺物一覧>

(単位:cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	土師器	環	3.5, 13.0, ——		赤色粒子を含み 密	にぶい橙色	内・外一ロクロ成形後ていねいにヘ ラミガキ 底部一部風窓 1/2残存
2	土師器	環	(3.2), 12.4, ——		白色粒子を含み 密	暗褐色	内・外一ロクロ成形後ていねいにヘ ラミガキ 体部一手持ちヘラケズリ 口縁部破片
3	土師器	甕	(9.6), 22.0, ——		白色粒子の目立 つ砂粒を含む	黒褐色	内一ナデ 外一口縁～底部横ナデ 頸部～縦方向舞なナデ 口縁～底部破片
4	土師器	高環	—, —, 15.2		細かい砂粒を含 み密	内面 橙色 外面 にぶい橙色	(内)ヘラ調整 下部はハケ整形・ 輪積痕あり (外)ヘラミガキ 脚部破片

第13号住居址（第32図）

グリッド掘り下げに際して黒褐色土の広がりを確認し掘り下げを行う。住居址西側で第3号溝と重複している。遺構は黄褐色土に掘り込まれ、一部調査区外に広がる。古墳時代後期の住居址である。

位置 D-1, 2グリッドに位置しており、主軸はN-58°-Wをとる。

規模・形態 一辺5mを超える大型の住居になると思われる。

覆土 3層からなる。第1層は固くよく締まる土であった。住居址床面に近付くにつれ焼土・炭化物の混入が多くなった。

内部施設 壁高は44cm前後を計測し、壁は緩やかに立ち上がる。床面はカマド周辺のみ踏み固められており、ほぼ平坦であった。また住居中央部に方形を呈すると思われる20cm程度の高まりがあった。どのような施設なのか不明である。

カマド 住居西壁寄りから検出された。規模ははっきりしないが、約90cm四方に焼土・礫・土器が集中しており、袖石・天井石の構築材は大部分が抜き取られていたが、左側の袖石の一部が床面に埋め込まれた状態で検出され、燃焼部には焼土が堆積していた。覆土中には炭化物・焼土粒が多量に混入していた。カマドの前に径1.45m×86cm、深さ15cmの平面不整形をした長楕円形のピットが検出されたが、カマドに伴う施設かどうか不明であった。

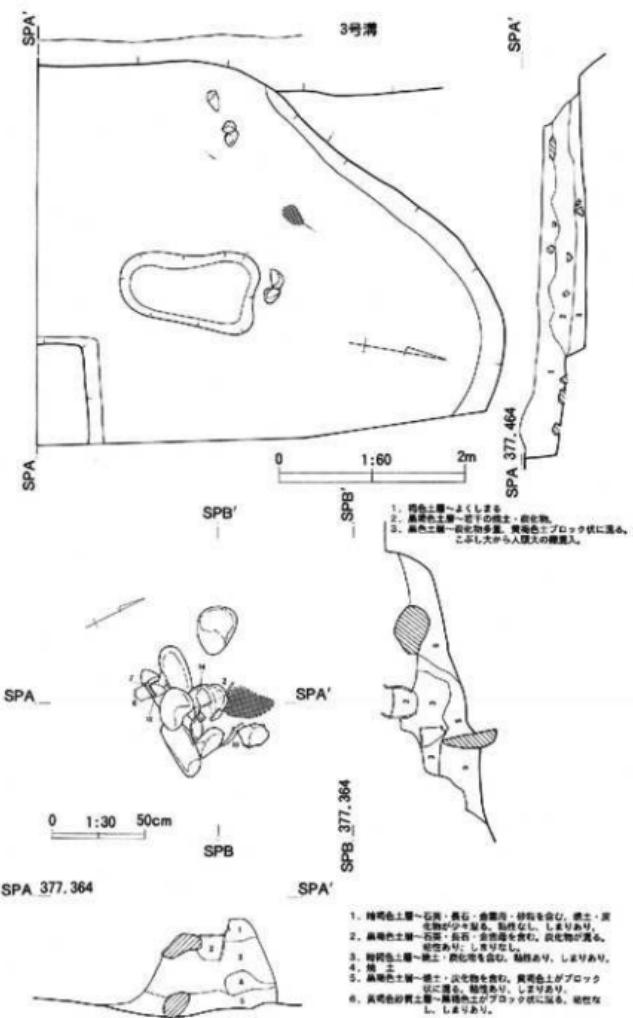
遺物（第33～35図）

大部分が床面直上からの出土であり、甕がほとんどであった。図化できた壺は1点のみである。1は平底の底部で、体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、上端で更にやや強く内傾する。内面底部は丸底状となる。外面の底部外周及び体部下半はヘラケズリされる。2の甕は口縁部の外反が弱く、頸部が直立して立ち上がり口縁部に至り僅かに外反する。口縁部内外面とも横ナデ、胴部外面は縦方向、内面は横方向のナデが施される。3～5、8～10の甕はハケメ整形される。いずれも口縁部に最大径を有し、強く外反する。3は輪積痕が外面に積となって観察でき、4は大型の器形となる。5は胴部最大径が上位にあるため器形が抱弾形となる。6、7は小型の甕である。6は口縁部内外面に横ナデ、胴部内面にヘラナデ及び指ナデが、外面は縦方向に指ナデがなされる。指頭痕がよく残りそのため器面が凹凸となる。7は口縁部内外面横ナデ、胴部内外面とも縦方向にナデが加えられている。

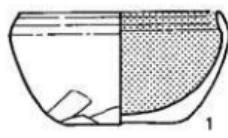
<第13号住居址出土遺物一覧>

(単位cm)

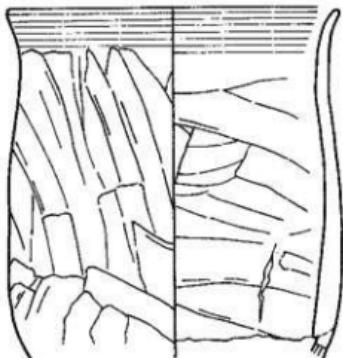
番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調	整形・特徴・その他
			器高・口径	底径			
1	土 爐 器	壺	6.0	10.4, 6.0	金色雲母を含み 密	(内)赤褐色 (外)暗褐色	(内)横ナデ、ヘラミガキ、赤彩されている (外)ヘラケズリ、ヘラナデ 略完成
2	土 爐 器	甕	(18.8)	17.6, —	白色粒子を含み 密	灰褐色	(内)口縁部-横ナデ 脊部-木口状工具によるナデ (外)口縁部-横ナデ 脊部-木口状工具によるナデ 口縁部-胴部にかけて1/3強



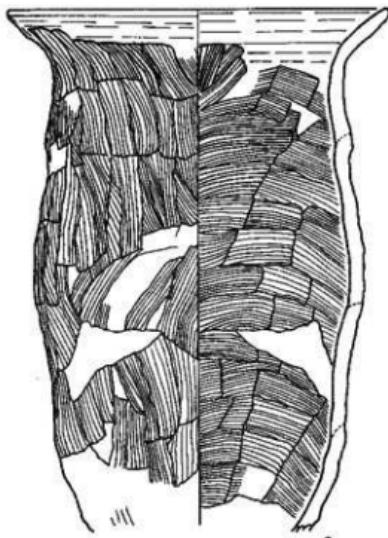
第32図 13号住居址実測図



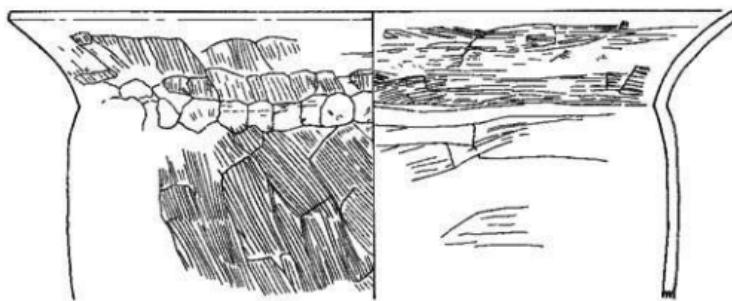
1



2



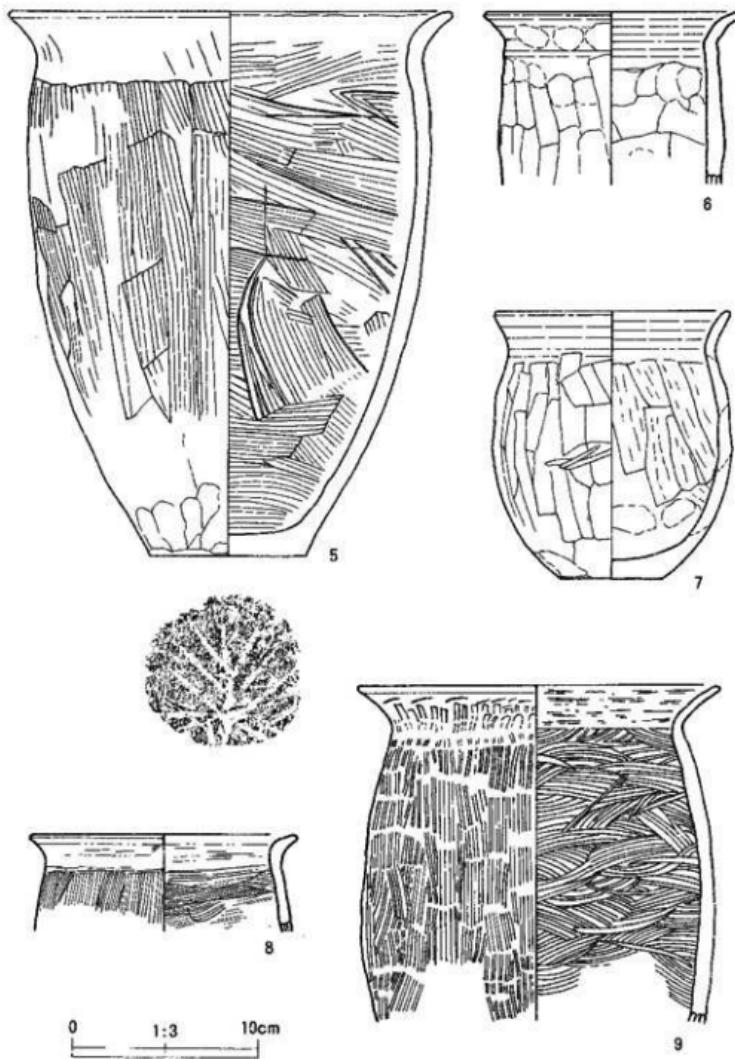
3



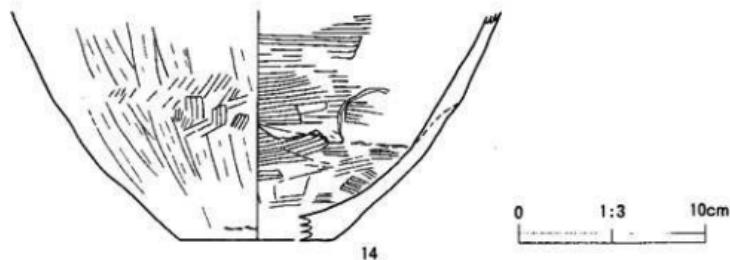
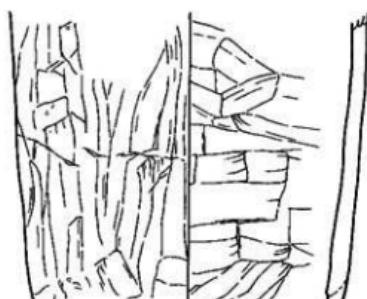
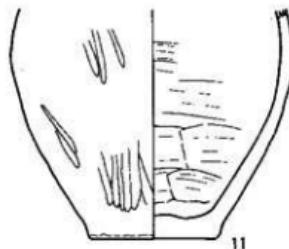
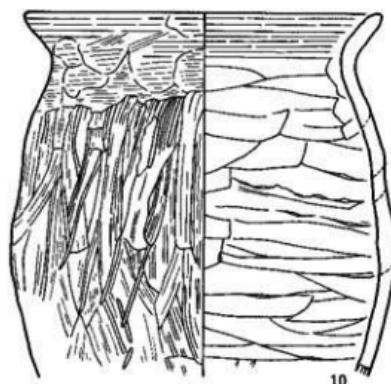
4

0 1:3 10cm

第33図 13号住居址出土遺物



第34図 13号住居址出土遺物



第35図 13号住居址出土遺物

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径	底径			
3	土師器	甕	(27.5), 20.2, —	金色雲母、石英、砂粒を含む	茶褐色		(内) 口縁部一横ナデ 腹部から底部にかけて横力方向のハケメ (外) 口縁部一横ナデ 底部から底部にかけて横力方向のハケメ 底部を欠損する以外元形
4	土師器	甕	(15.3), 39.0, —	金色雲母、砂粒を含み密	明赤褐色		(内) 口縁部一横ナデ 腹部一横ナデ (外) 口縁部一横ナデ 底部一横力方向 腹部～胸部一縦ハケメ 口縁部～胸部破片
5	土師器	甕	29.1, 23.8, 8.4	金色雲母、砂粒を含み密	明赤褐色		(内) 口縁部一横ナデ 腹部一ハケメ (外) 口縁部一横ナデ 腹部一ハケメ 底部一木堀底あり 完形
6	土師器	甕	(9.2), 13.6, —	金色雲母、砂粒を含み密	茶褐色		(内) 口縁部一横ナデ 腹部一ハラナデ 及び弓ナデ (外) 口縁部一横ナデ 腹部一ナデ、指 跡あり 口縁部～胸部まで残
7	土師器	甕	14.3, 12.6, 5.4	石英、砂粒を含み密	(内) 暗い肌色 (外) 茶褐色		(内) 口縁部一横ナデ 腹部一木口状工具によるナデ (外) 口縁部一横ナデ 腹部一指ナデ 約1/2残存
8	土師器	甕	(5.2), 17.4, —	赤・白色粒子を含み密	(内) 暗赤褐色 (外) 赤褐色		(内) 口縁部一横ナデ (外) 口縁部一横ナデ 腹部一縦ハケメ 口縫部破片
9	土師器	甕	(9.0), 19.6, —	石英、白色粒子を含む	(内) 暗い肌色 (外) 茶褐色		(内) 口縁部一横ナデ 腹部一ハケメ (外) 縦方向のハケメ 腹中位以下で欠損する
10	土師器	甕	(19.4), 19.0, —	白色粒子を含み密	にぶい赤褐色		(内) 口縁部一横ナデ 腹部一ナデ、輪 状ナデあり (外) 口縁部一横ナデ 腹部一ハケメ 口縫部～胸部にかけて1/3残存
11	土師器	甕	(12.2), —, 7.0	石英、砂粒、金色雲母を含む	(内) 肌色 (外) 淡赤褐色		(内) ナデ (外) ナデ及びミガキ 底部のみ残存
12	土師器	甕	(16.0), —, —	白色砂粒を含み密	暗赤褐色		(内) 木口状工具によるナデ及び弓ナデ、 輪状ナデあり (外) 木口状工具によるナデ 胸部破片
13	土師器	甕	(9.8), —, 8.4	石英、白色粒子、金色雲母を含む	(内) 暗い肌色 (外) にぶい赤褐色		(内) ナデ (外) ナデ 底部一木堀底あり 底部破片
14	土師器	甕	—, —, —	石英、砂粒、金色雲母を含む	茶褐色		(内) ハケメ (外) ハケメ及びナデ 底部破片

第2節 土坑と出土遺物

今回の調査では3基の土坑が検出された。以下番号順に説明していく。

第1号土坑（第36図）

B-2グリッドで確認する。第1号溝中に掘り込まれていた。平面形はやや不整橢円形を呈し、底面は凹凸となり、地山中の礫が多数検出された。規模は長径2.17m、短径1.61m、深さ63cmとなる。壁の立ち上がりは緩やかである。遺物は内耳土器の口縁部破片が1点のみであり、比較的上層からの出土であった。東側で第12号住と重複する。

(単位cm)

番号	種類	器形	法量	胎上	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師質	内耳土器	—・—・—	微砂粒を含み密	暗褐色	内外面に凹輪が2条ある 口縁部破片

第2号土坑（第36図）

D-3、4グリッドに位置し、第11号住居床面に掘り込んである。住居址床面精査時に確認する。規模は長径1.38m、短径1.09m、深さ47cmとなり、平面形は方形を、断面形は鍋底状を呈する。坑底は北側がやや下がる以外ほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は固く良く締まった灰色土で、壁際・坑底付近では黄褐色土がブロック状に混じっていた。出土遺物は土師質・磁器が出土したが細片で図化には至らなかった。

第3号土坑（第23,36図）

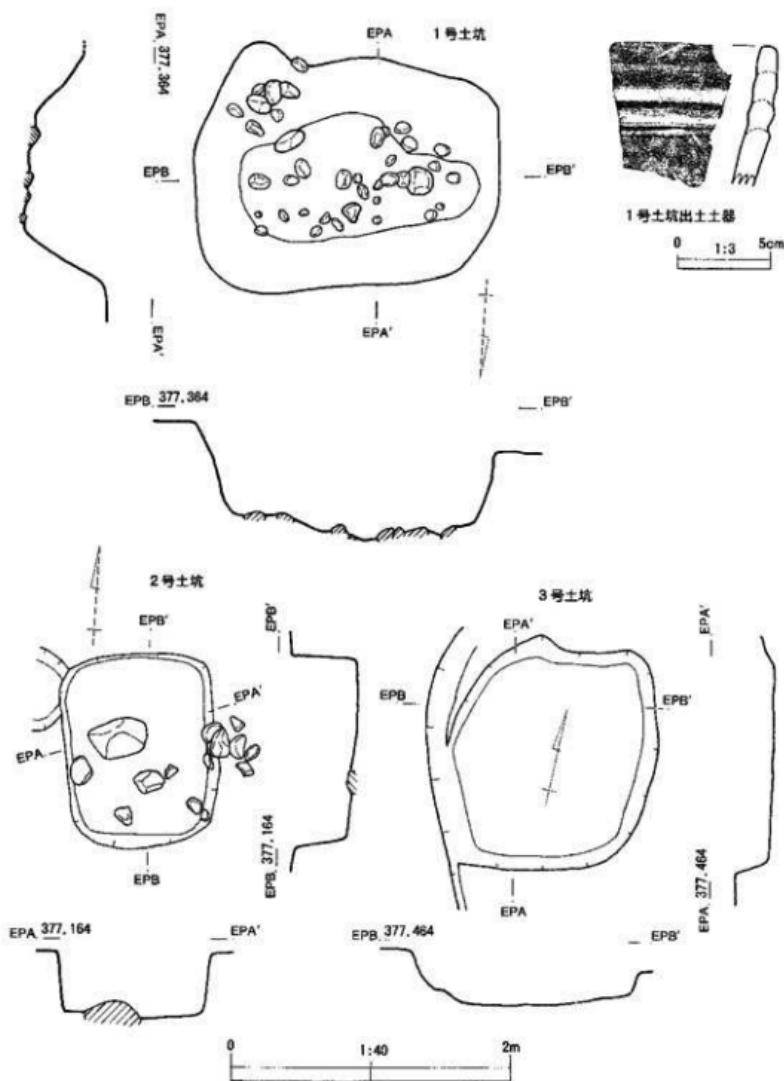
C-5グリッドに位置し、第9号住と重複して検出される。規模は長径1.66m、短径1.50m、深さ22cmを測る。平面形は不整方形、断面皿状となり、坑底はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。土層の堆積状況から9号住を振り込んで構築されている。出土した遺物はなかった。

第3節 溝状遺構と出土遺物

調査では4条の溝が確認された。以下番号順に説明していく。

第1号溝（第37図）

B-1～6グリッドに位置する。南北方向に走り、南端は調査区外にのびる。北端で8号住と、中央付近で2、3号溝と、南端で12号住・1号土坑と重複して検出される。規模は幅1.5m、深さ20cm前後を測る。覆土は固く締まり礫の混入、鉄分の沈殿が著しく、掘り下げに困難であった。8、12号住を切り、2、3号溝・1号土坑に切られる。出土遺物から奈良時代以前には溝としての



第36図 1, 2, 3号土坑実測図・出土遺物

機能を終えていたであろう。

1号溝出土遺物（第39図1～5）

縄文土器、土師器が出土する。1は沈線区画内に無節Lの磨消繩文、2は隆帯によって区画された中に櫛齒状工具による綾文が充填される。いずれも縄文時代中期末葉のものである。3の甕は口縁部に最大径を有し、くの字状に外反する。口縁部横ナデ、胴部外面縦方向、内面横方向のハケメが施される。4の壺は口縁部と体部の境の屈曲が弱く、口縁部は底部から直線的に立ち上がり、上端でやや内折する。5の壺底部は外面横方向のヘラミガキ、内面ハケメがなされる。

第2号溝（第38図）

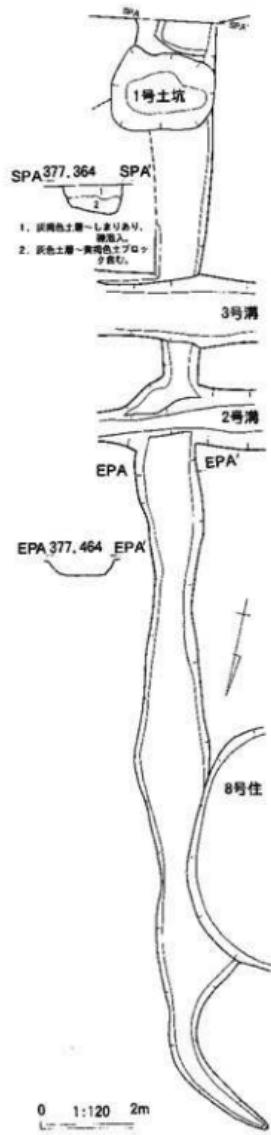
A, B, C-3グリッドに位置する。東西方向に走り、西端は11号住の手前で収束する。中央付近で1号溝と重複して検出される。規模は西側幅1.09m、深さ24cm、東側では幅70cm、深さ25cmを測り、徐々に幅を狭くする。覆土は1層は固く良く締まり、2層には拳大程度の礫の混入が著しく掘り下げに困難であった。溝底部には砂粒が堆積していた。断面U字状となる。出土遺物から中世には溝として機能していたと思われる。

出土遺物（第39図）

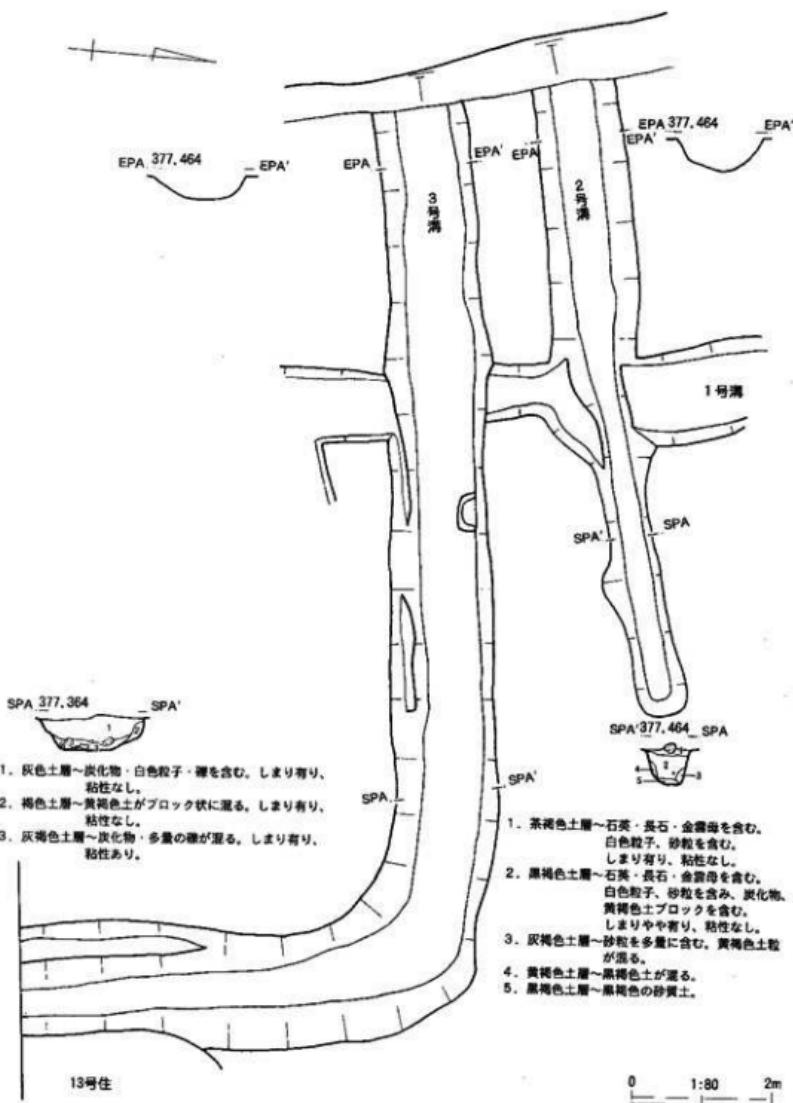
縄文時代から中世にかけての土器が出土している。1は無節L繩文、2は単節LR繩文が施されている。3, 4は弥生時代後期の甕と壺である。5～8は古墳時代後期の土師器である。6に比べ7の甕は口縁部と体部の境の屈曲、口縁端部の湾曲が弱くなっている。9は平安時代の壺底部・10は中世の内耳土器である。還元焰焼成されたため瓦質を呈する。

第3号溝（第38図）

A-3からD-2グリッドにかけて東西方向に走り、D-2グリッドから90°方向を変え南北方向に走り、調査区外にのびる。B-2グリッド付近で1号溝を、南端で13号住を切る。規模は幅1.5m、深さ25cm程度を測り、ほぼ一定の幅・深さを保つ。



第37図 1号溝実測図



第38図 2. 3号溝実測図

覆土は1層は固く良く締まり、3層には拳大程度の礫の混入が著しく、掘り下げるに困難であった。特にD-1、2グリッドの南北方向に走る部分からは大人がやっと持ち上げられる程大きな礫が数個、溝の西側から出土した。遺構の所属時期は中世に位置づける。

出土遺物（第40図）

縄文土器、土師器、土師質が出土するが、いずれも細片ばかりである。他に貨銭、打製石斧が出上している。貨銭は太平通宝（北宋錢）の残欠1枚のみである。

第4号溝（第30図）

C-1、2グリッドに位置し、12号住を切る。幅55～70cm、深さ50cm前後を測る。南端はやや深くなつて調査区外にのびる。溝の中には拳程から幼児の頭程の礫が多数詰まつていた。出土遺物はなかつた。

<第1号溝出土遺物一覧>

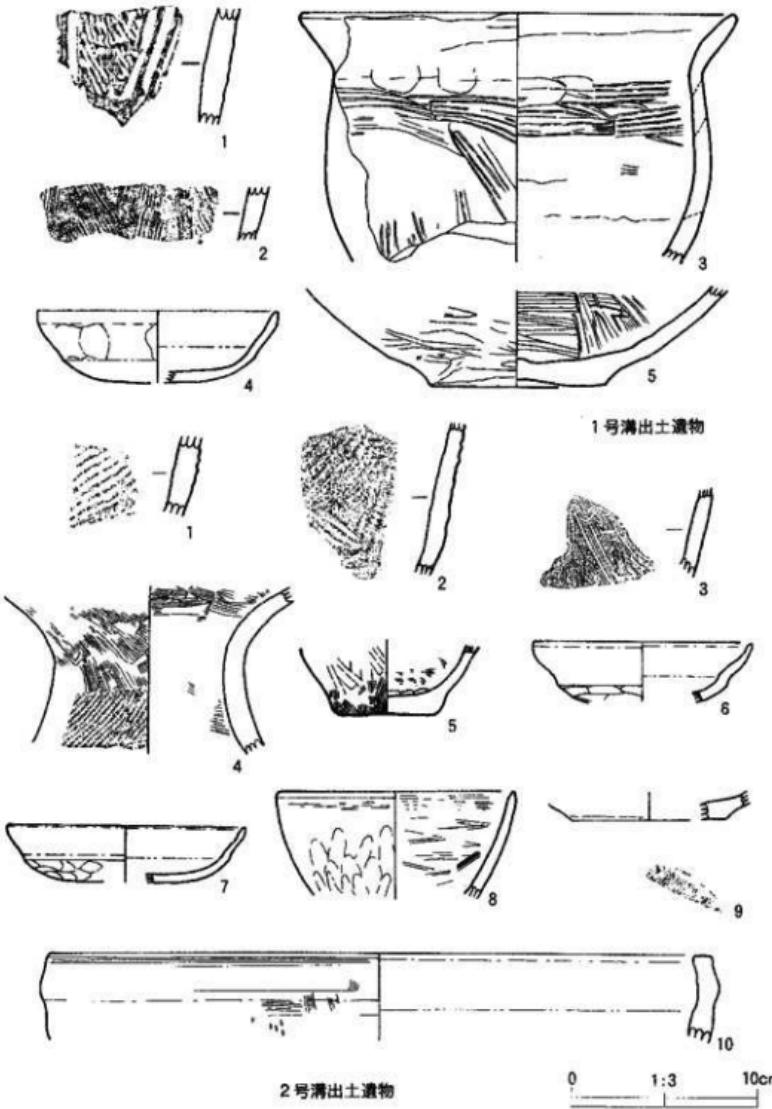
(単位cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径	—			
1	縄文土器	深鉢	—, —, —	金色雲母、砂粒を含み密	赤褐色	磨消縄文無節	破片
2	縄文土器	深鉢	—, —, —	金色雲母、砂粒を含み密	暗褐色	櫛齒状工具による綾杉文	破片
3	土師器	甕	(13.3), 23.0, —	金色雲母、粗い砂粒を含み密	にぶい褐色	(内)横ハケメ (外)口縁部—横ナデ 頸部—指痕痕 胸部—ハケメ 口縁部～胸部の破片	
4	土師器	壺	3.8, (12.8), —	金色雲母、微砂粒を含み緻密	にぶい橙色	(内)ヘラミガキ (外)ヘラミガキ 体部—ヘラケズリ 後のヘラミガキ 1/3残	
5	土師器	壺	(5.1), —, 9.5	金色雲母、砂粒を含み密	にぶい黄褐色	(内)ハケメ (外)ヘラミガキ 底部—一部剥離 底部破片	

<第2号溝出土遺物一覧>

(単位cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径	—			
1	縄文土器	深鉢	—, —, —	金色雲母、石英、砂粒を含み密	にぶい褐色	単節LR縄文	胸部破片
2	縄文土器	深鉢	—, —, —	金色雲母、石英、砂粒を含み密	にぶい褐色	単節LR縄文	胸部破片
3	外生土器	甕	—, —, —	金色雲母、石英、砂粒を含み密	にぶい黄褐色	(内)横ナデ (外)櫛編波状文	縦ハケメ 胸部破片
4	弥生土器	壺	(9.0), —, —	金色雲母、石英、白色粒子を含み密	にぶい黄褐色	(内)横ハケメ (外)縦ハケメ、単節LR縄文 頸部破片	
5	土師器	甕	(3.6), —, 6.0	金色雲母、砂粒を含み密	褐色	(内)横ナデ (外)ヘラナデ	底部破片



第39図 1. 2号沟出土遺物

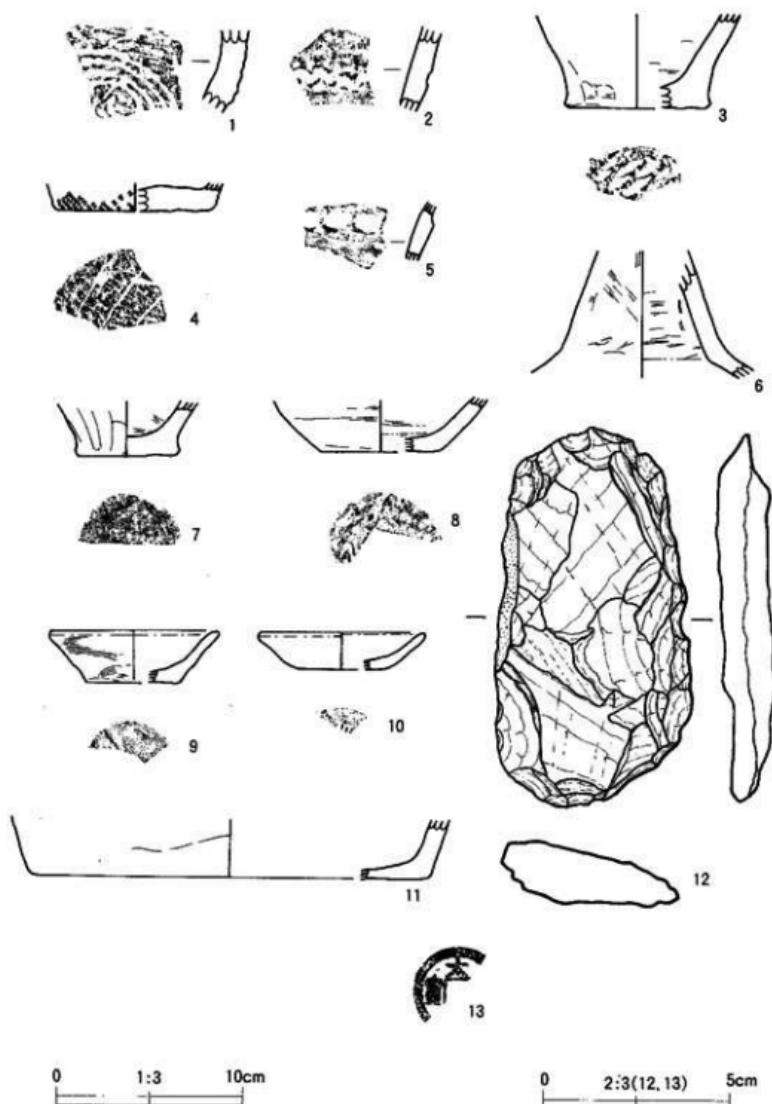
(単位cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
6	土師器	壺	(3.2), (11.6), —	金色雲母、微砂粒を含み緻密	にぶい明褐色	(内)ヘラミガキ (外)ヘラミガキ	体部へラケズリ 口縁部破片
7	土師器	壺	(3.0), (12.8), —	金色雲母、赤色砂粒を含み緻密	にぶい褐色	(内)ヘラミガキ (外)ヘラミガキ	体部へラケズリ 破片
8	土師器	壺 ?	(5.6), (12.8), —	石英、砂粒、金色雲母を多く含み密	褐色	(内)横ナデ (外)横ナデ、黒斑あり	口縁～脚部破片
9	土師器	壺	(1.5), —, (8.2)	金色雲母、砂粒を含み密	にぶい橙色	底部に糸切り痕	底部破片
10	土師器	甕	(4.7), (35.6), —	白色粒子を含み密	黒色	(内)横ナデ (外)横ナデ、瓦黃化している	口縁部破片

<第3号溝出土遺物一覧>

(単位cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	縄文土器	深鉢	—, —, —	砂粒を含み密	にぶい赤褐色	半截竹管による刺突文あり	破片
2	縄文土器	深鉢	—, —, —	白色砂粒を含み密	にぶい橙色	半截竹管による刺突文あり	破片
3	縄文土器	深鉢	(5.0), —, (7.8)	赤・白・黒色砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(外)横ナデ、指頃痕あり	底部一綱代版あり
4	縄文土器	深鉢	(1.5), —, (8.8)	砂粒を含み密	(内)にぶい褐色 (外)にぶい赤褐色	(外)単節RSL縄文	底部木葉痕
5	縄文土器	深鉢	—, —, —	砂粒を含み密	にぶい橙色	押圧文が施されている	破片
6	土師器	高壺脚部	(6.8), —, —	砂粒を含み密	にぶい橙色	(内)横ナデ (外)かすかなハケメ痕あり	脚部破片
7	土師器	甕	(3.0), —, (5.6)	砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(内)ナデ (外)ナデ	底部1/2残存
8	土師質	壺	(2.8), —, (6.4)	細かい砂粒、金色雲母を含み緻密	にぶい橙色	内外面一ロクロナデ	底部糸切り痕あり
9	土師質	壺	(2.7), (9.2), (5.0)	赤・白・黒色砂粒、金色雲母を含み緻密	にぶい橙色	内外面一横ナデ	底部糸切り痕あり
10	土師質	壺	(2.0), (9.0), (4.4)	黒色砂粒を含み緻密	にぶい橙色	底部糸切り痕あり	底部破片
11	土師質	内耳	(3.2), —, (21.6)	砂粒を含み密	にぶい褐色	内面一横ナデ	底部破片
12	石器	打製石斧				石器観察表(P69)に一括する	
13	貨銭					太平通宝	



第40図 3号溝出土遺物

第4節 遺構外出土遺物

グリッドの掘り下げあるいは遺構覆土からの出土で、遺構には伴わないものを一括して取り上げる。特に調査区北側から縄文土器が多く検出され、南に行くにしたがってその数を減少させている。縄文土器の大部分は中期中葉から末葉にかけてのものであった。

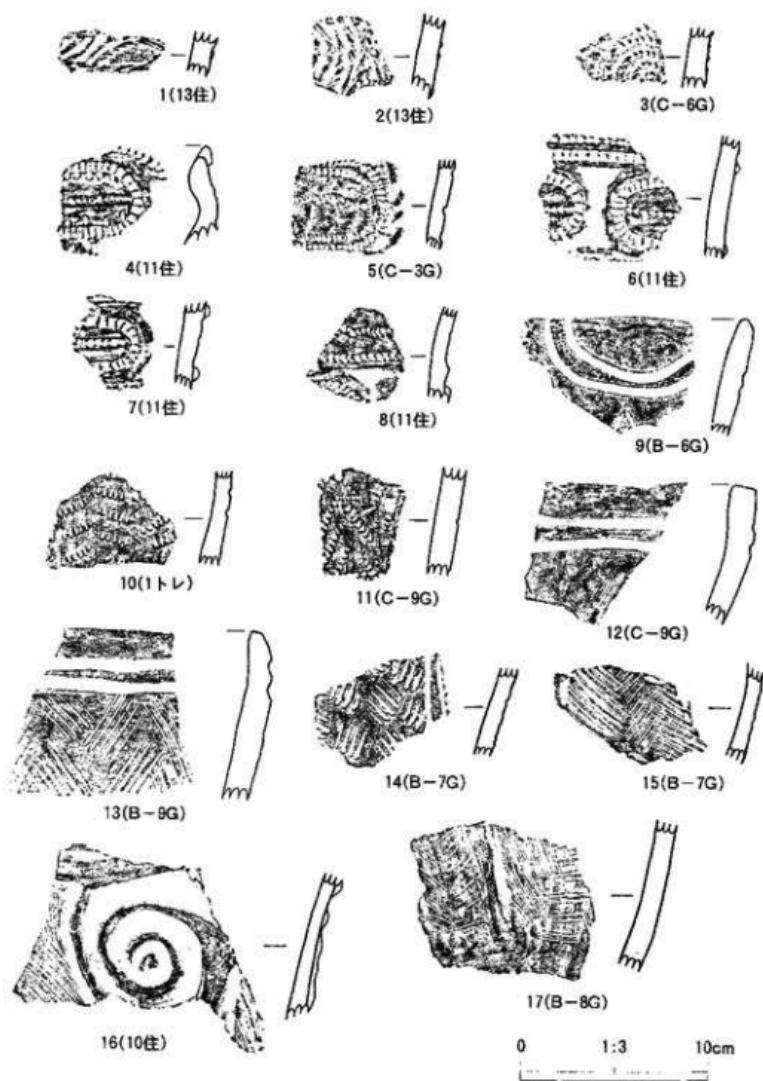
41図1、2は諸磯b式である。細い粘土紐を貼付して曲線文様をあらわしている。粘土紐上には刻みが加えられている。3は諸磯C式であろう。結節浮線文により渦巻状の文様が施される。4～8は隆帯によって梢円区画が作り出され、隆帯に沿って脇に幅広の角押文が巡り、更に三角押引文によって空白部が満たされている。いずれも新道式に比定される。4には隆帯脇に幅広の角押文を施した後、その外側に刺突文が加えられ、5には三角押引文が施されている。9には口縁部に連弧文が施される。41図12～42図2までは棒齒状工具あるいは棒状工具によって綾杉文が施文される。3、4には刺突文が施される。いずれも曾利式に比定できる。5～7には磨消縄文が施される。縄文は単節LR、加曾利EN式である。10、11は口縁部に押圧文が施される。縄文晩期末葉の斐形土器となろう。

12、13は弥生時代後期の東海系の壺であろう。12の頸部破片には筋の細かい縄文が施される。原本は単節RLである。13の口縁部破片には単節LRの縄文を施した後、棒状浮文が4本貼付される。

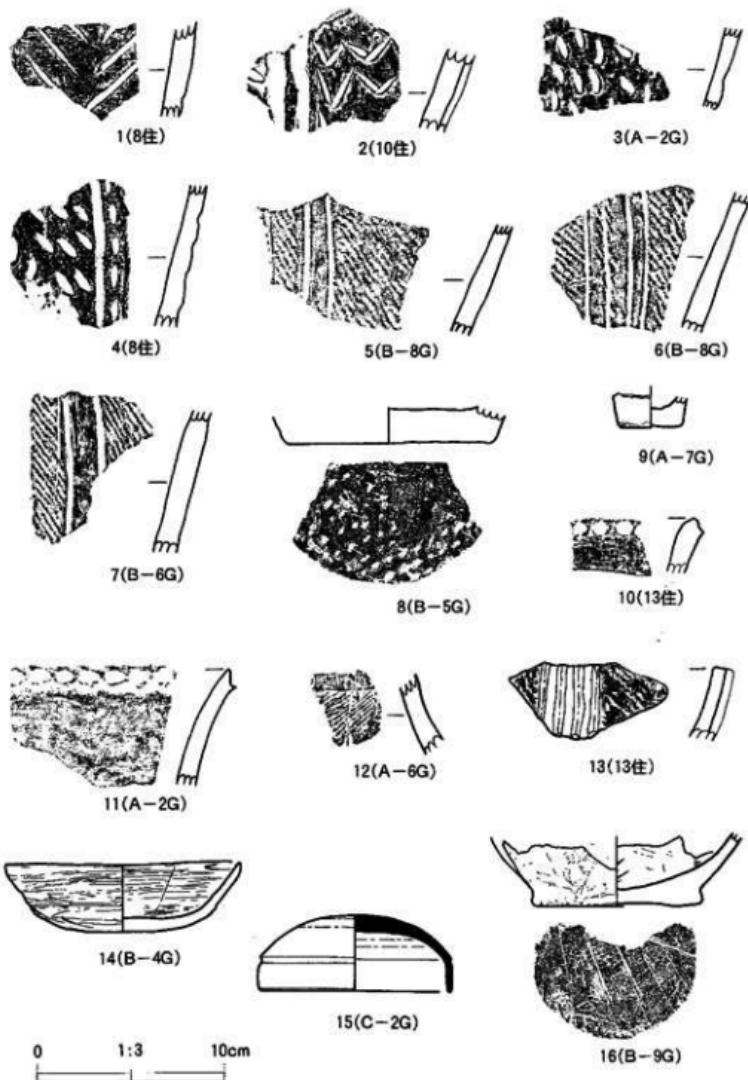
14～16は古墳時代後期に位置付けられる。14の土師器壺は体部と口縁部との境の屈曲が弱く、器高も低くなり扁平化が窺える。内外面ともヘラミガキが施される。15の須恵器蓋は天井部には丸みがあり、口縁部は丸く仕上げられている。天井部に回転ヘラケグリを行なう。立ち上がりと天井部の境に沈線状の凹線が巡る。口径10cm程度とやや小振りである。

43図1の須恵器壺は口径13.6cm、底径8.4cm、器高4.6cm、底部は回転糸切り未調整で、体部が直線的に開く。やや底径が大きく奈良時代末～平安時代初頭に位置付けられる。2、3の壺は底部が回転糸切り未調整となる。金色雲母が目立つ胎土で甲斐型土器以降に位置付けられるものである。

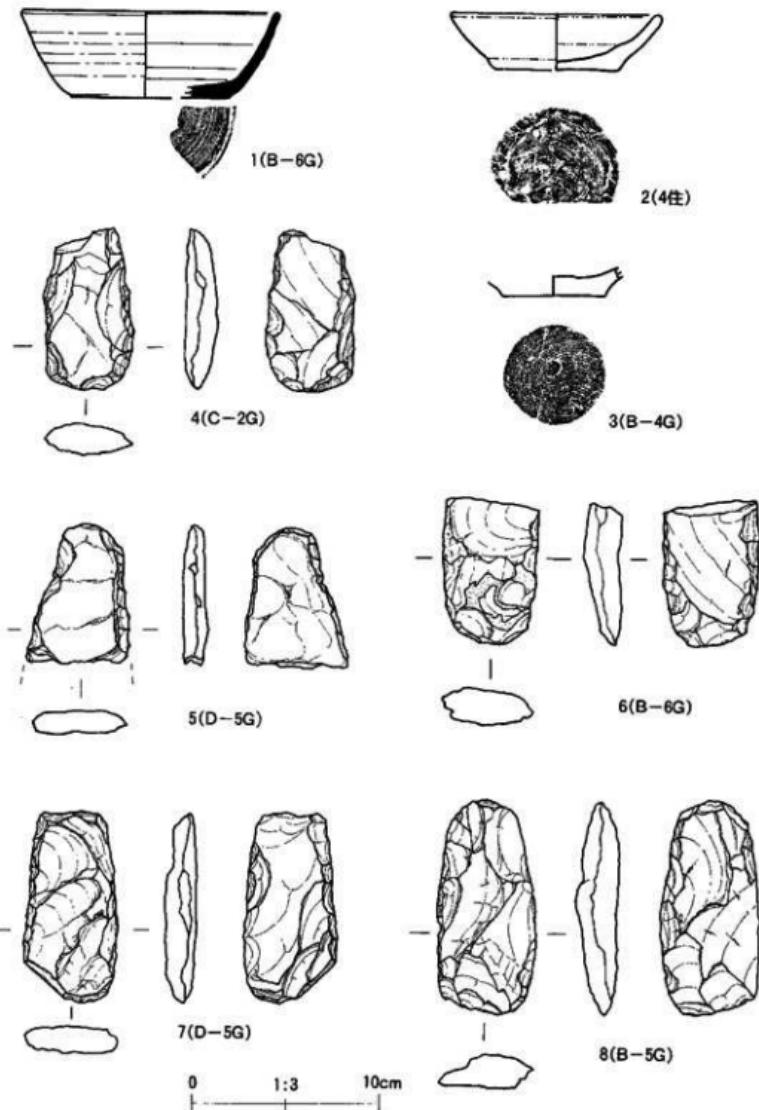
43図4～44図2の打製石斧は全てグリッドからの出土である。43図5が撥形となる以外、他は短冊形となる。44図3～5の凹石は3が表面にのみ僅かな瘤みを有し、4は表裏両面に瘤みを持ち、小型である。5は直径8cm前後、深さ1.8cmの瘤みを有する。石皿としての機能も合わせ持つものであろうが、明確な皿部を形成していないことから凹石として報告する。



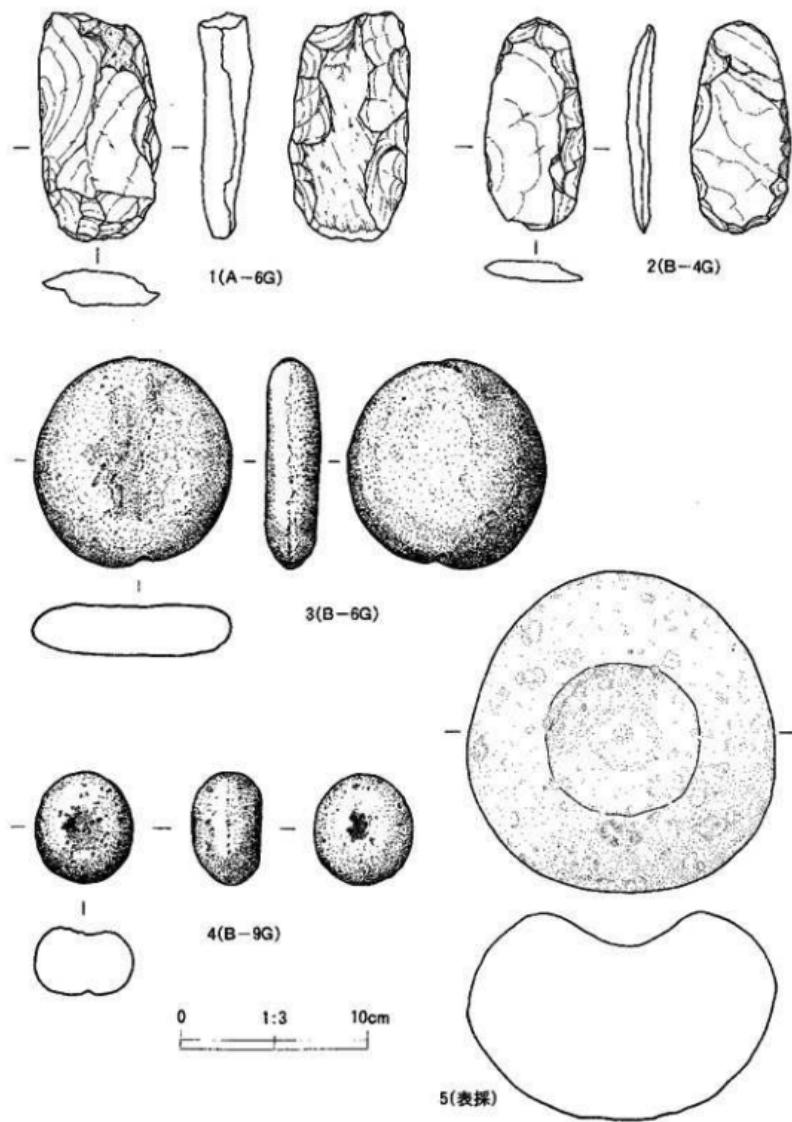
第41図 遺構外出土遺物



第42図 遺構外出土遺物



第43図 遺構外出土遺物



第44図 遺構外出土遺物

石器観察表

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	形態	備考
11図38	3号住	凹 石	11.5	9.5	5.3	635.9	輝石角閃石石 英安山岩		
# 39	*	磨 石	10.7	6.7	6.2	525.4	角閃石石英安 山岩		3往カマドNo.14 土器内部より出土
# 40	*	石 斧	(12.3)	6.4	3.9	(527.4)	輝 緑 岩 斧	大型蛤刃石 斧	
13図 6	4号住	石 斧	36.0	(28.2)	16.7	(18,000.0)	輝石石英安山 岩		
17図 6	6号住	打製石斧	11.0	5.3	1.9	139.0	泥質ホルンフ エルス	短冊形	
29図 7	11号住	磨 石	(10.8)	9.3	7.0	(904.0)	輝石角閃石石 英安山岩		11住No.1土器内 部より出土
40図12	3号溝	打製石斧	10.1	5.2	1.5	107.5	砂質粘板岩	短冊形	
43図 4	C-グリット	打製石斧	8.6	4.9	1.8	87.2	粘 板 岩	短冊形	
# 5	D-グリット	打製石斧	(7.4)	(5.5)	1.4	(70.4)	千 枚 岩 横	形	
# 6	B-グリット	打製石斧	(7.6)	5.1	2.1	(110.7)	ホルンフェルス	短冊形	
# 7	D-グリット	打製石斧	10.0	5.1	1.7	118.1	稍雲母片岩	短冊形	
# 8	B-グリット	打製石斧	11.3	5.2	2.3	144.5	砂質粘板岩	短冊形	
44図 1	A-グリット	打製石斧	(12.0)	6.4	2.9	(240.6)	ホルンフェルス	短冊形	
# 2	B-グリット	打製石斧	11.2	5.3	1.2	99.5	硬 質 片 岩	短冊形	
# 3	B-グリット	凹 石	11.2	10.5	2.9	430.9	輝石安山岩		
# 4	B-グリット	凹 石	6.0	5.2	3.7	101.3	石英安山岩		
# 5	表抜	凹 石	17.2	16.5	11.1	3,200.0	輝石安山岩		

第4章 まとめ

縄文時代

本遺跡からは残念ながら該期に位置付けられる遺構の検出はなかったものの、グリッド等から多くの土器が出土したことは既に前述した。出土土器は縄文時代前期後半の諸磯b式、中期中葉から末葉に位置付けられるもの、及び晩期末葉の水I式新相平行のものである。数量的には、中期の土器が大部分を占め、前期後半の諸磯式・晩期末葉の土器は図化したものが全てである。

現在までに藤井平で人々の生活の痕跡が確実に確認できるのは縄文前期後半から末葉であり、宮ノ前遺跡、上本田遺跡などから住居址が検出されている。今回の調査でも遺構外出土ではあるが、そうした見通しを裏打ちする結果となった。藤井平においては今までのところ縄文中期中葉に位置付けられる住居址の検出例ではなく、今回検出されたおそらく同一個体と思われる新道式土器からは該期の遺構が周辺に存在することが予想される。

弥生時代

今回の調査では6軒の住居址が検出され、いずれも弥生時代後期に位置付けられる。これにより韭崎市内において該期の遺跡は5遺跡・21軒の住居址を数え、その全てが塙川右岸の藤井平に位置するものである。他に釜無川右岸の地域に位置する大輪寺東遺跡、新田遺跡、二反田遺跡などからも遺構外出土ではあるが土器の出土が見られる。おおよそであるが市内における該期の遺跡立地は塙川右岸と釜無川右岸の2地域となるであろう。その両地域とも河川によって形成された河岸段丘上を居住域としていたものと思われる。

ここでは出土土器によって遺構の時間的位置付けを行う。該期の土器編年案については既に山下孝司氏による藤井平における弥生後期土器編年案（同1987）、浜田晋介氏による弥生後期全般の編年案（同1988）、また近年では中山誠二氏が弥生時代全般を通じた時間軸の設定を行うなど（同1993）、本県における弥生時代土器編年は急速に整いつつある。今回は中山氏の編年枠に依拠して本遺跡の出土土器の時間的位置付けを試みる。

第1段階

第6、7、8号住居址出土土器をあてる。壺、甕、高杯、甑などがある。

壺は口縁部がくの字状に外反し、内外面ともハケ調整されるもの（19-1は19図1を表す。以下同じ）と、口縁部が折返されるもの（22-1）。口縁部の形態は不明だが、胴下間に最大径があり明瞭な稜を有するもの（17-1）がある。22-1は頸部が太く短い形態となる。口縁部内面と肩部から頸部にかけたやや高い位置に文様帶をもち、梯歯状工具による羽状の刺突文、羽状の

沈線文、ボタン状貼付文などが施される。内外面及び折り返し部にハケメが残る。17-1の文様は肩部にあり、押圧横線文によって画された下に櫛齒状工具によって羽状の刺突文が施されている。調整は頸部においてはハケメの後かるく横ナデを施し、胴下半ではハケメの後ナデあるいはミガキによってハケメを消している。弥生時代後期に東海地方中部、東遠江を分布の中心として、広く南関東、山梨、長野にまで拡散する菊川式土器の系譜を持つもので（中島1993）、本県では甲西町住吉遺跡・敷島町金の尾遺跡・三珠町一条氏館跡遺跡などから出土例がある（中山1993）。本遺跡から出土したものはいずれも中島郁夫氏が指摘する器形、調整技法などから菊川式土器の新段階に位置付けられる（同1985, 1988）。

壺は口径と胴部最大径がほぼ等しく、頸部が緩やかにくびれる平底のもの（17-2, 19-2, 3）、口縁部は強く外反するが、胴部の張りが弱く、最大径が口縁部にあるもの（17-5）、口径と胴部最大径が等しく口縁部が短く外反し、ハケ調整のみのもの（22-2）がある。17-5の壺は口縁部から胴部への張り方は座光寺原式土器に近いものであり（高林1981）、中田小学校26号住からも胴部の張りがほとんど無いものが出土している。中田小学校例はより後出的なものであろう。17-2, 19-2, 3の壺の文様は施文具が櫛齒状工具による櫛描文からなり、17-2, 19-2には短線文が、19-2, 3には波状文、廉状文が施される。19-2は胴部最大径が上半にあるためやや肩の張る器形となり、内面を赤彩される。

高杯はいずれも赤彩されたもので、杯部は口縁部が外反し深く楕円形を呈し、脚部は短く八の字状となるもの（19-6）と、杯部形態は不明だが、脚部が長く円錐形となるもの（20-7）がある。

鉢は底部から口縁部まで直線的に立ち上がり、底部に1孔を穿ったものである。（17-3, 4）

この第1段階としたものは中部高地系を主体とした土器群の中に、東海系の土器が混在する様相を呈し中山氏の5A-(2)期、あるいは浜田氏の金の尾II群とした段階に位置付けられると思われる。短期的ではあるが盆地南西部を中心として東海系の人々の移住が想定され（中島1993）、共伴する菊川式土器はいずれも新段階に位置付けられる。

第2段階

第1号住居址出土遺物をあてる（第5図）。壺、壺、高杯、鉢が確認される。

壺はいずれも口縁部を欠損している。胴部は球胴形となり、胴下半に弱い稜が認められ、ハケ調整されるもの（5-1）と、同じく胴部は球胴形となり、頸部から肩部にかけて櫛描波状文が多段化するもの（5-2）がある。

壺は口径と胴部最大径がほぼ等しく、波状文・廉状文が施される。

高杯は杯部が朝顔状に開き、脚部は円錐形となる。いずれも端部に到り外側に屈曲する。

鉢は口縁にかけてやや内湾しながら立ち上がる小型のものである。

この第2段階としたものは中山氏の6期とした段階に位置付けられる。ここ藤井平など盆地以北では東海系の土器文化が優勢となりつつある中で、依然として中部高地系の土器をその組成に含んでおり、市内の坂井南遺跡28号住では波状文が施された台付壺と伴にS字壺が出土しており、

文様要素としての波状文は古墳時代初頭の段階まで残っている（小林1994）。

以上、中山氏の編年枠に依拠して本遺跡出土の土器群を大きく2段階に分けてきた。第1段階としたものは弥生時代後期中葉に、第2段階としたものは弥生時代後期後葉に位置付けられる。第1段階について東海系土器からみる限りでは同じ段階として包括できることからこうした時間的位置付けを与えたのであるが、1段階の斐などに施される櫛描短線文が弥生時代後期においても比較的古い土器群に見られるという指摘もあり（高林1981、中山1993）、この文様の消長いかんでは今回の段階設定は修正を余儀なくされる。比較的古い様相の斐はその文様構成において櫛描格子目文、羽状文が施され、また胴下半まで文様が及ぶなど幾つかその特徴が指摘されているものの（浜田1988、中山1993）、短線文についてはその消長が明確となっていない現在では資料の増加を持って、改めて検討すべきであろう。既に5A-(2)期は新一古に2細分される可能性があり（中山1993）、ここでは中山氏が述べる5A-(2)期でも比較的古い様相を呈する一群に櫛描短線文を伴う6、7号住居址出土の土器群が比定され得る可能性を指摘するにとどめる。

古墳時代

今回の調査では古墳時代後期に位置付けられる住居址が6軒検出された。市内では該期の遺跡の調査例はなく、奇しくも今年度同時に調査を行った坂井堂ノ前遺跡と共に初の調査例となった。第3号住居址からは比較的良好な一括土器の出土に恵まれており、ここでは出土した土器を整理し、その変遷について触れておきたい。整理に際しては出土土器の形態・技法を中心として胎土なども加味して分類整理を行い、変遷については森原氏（同1995）の時間的枠組みを参考にした。

1. 器種分類（第45図）

壺 A～D類の4つに分類でき、更にA.B類は3細分される。

壺A 須恵器壺蓋を模倣したもの。

A-1 丸底の底部と口縁部との境に稜を有し、口縁部がやや直立気味に外反するもの。

A-2 丸底で口縁部との境に稜をもち、口縁部が緩やかに内湾しながら外反し、口唇部に到りやや強く湾曲するもの。

A-3 口縁部が外反し、底部が半球形となるもの。

壺B 体部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がるもので、「楕形」となるもの。

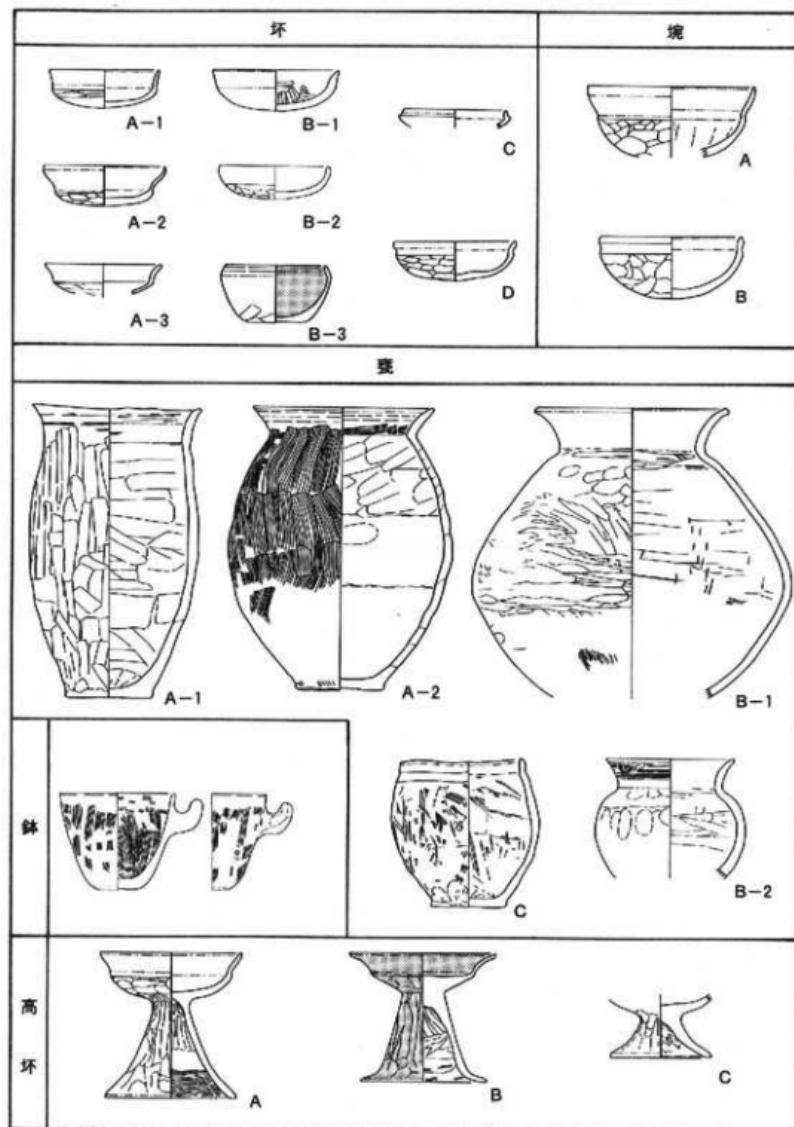
B-1 丸底の底部で、口縁部が外反し短く立ち上がるもの。口縁部先端は断面三角形となる。

B-2 丸底の底部で、口縁部が内湾しながら短く立ち上がるもの。

B-3 平底の底部で、体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、上端で更にやや強く内傾するもの。

壺C 須恵器壺身を模倣したものの。

壺D 丸底の底部で、口縁部に沈線状の凹線が巡り、胎土に砂礫を含む粗製のもの。



第45図 土器器分類図

壺 壺に比べ身が深く大型のものを壺として捉えた。A, Bの2つに分類される。

壺A 半球形で体部と口縁部との境に稜を有し、口縁部外傾して立ち上がり、やや内湾してのびるもの。

壺B 丸底で口縁部に沈線状の凹線が巡り、胎土に砂礫を含む粗製のもの。壺Dと形態・胎土において親縁性が認められ、大型化したものを分類した。

甕 A～Cの3つに分類し、A, Bはそれぞれ2細分する。

甕A 脚部が細長く、長脚となるもの。

A-1 頸部のくびれが弱く、ナデ（あるいはケズリ）により整形されるもの。

A-2 頸部が「く」の字状に外反し、ハケ調整されるもの。

これ以外にも折衷型とも呼べる頸部がくの字状に外反し、ナデにより整形される小型のものがある（46図47, 48）

甕B 脚部が強く張り、球形となるもの。

B-1 脚中位が強く張り、算盤珠状となるもの。

B-2 脚部が丸く球形となる小型のもの。

甕C 脚部中位から内傾して口縁部にいたり、口縁部には沈線状の凹線が巡る。胎土には壺D及び甕Bと同様に砂礫を多く含む粗製のもの。

鉢 1点のみの確認である。把手が1ヶ所につき、内外面ともハケ調整されるもの。

高壺 A～Cの3つに分類される。

高壺A 壺部の身が深く口縁部が外傾し、脚部は高く、八の字状に開くもの。

高壺B 口縁部が大きく外反し、脚部は大きく開きつつ端部に到り外側に屈曲するもの。

高壺C 壺部形態は不明であるが、脚部が低く「ハ」の字状に開くもの。

2. 上器変遷（第46図）

第1期

9, 11号住出土器をあてる。壺（A-1, A-2, B-1, C）及び甕（A-1, A-2, B-1, B-2）のみである。

壺は須恵器壺蓋を模倣するA類、「椀形」となるB類、及び須恵器壺身を模倣するC類がある。壺A類は次段階のものと比べると器高がやや高くなっている。壺C類は本遺跡からは唯1点のみの出土で、しかも口縁部破片であった。遺構に伴うものか不安な資料である。口縁部は外反してのび、短く立ち上がるもので、口縁部の形態などは須恵器壺身を模倣したものとしてはより後出的のものであろう。

甕はA類の長脚甕、B類の球脚甕がある。A-1の甕はすでに長脚化の傾向が明確となり口径と脚部最大径がほぼ等しくなっている。ハケ調整されるA-2の甕は口縁部が「く」の字状に外反し、脚中位に最大径がある。次段階以降長脚化の傾向は一層明瞭となっていく。B類の球脚甕は本段階のみ見られ次段階以降みられなくなる。本遺構の第1期は森原編年の3段階に比定する。

第三期

3, 4, 12号住出土土器をあてる。坏 (A-1~3, B-2, D)、端 (A, B)、甕 (A-1, A-2, C)、高坏 (A~C)、鉢がある。

坏はA-2類が圧倒的となり、他は客体的な存在となる。坏はA-2は薄手の作りとなり、口縁部の外反が大きくなる。また本遺跡出土の坏A-2類の体部高と器高を対比してみると46図22~25などは体部高が器高に対して1/3以下となり扁平化が一層明確となっている(表1)。体部と口縁部との境の稜が不明瞭になるもの(22, 25)、底部が扁平となるもの(24)などもありより後出的な一群として捉えられる。

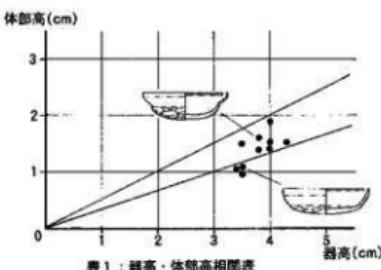


表1：膝高・体部高相關表

塊Dはあまり類例を見ない土器であり、僅かに北巨摩郡長坂町桜坪遺跡9号出土の土器に類似が求められそうである（坂本・末木1984）。実見に及んでいないため定かではないが、本遺跡出土が2例目となるであろうか。しかも今回は胎土・口縁部の形態に親縁性が認められる塊B、塊Cと併せし、今後それら土器の系譜の解明が待たれる。

塊はA、Bの2類あるが、いずれも坏A-2、D類の大型品と区別が困難である。31などサラダボール状に大型化する。

斐は長胴となるA類及びC類のみである。A-1は脇部が僅かに膨らむものの、口径と胴部最大径がほぼ等しいもの(34)、頸部のくびれが非常に弱くなるとともに、最大径は口縁部にあり底部までほぼ直線的にいたるもの(35, 36)がある。A-2の斐は胴部の張りが弱くなり、口径と脇部最大径がほぼ等しくなる。斐A-1・A-2ともに長胴化の傾向は明確である。

高杯は大型品となるA、B類とともに相対的に小型となるC類がある。

第Ⅱ期は6世紀末葉から7世紀初頭、奈良編年の中段階に比定する。

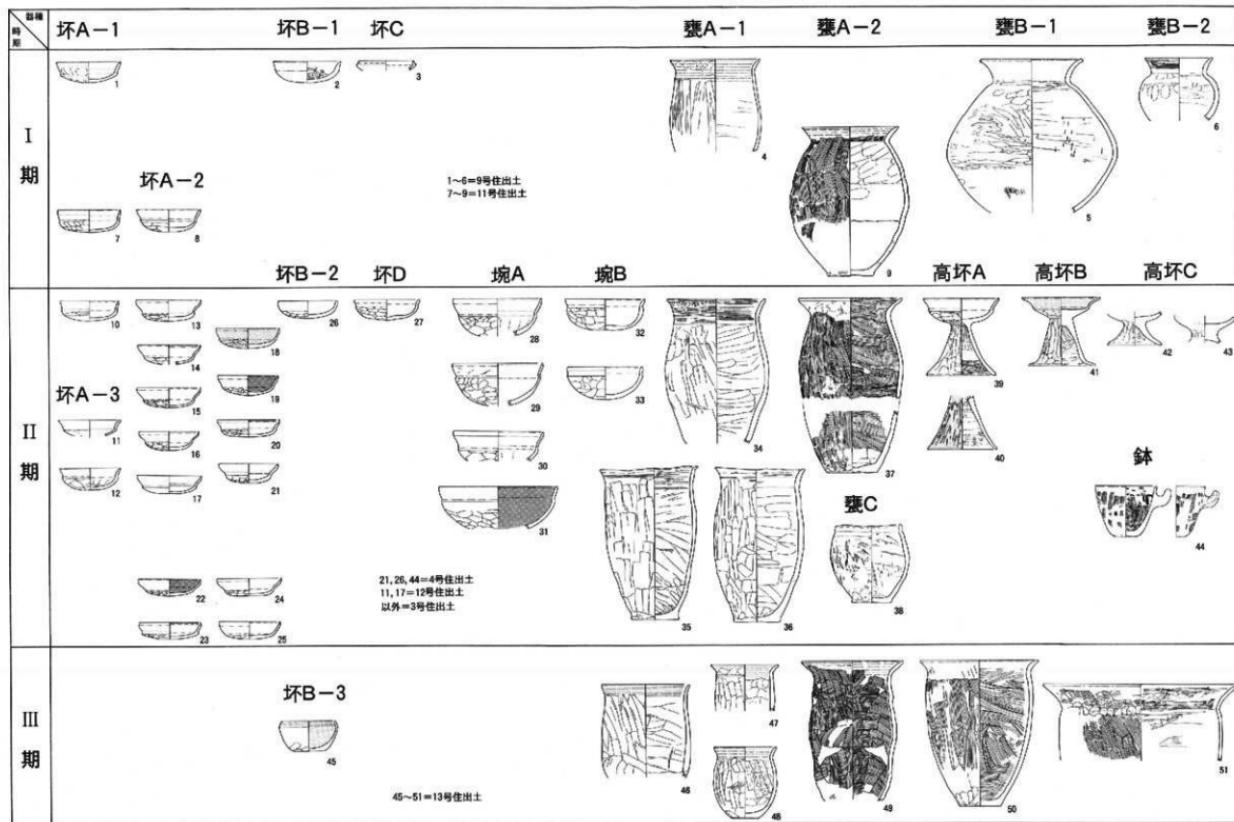
第11章

13号住出土土器をあげる。杯B-3、甌A類のみ出土している。

坏は「椀形」をしたものが1点のみ出土している。13号住は一部調査区外に広がるため完掘に到っていない。そのため出土数が限られ定かではないが、この段階では「椀形」となる坏B類や坏A-2類が主体となるようだ（森脇1995）。

斐は長脚となったA類のみである。46は口縁部の反りがほとんどなくなり、口縁部から底部まで直線的にいたる器形となる。49のハケ調整される斐もくびれ部から底部まで直線的にいたる器形となり、いずれも長脚化が極限まで達していることが窺われる。その他、「砲弾形」となる50、大型品の51、小形となる47、48などバラエティーに富む。

第三期は7世紀前半、森原編年の中5段階にある



第46図 後田第2遺跡出土土師器変遷図 (S=1/8)

以上、本遺跡出土土師器の時間的位置付けを試みた。壺A-2類にみられる「扁平化」、壺A類における「長胴化」の傾向、あるいは森原氏が各段階で指摘する特徴など断片的に確認することはできるが、1遺跡の限られた資料のため該期における全体の様相・歴史的背景を把握するまでには到らなかった。周辺地域の成果を取り入れつつ、今後の課題としておきたい。

参考・引用文献

- 柳原功一 1992 「第2章第2節歴史的環境」『宮ノ前遺跡』 菊崎市遺跡調査会他
- 小林健二 1994 「甲斐における庄内式併行期の土器編年」『庄内式土器研究』Ⅶ
- 坂本美夫・末木健 1984 「IX山梨県」『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会
- 鈴木敏則 1985 「第6章弥生時代～古墳時代前期の土器」『三沢西原遺跡』 静岡県菊川町教育委員会
- 高林重水 1981 「第V章第3節弥生土器」『横原遺跡』 長野県岡谷市教育委員会
- 田中広明 1994 「「国造」の経済圏と流通－「武藏」の「クニ」を形作るもの－」『古代東国の人々と社会』古代王権と交流2 名著出版
- 中島郁夫 1985 「弥生土器から土師器への画期－遠江地方を中心として－」『古墳時代の土師器』 静岡県考古学会シンポジウム6
- 中島郁夫 1988 「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』2号
- 中島郁夫 1993 「東海地方東部における後期弥生土器の「移動」・「模倣」－「菊川様式」編－」『転機』4号
- 中山誠二 1993 「甲斐弥生土器編年の現状と課題－時間軸の設定－」『研究紀要』9 山梨県考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 長谷川厚 1987 「古墳時代後期土器の研究(1)－斉一性と地域性について－」『神奈川考古』第23号
- 長谷川厚 1992 「相模地域の鬼高式土器」『考古学ジャーナル』No.342
- 長谷川厚 1992 「古墳時代後期土器の生産について－特に神奈川県内の古墳時代後期土師器の生産構造について－」『古代』第92号 早稲田大学考古学会
- 長谷川厚 1995 「東国における七世紀史の意義－土師器の動向からみた東国社会の変革について－」『王朝の考古学』大川清博士古稀記念論文集 雄山閣
- 長谷川厚 1995 「東国における七世紀への胎動－土師器からみた六世紀から七世紀の東国の状況－」『古代探叢IV－滝口宏先生追悼論集－』 早稲田大学考古学研究室
- 浜田晋介 1988 「弥生時代後期の甲府盆地－異系統土器の相互交流とその様相－」『山梨県考古学協会誌』2号
- 森原明廣 1995 「山梨県地域における古墳時代後期の土器様相」『東国土器研究』第4号
- 山下孝司 1987 「中本田遺跡・堂の前遺跡」 菊崎市教育委員会

写 真 図 版



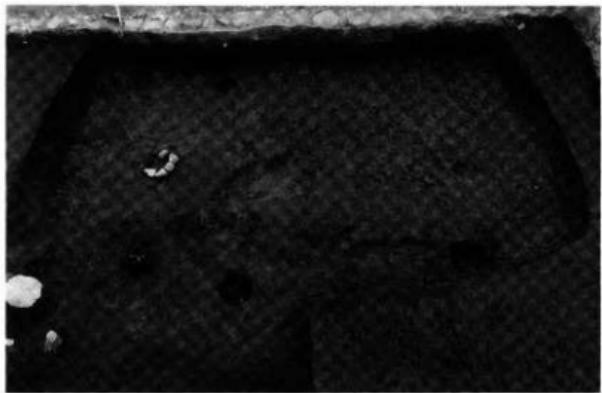
後田第2遺跡から茅ヶ岳を望む



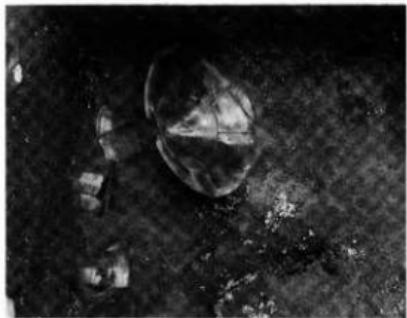
調査区全景



現 慢

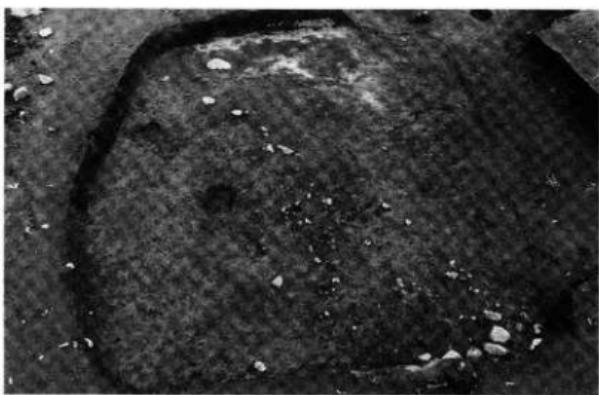


1号住居址及び
遺物出土状況

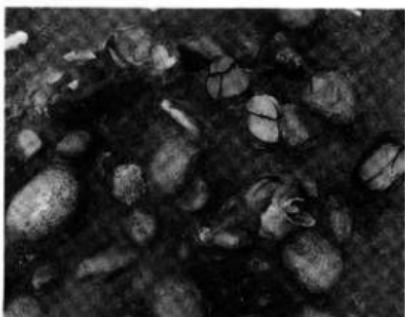


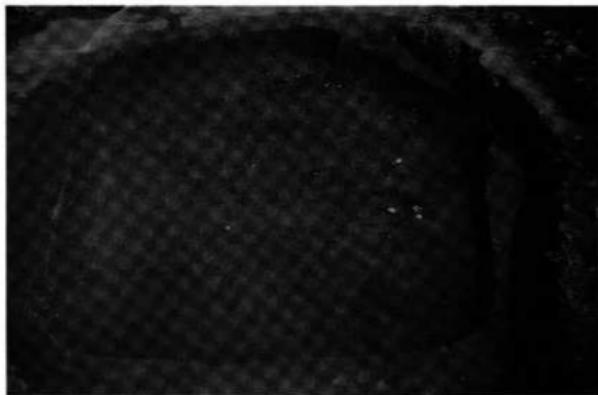


調査風景

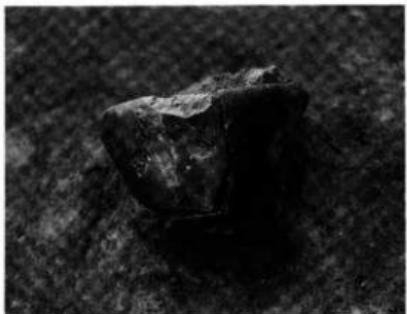


3号住居址及び
遺物出土状況





4, 5, 6 号住居址



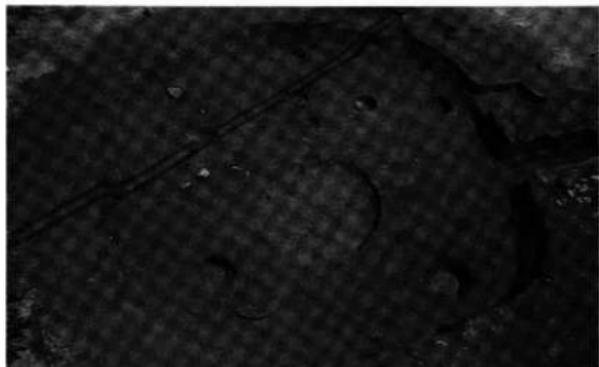
6号住遺物出土状況



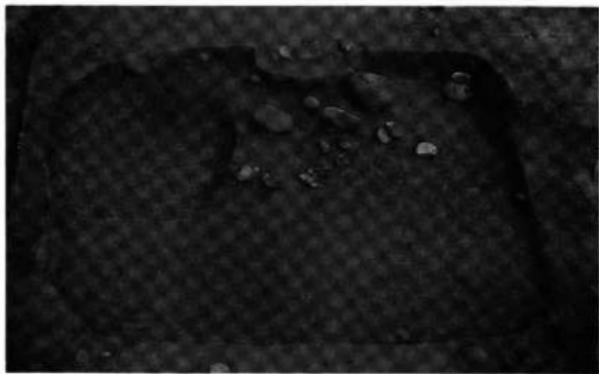
作業風景



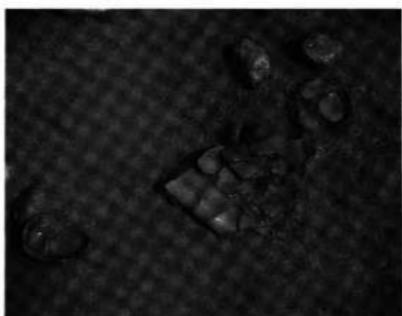
7号住居址



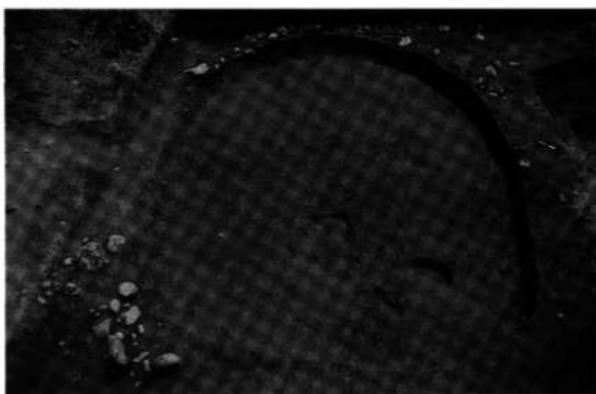
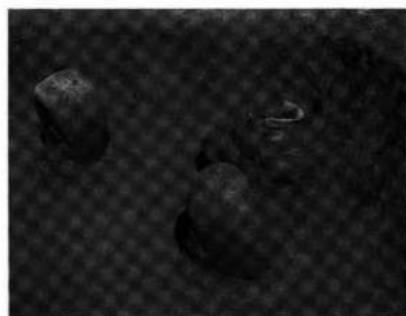
8号住居址



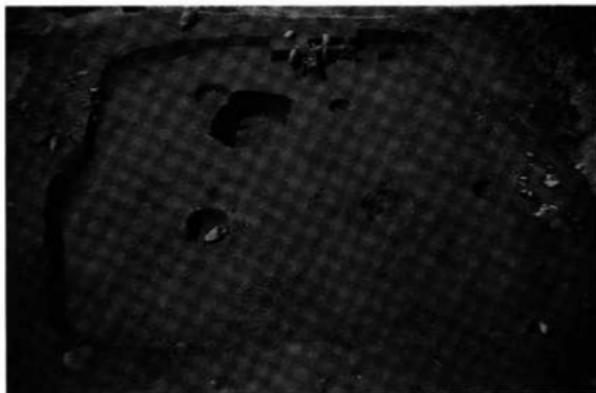
9号住居址



9号住カマド及び遺物出土状況



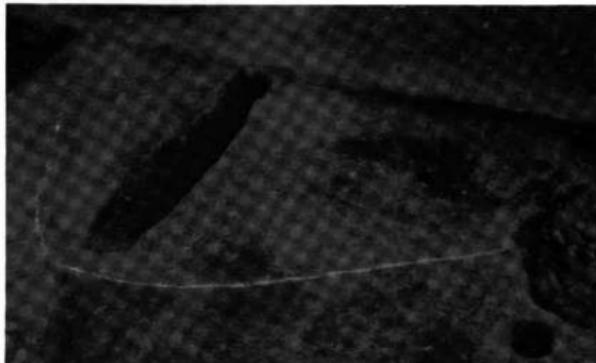
10号住居址



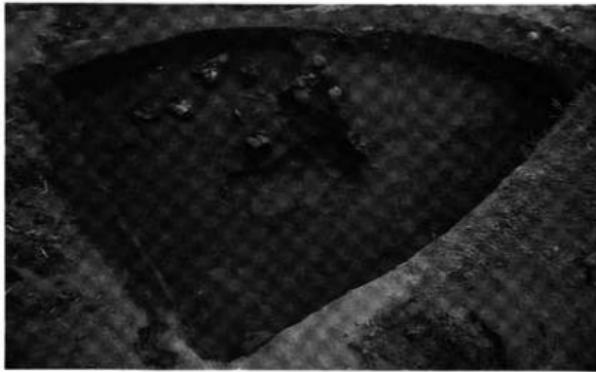
11号住居址



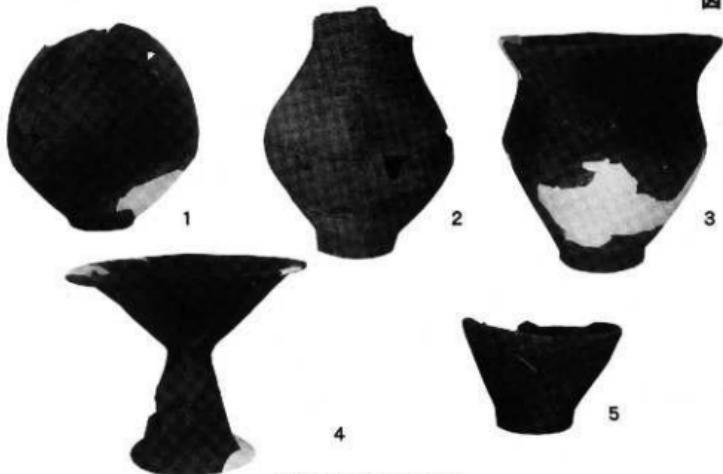
11号住居址カマド



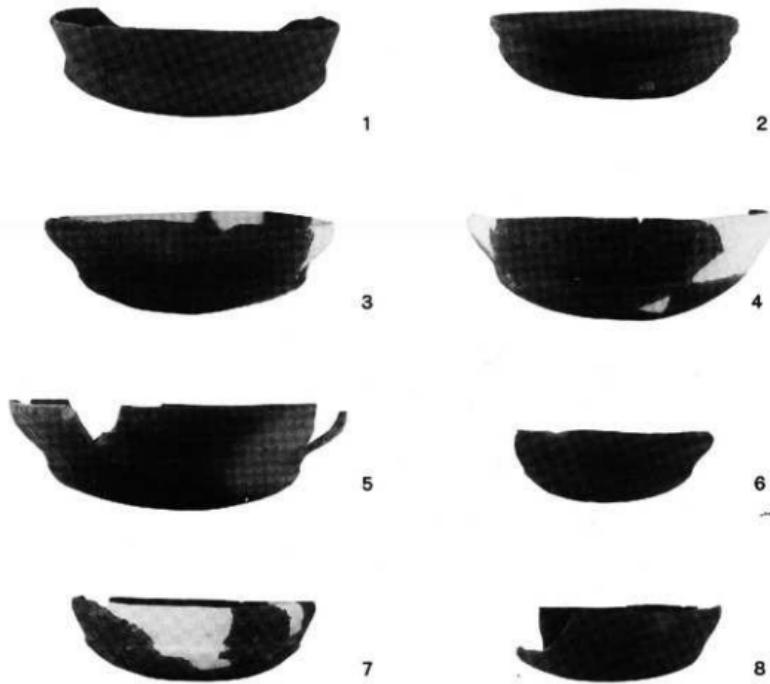
12号住居址



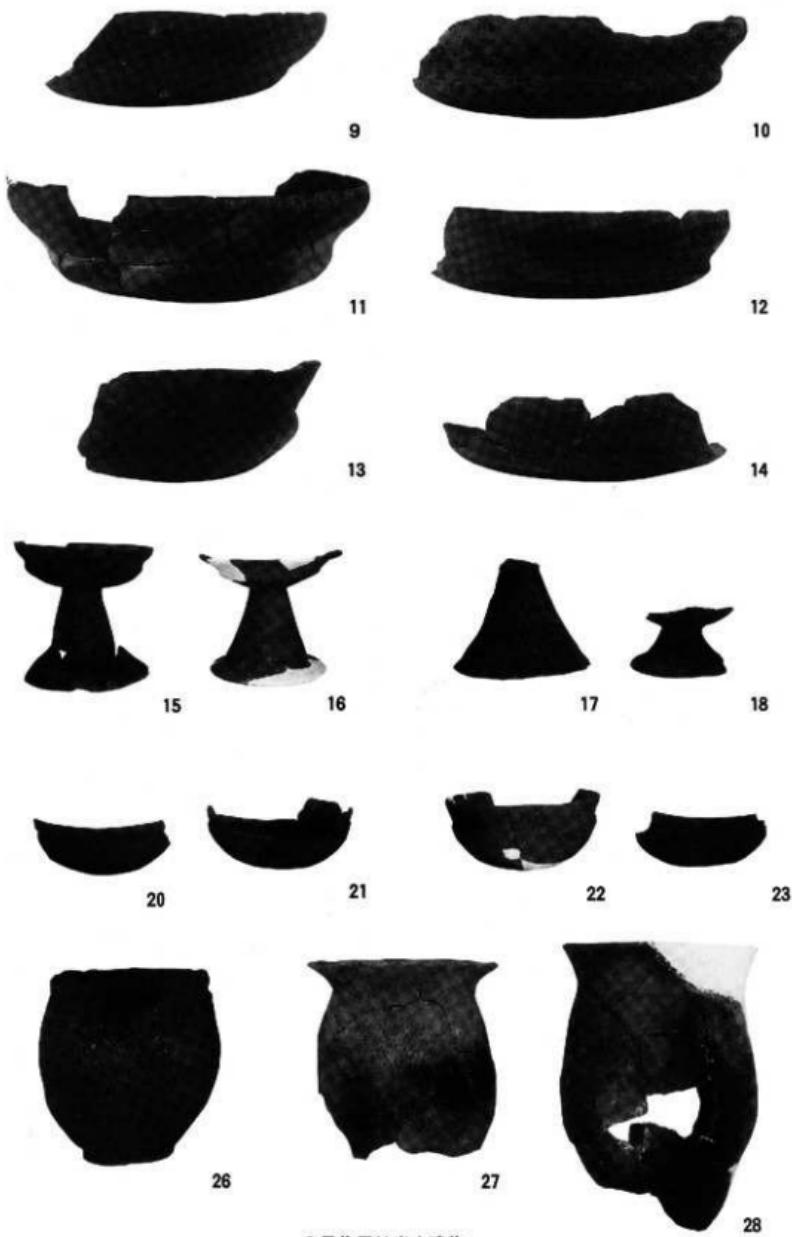
13号住居址



1号住居址出土遗物



3号住居址出土遗物



3号住居址出土遗物



30



31



38



39



40

3号住居址出土遺物



1



2



3



4



5



6

4号住居址出土遺物



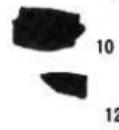
1



5



6



8

10

12



9



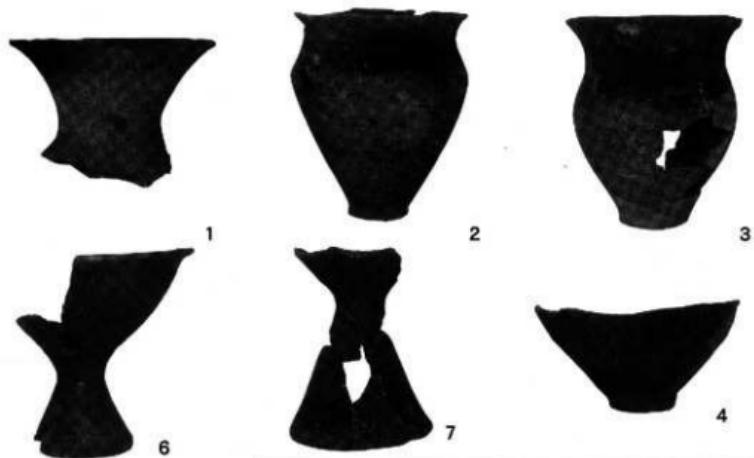
11

13

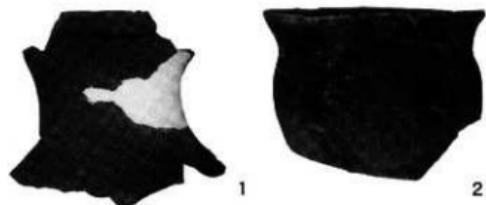
5号住居址出土遺物



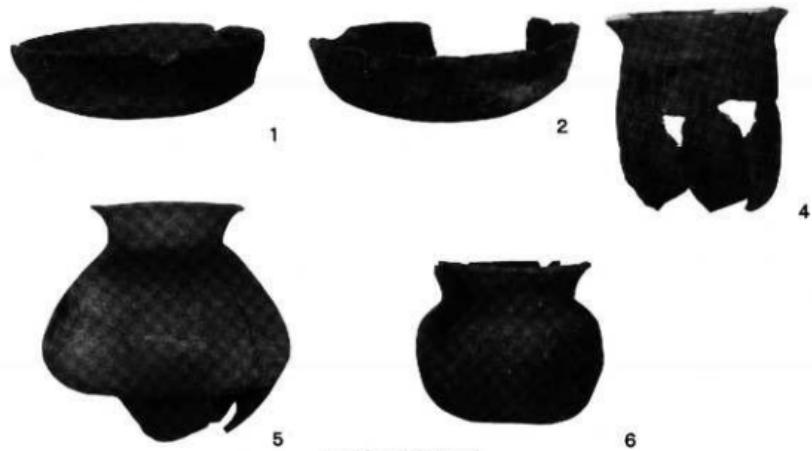
6号住居址出土遗物



7号住居址出土遗物



8号住居址出土遗物



9号住居址出土遗物



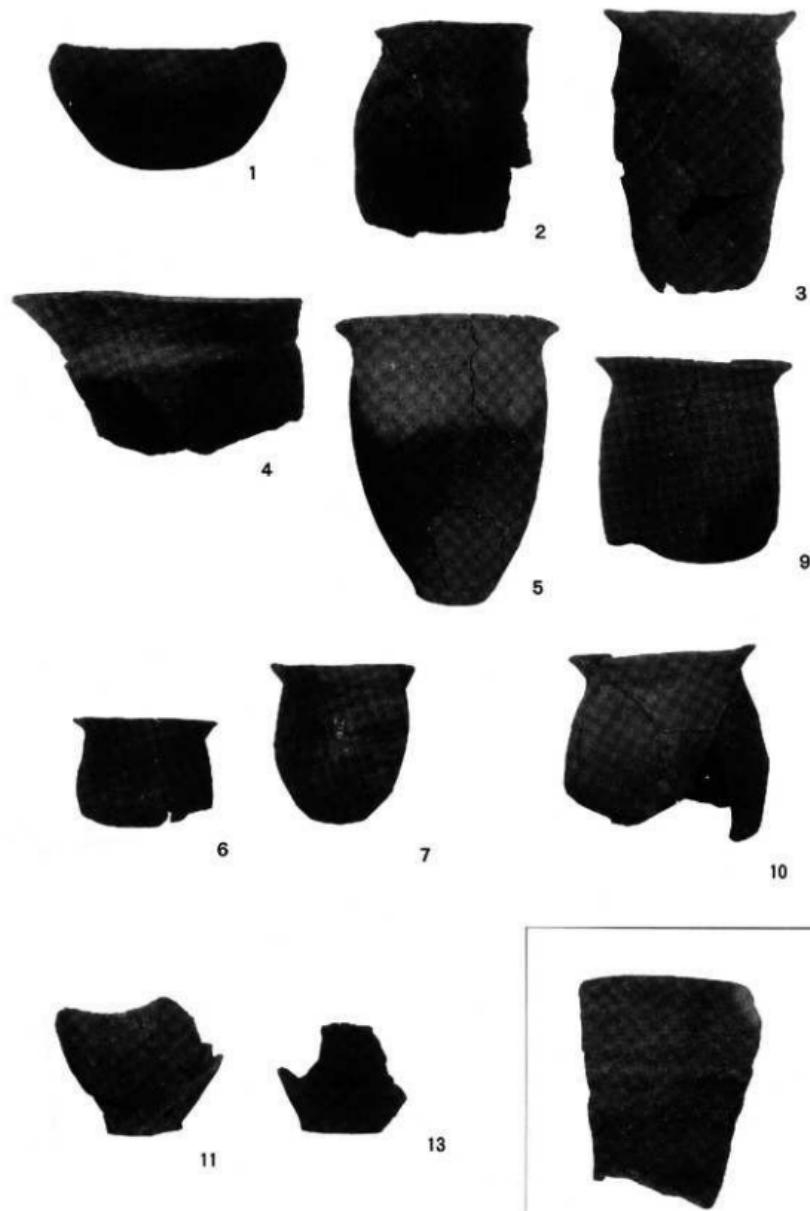
10号住居址出土遗物



11号住居址出土遗物



12号住居址出土遗物



13号住居址出土遗物

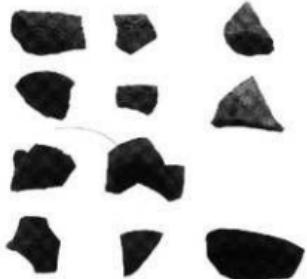
1号土坑出土遗物



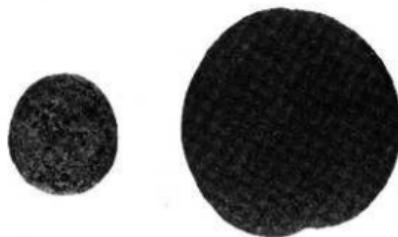
1号沟出土遗物



2号沟出土遗物



3号沟出土遗物



遗沟外出土遗物

後田第2遺跡

1996年 3月15日印刷

1996年 3月31日発行

発行 薩摩市遺跡調査会
薩摩市教育委員会
〒407 山梨県薩摩市水神一丁目3番1号
TEL 0551-22-1111 (代)

印刷 有限会社 タクト / 印刷・デザイン

